

藤並地区遺跡

― 県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

二〇一二年三月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

― 県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 ―

2012 年 3 月

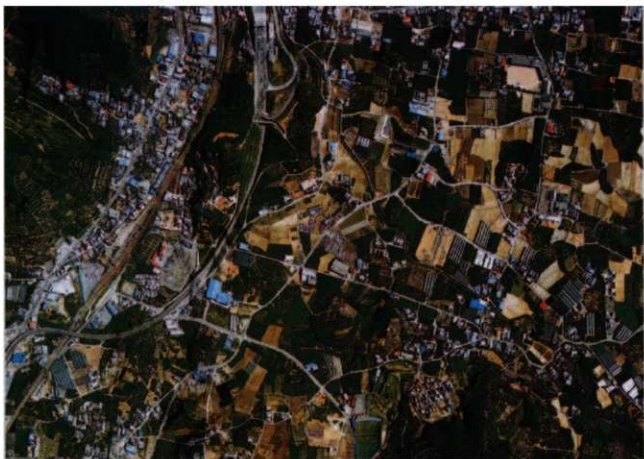
公益財団法人 和歌山県文化財センター

藤並地区遺跡

— 県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 —

2012 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



1 藤並地区遺跡 航空写真 (1989年6月撮影)



2 航空写真 (手前は、2007-Ⅲ区: 東から)



序

有田川町は和歌山県の中部に位置し、高野山に源を発する有田川が町域の中央部を西に蛇行しながら流れています。藤並地区遺跡は、この有田川の南側に位置しています。

藤並地区遺跡は、これまで海南湯浅道路及び湯浅御坊道路建設工事に伴う大規模な発掘調査によって、後期旧石器時代から中世にいたる数多くの遺構・遺物が発見されています。また、地元で良質な粘土が採掘できることから、遺跡内とその周辺部には奈良時代の須恵器や瓦を生産した窯跡が多く存在します。このような発掘調査事例の増加に伴い考古学的な手法による当該地域の歴史の解明が期待されているところです。

この度、当文化財センターでは、県道吉備金屋線道路改良工事に伴い平成18年度から同20年度にかけて発掘調査を実施しました。小規模な調査ではありましたが、後期旧石器時代の生活に関連する遺構・遺物を始め、奈良時代から室町時代にかけて断続的に続く人々の営みの痕跡を発見し、往時の当地域の景観の変遷の一端を明らかにすることができました。

平成23年度に出土遺物等整理作業を実施し、このたびその成果をまとめた発掘調査報告書を刊行することができました。本書が県民の皆様のみなならず、広く一般の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成24年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 森 郁 夫

例 言

- 1 本書は、和歌山県有田郡有田川町土生・明王寺・水尻に所在する藤並地区遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県道古備金屋線道路改良工事に先立つもので、平成18年度から同20年度に藤並地区遺跡の発掘調査業務を行い、同23年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査は、和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山文化財センターが、出土遺物等整理業務は、公益財団法人和歌山県文化財センターが和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査及び調査報告書の刊行に際し、有田川町教育委員会をはじめ、関係機関および地元の方々からご助言・ご協力を得た。
- 5 本書は、各発掘調査・出土遺物等整理業務担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。
- 6 図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 7 発掘調査及び調査報告書の作成にあたっては、次の諸氏から多大なご協力・ご教示を賜った。

川口修実（有田川町教育委員会）、北野隆亮（財団法人和歌山市都市整備公社）、中原正光（元 海南市立海南高等学校）、中屋志津男（元 和歌山県立青陵高等学校）

- 8 発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 9 本書に掲載した出土遺物は、各堆積遺物包含層・検出遺構の性格を推し量る必要のあるものを任意に抽出したもので、全ての出土遺物を網羅するものではない。
- 10 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調 査 組 織

事 務 局	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成23年度
事 務 局 長	熊崎 訓自	松田長次郎専務理事	松田長次郎専務理事	田中 洋次 酒部 三依
事務局次長		山本 新平		山本 高照
管 理 課 長	西本 悦子	山本 新平	酒部 三依	山本 高照
埋蔵文化財課				
埋蔵文化財課長	渋谷 高秀	村田 弘	村田 弘	村田 弘
発掘調査業務担当				
文化財専門員	富加見泰彦	山本 高照		
埋蔵文化財課主任	土井 孝之	土井 孝之	土井 孝之	
技師				岩井 顕彦
出土遺物整理業務担当				土井 孝之

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して行った。
- 2 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 3 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P. +）表示である。
- 4 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードと調査地区は、以下のとおりである。

06-21・032	（2006年度-旧吉備町・藤並地区遺跡）	I区～Ⅲ区
07-21・032	（2007年度-旧吉備町・藤並地区遺跡）	I区～Ⅲ区
08-21・032	（2008年度-旧吉備町・藤並地区遺跡）	I区～Ⅶ区

 出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。
- 5 地区割の詳細については、本文の第Ⅱ章第2節に記述する。
- 6 遺構番号と出土遺物登録番号は、当センター「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006年4月）に準拠して、各年度の調査区毎に算用数字の1からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類（遺構の性格）を付した。但し、2008-Ⅲ区と2008-Ⅶ区は、同一遺構が繋がるため同一遺構番号を使用した場合もある。また、各調査区には当該年度の西暦年を冠して記述する。

例： 2006-I区52石列状遺構、2007-Ⅲ区1溝、2008-Ⅲ区1粘土採掘坑

- 7 本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、攪乱でケバの表現を各々変えている。



- 8 本書に掲載した遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。但し、古代から中世の土器類に201から、旧石器・縄文時代の石器・弥生土器・その他の石器・石製品・銭貨に301から付したものは写真図版のみである。
- 9 遺物実測図の縮尺は、原則として土器・礫石器類は1/3、旧石器・打製石器類は3/4、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 10 調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2000年版）を使用した。
 土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第Ⅰ章 藤並地区遺跡の歴史的環境	1
第1節 遺跡の地理的環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	1
第3節 調査の経緯と経過（既往の調査）	5
第Ⅱ章 発掘調査・出土遺物整理の方法	8
第1節 調査現場の記録作業	8
1 写真撮影作業	8
2 実測図作成作業	8
3 航空写真撮影・基準点測量	8
第2節 調査地の位置と地区割	9
第3節 出土遺物等資料の整理	12
1 出土遺物応急整理	12
2 出土遺物等整理業務	12
第Ⅲ章 各年度の調査成果と出土遺物	14
第1節 第1次調査（2006年度）	14
1 調査の概要	14
2 2006－Ⅰ区	14
3 2006－Ⅱ区	16
4 2006－Ⅲ区	18
5 小結	19
第2節 第2次調査（2007年度）	20
1 調査の概要	20
2 2007－Ⅰ区	20
3 2007－Ⅱ区	21
4 2007－Ⅲ区	22
5 小結	25
第3節 第3・4次調査（2008年度）	26
1 調査の概要	26
2 2008－Ⅰ区	27
3 2008－Ⅳ区	28
4 2008－Ⅵ区	28
5 2008－Ⅱ区	30
6 2008－Ⅴ区	31
7 2008－Ⅲ区	31
8 2008－Ⅶ区	33
9 小結	35
第Ⅳ章 総括	37
調査遺構図面	38
出土遺物実測図	54
出土遺物一覧	62
報告書抄録	
写真図版遺構・遺物	

挿図目次

図1	有田川町西端部(旧吉備町)の地形と地質	1	図27	2007-Ⅲ区	1溝断面土層図	43
図2	藤並地区遺跡と周辺の遺跡	2	図28	2007-Ⅲ区	6土坑実測図	44
図3	既往の調査地点位置図	7	図29	2008-Ⅰ区	調査遺構全体図	45
図4	調査範囲と地区割(100m区画)	10	図30	2008-Ⅰ区	基本土層 調査区北東壁断面土層	45
図5	調査位置と区画割(4m区画)	11	図31	2008-Ⅳ区	調査遺構全体図	46
図6	2006-Ⅰ・Ⅱ区 調査遺構全体図	38	図32	2008-Ⅳ区	基本土層 調査区北壁断面土層	46
図7	2006-Ⅱ区 基本土層 調査区北壁断面土層	38	図33	2008-Ⅵ区	調査遺構全体図	47
図8	2006-Ⅱ区 基本土層 調査区南壁断面土層	38	図34	2008-Ⅵ区	基本土層 調査区南東壁断面土層	47
図9	2006-Ⅰ区 51谷状落ちの基本土層 土層断面土層	38	図35	2008-Ⅵ区	11土坑実測図	47
図10	2006-Ⅰ区 52石列状遺構実測図	39	図36	2008-Ⅵ区	1溝断面土層図	48
図11	2006-Ⅰ区 52石列状遺構断面土層図	39	図37	2008-Ⅱ区	調査遺構全体図	49
図12	2006-Ⅰ区 53粘土探掘土坑実測図	39	図38	2008-Ⅱ区	第3層系包含層下面遺構	49
図13	2006-Ⅲ区 調査遺構全体図	40	図39	2008-Ⅱ区	基本土層 調査区北壁断面土層	49
図14	2006-Ⅲ区 基本土層 調査区東壁断面土層	40	図40	2008-Ⅱ区	掘立柱建物1実測図	50
図15	2006-Ⅲ区 各土坑実測図	40	図41	2008-Ⅲ・Ⅶ区上位面		
図16	2007-Ⅰ区 調査遺構全体図	41		調査遺構全体図		51-52
図17	2007-Ⅰ区 基本土層 調査区北壁断面土層	41	図42	2008-Ⅶ区 基本土層		
図18	2007-Ⅰ区 23土坑調査区西壁断面土層	41		調査区南壁断面土層		51-52
図19	2007-Ⅰ区 13土坑実測図	41	図43	2008-Ⅲ区 4土坑実測図		51-52
図20	2007-Ⅱ区 調査遺構全体図	42	図45	2008-Ⅶ区下位面 101土坑実測図		51-52
図21	2007-Ⅱ区 基本土層 調査区西壁断面土層	42	図45	2008-Ⅶ区下位面 調査遺構全体図		53
図22	2007-Ⅱ区 5土坑実測図	42	図46	出土遺物実測図1		54
図23	2007-Ⅱ区 11土坑実測図	42	図47	出土遺物実測図2		55
図24	2007-Ⅱ区 18噴砂と中世小溝の關係	42	図48	出土遺物実測図3		56
	調査区西壁断面土層	42	図49	出土遺物実測図4		57
図25	2007-Ⅲ区 調査遺構全体図	43	図50	出土遺物実測図5		58
図26	2007-Ⅲ区 基本土層 調査区南西壁断面土層	43	図51	出土遺物実測図6		59

表目次

表1	藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧	3	表3	各地区出土遺物数量	60
表2	発掘調査・出土遺物等整理業務工程表	9	表4	各地区出土遺物接合関係一覧	61

写真目次

写真1	土生池遺跡出土ナイフ形石器	4	写真16	2008-Ⅶ区下位面 粗砂細砂からの旧石器遺物の抽出(応急整理)	12
写真2	田嶋尾中遺跡出土弥生土器	4	写真17	出土遺物(土器)への登録コード注記	13
写真3	旧吉備中学校校庭遺跡第1次調査		写真18	遺物の接合	13
	全景(北から)	4	写真19	遺物充填材による補強・復元	13
写真4	旧吉備中学校校庭遺跡第4次調査		写真20	出土遺物の実測図作成	13
	堅穴建物20・22(南西から)	4	写真21	遺物実測図トレース作成	13
写真5	天満1号墳(泣沢女の古墳)石室(南から)	5	写真22	実測遺物台帳登録データ入力	13
写真6	天満1遺跡中世墓出土和鏡	5	写真23	2006-Ⅰ区E11-f22 調査区東壁断面土層(西から)	15
写真7	藤並地区遺跡1991年度Ⅲ地区出土旧石器	5	写真24	2006-Ⅰ区E11-f23 53粘土探掘	
写真8	藤並地区遺跡1991年度Ⅲ地区掘出			土坑掘削状況(北西から)	15
	掘立柱建物	6	写真25	2006-Ⅰ区 52石列状遺構掘削状況	
写真9	2006-Ⅰ区 調査遺構全景と湯浅御坊道路			(北北西から)	16
	(北北東上空から)	6	写真26	2006-Ⅰ区 E11-h・i22 51谷状落ち	
写真10	2007-Ⅲ区 1溝掘削状況(南東から)	6		土層採取状況(北東から)	16
写真11	有田川町2007年度調査出土香炉蓋	7	写真27	2006-Ⅱ区E12-n9 調査区南壁断面土層	
写真12	2008-Ⅱ区東側 遺構位置全体図作成			(北から)	17
	(北寄り西から)	8	写真28	2006-Ⅱ区E12-15	
写真13	2008-Ⅲ区 航空写真撮影	8		18土坑南西-北東断面土層(南東から)	17
写真14	出土遺物台帳登録(応急整理)	12	写真29	2006-Ⅲ区北半E13-m23 調査区東壁断面土層	
写真15	2008-Ⅲ区下位面 粗砂細砂洗浄作業	12			
	(応急整理)	12			

(西から).....	18	写真41	2007-Ⅲ区C11-k25・C12-k1 4土坑 (北から).....	24
写真30 2006-Ⅲ区北半E14-m1 11土坑断面土 (南東から).....	18	写真42 2007-Ⅲ区 6土坑出土の石器剥片.....	25	
写真31 2006-Ⅲ区南半 小溝群(北東から).....	19	写真43 2008-Ⅰ区西側西 水田区画(南西から).....	27	
写真32 2007-Ⅰ区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から).....	20	写真44 2008-Ⅳ区F12-d6 調査区北壁断面土層 (南南東から).....	28	
写真33 2007-Ⅰ区南半E13-y7 1土坑調査区西壁 断面土層(東南東から).....	21	写真45 2008-Ⅳ区E12-x7・F12-a7 小溝群 (西から).....	28	
写真34 2007-Ⅱ区E13-o6 5土坑検出状況 (北北東から).....	22	写真46 2008-Ⅵ区南西半F12-p15 1溝調査区南東壁断面土層(西から).....	29	
写真35 2007-Ⅱ区E13-p7 18噴砂調査区西壁 断面土層(東から).....	22	写真47 2008-Ⅱ区東側E12-n・m19-20 10遺構 (北から).....	31	
写真36 2007-Ⅲ区 調査区南西壁断面土層 (南東から).....	23	写真48 2008-Ⅲ区C11-n24・25 4土坑検出状況 (北から).....	32	
写真37 2007-Ⅲ区C12-g1 2井戸東西断面土層 (南から).....	23	写真49 2008-Ⅲ区 1-3粘土探掘坑(東北東から).....	32	
写真38 2007-Ⅲ区 1溝-5井戸間の断面土層 (東南東から).....	23	写真50 2008-Ⅷ区下位面C12-r3・4 101土坑 検出状況(南寄り西から).....	34	
写真39 2007-Ⅲ区 1溝遺物出土状況(南南東から).....	24	写真51 県文化遺産課施設調査30トレンチ調査区 南壁断面土層(北から).....	35	
写真40 2007-Ⅲ区C11-k25・C12-k1 6土坑 (北東から).....	24	写真52 2008-Ⅳ区 道路工事掘削部分 西壁断面土層(東から).....	35	

写真図版目次

写真図版1 2006-Ⅰ区 検出遺構

- 2006-Ⅰ区 調査遺構全景(北東上空から)
 - 2006-Ⅰ区 調査遺構全景(南西から)
 - 2006-Ⅰ区 粘土探掘土坑群と51谷状落ち肩部(東北東から)
- 写真図版2 2006-Ⅰ区 検出遺構
- 2006-Ⅰ区 51谷状落ち断面土層全景(東南東から)
 - 2006-Ⅰ区 51谷状落ち北半部断面土層細部(東南東から)
 - 2006-Ⅰ区E11-h・t22
51谷状落ち断面土層細部(北東から)

写真図版3 2006-Ⅰ区 検出遺構

- 2006-Ⅰ区 52石列状遺構(南南東から)
 - 2006-Ⅰ区E11-g19
52石列状遺構の断面状況(南南東から)
 - 2006-Ⅰ区E11-g19
52石列状遺構に係る遺物出土状況(西南西から)
- 写真図版4 2006-Ⅰ区 検出遺構
- 2006-Ⅰ区E11-f23 粘土探掘土坑群の状況(東北東から)
 - 2006-Ⅰ区E11-f23
53粘土探掘土坑東西断面土層(南南東から)
 - 2006-Ⅰ区E11-h25
調査区南東壁第6層系路み込み遺構の遺物出土状況(北西から)

写真図版5 2006-Ⅱ区 検出遺構

- 2006-Ⅱ区 調査遺構全景(真上から;右側が北)
- 2006-Ⅱ区 調査遺構全景(北東から)
- 2006-Ⅱ区 土坑群の掘削状況(西南西から)

写真図版6 2006-Ⅱ区 検出遺構

- 2006-Ⅱ区E12-o5・6 6土坑東西断面土層(南から)
- 2006-Ⅱ区E12-i11 調査区北壁断面土層細部(南から)
- 2006-Ⅱ区E12-g5 鉄砲弾出土状況細部(南南西から)

写真図版7 2006-Ⅲ区 検出遺構

- 2006-Ⅲ区北半 調査遺構全景(真上から;右側が北)
- 2006-Ⅲ区北半 調査遺構全景(南から)
- 2006-Ⅲ区北半 土坑群掘削状況(南東から)

写真図版8 2006-Ⅲ区 検出遺構

- 2006-Ⅲ区南半 調査遺構全景(真上から;左側が北)
- 2006-Ⅲ区南半 調査遺構検出状況:小溝群(北北東から)
- 2006-Ⅲ区南半 地震による液状化の砂礫(北北西から)

写真図版9 2007-Ⅰ区 検出遺構

- 2007-Ⅰ区北半 調査遺構全景(真上から;右側が北)
- 2007-Ⅰ区北半 調査遺構全景(南から)
- 2007-Ⅰ区北半E13-x・y・6・7 土坑群(東から)

写真図版10 2007-Ⅰ区 検出遺構

- 2007-Ⅰ区北半E13-y7
1土坑調査区西壁断面土層(東から)
- 2007-Ⅰ区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から)
- 2007-Ⅰ区南半 調査遺構全景(北上空から)

写真図版11 2007-Ⅰ区 検出遺構

- 2007-Ⅰ区南半 調査遺構全景(南から)
- 2007-Ⅰ区南半E13-x9・10 13土坑東西断面土層(北から)
- 2007-Ⅰ区南半E13-y7
23土坑断面土層:調査区西壁(東から)

写真図版12 2007-Ⅱ区 検出遺構

- 2007-Ⅱ区 調査遺構全景(北上空から)
- 2007-Ⅱ区 調査遺構全景(南から)
- 2007-Ⅱ区 土坑群東西断面土層(北北東から)

写真図版13 2007-Ⅱ区 検出遺構

- 2007-Ⅱ区E13-o6 5土坑東西断面土層(北北東から)
- 2007-Ⅱ区E13-o・p6・7
19・18噴砂の砂礫検出状況(北東から)
- 2007-Ⅱ区E13-p7
18噴砂と中世小溝の関係細部:調査区西壁断面土層(東から)

写真図版14 2007-Ⅲ区 検出遺構

- 2007-Ⅲ区 調査遺構全景(真上から;下側が北)
- 2007-Ⅲ区 調査遺構全景(東から)
- 2007-Ⅲ区 1溝完掘状況と6土坑検出状況(北西から)

写真図版15 2007-Ⅲ区 検出遺構

- 2007-Ⅲ区C12-j1・2 1溝断面土層(北西から)

- 2 2007-Ⅲ区C12-g1
柱穴群断面土層:調査区北東壁(西南西から)
- 3 2007-Ⅲ区C11-k25
5 井戸掘削状況と調査区北壁断面土層(南東から)
- 写真図版16 2007-Ⅲ区 検出遺構
- 1 2007-Ⅲ区C11-k25-C12-k1
6 土坑掘削状況(北北東から)
- 2 2007-Ⅲ区C11-k25-C12-k1
6 土坑断面土層(北北東から)
- 3 2007-Ⅲ区C12-j1 3 土坑(東から)
- 4 2007-Ⅲ区C12-j1 3 土坑南北断面土層(東から)
- 写真図版17 2008-I・Ⅳ区 検出遺構
- 1 2008-I区・Ⅳ区
調査遺構全景デジタルモザイク(真上から:上側が北)
- 2 2008-I区西側西 水田区画検出状況(南南西から)
- 3 2008-I区西側東 水田踏み込み検出状況(東から)
- 写真図版18 2008-I区 検出遺構
- 1 2008-I区東側東 水田踏み込み検出状況(東北東から)
- 2 2008-I区東側東F12-e7 水田踏み込み検出状況細部
(東北東から)
- 3 2008-I区西側東 調査区北東壁断面土層細部(南西から)
- 写真図版19 2008-Ⅳ区 検出遺構
- 1 2008-Ⅳ区 調査遺構全景(真上から:上側が北)
- 2 2008-Ⅳ区 水田面掘下げ状況(西北西から)
- 3 2008-Ⅳ区東側 調査遺構全景(北から)
- 写真図版20 2008-Ⅵ区 検出遺構
- 1 2008-Ⅵ区南西半・南西端 調査遺構全景(北上空から)
- 2 2008-Ⅵ区南西半 1 溝全景(西南西から)
- 3 2008-Ⅵ区南西端 調査遺構全景(南南西から)
- 写真図版21 2008-Ⅵ区 検出遺構
- 1 2008-Ⅵ区北東半 遺構検出状況全景(南西から)
- 2 2008-Ⅵ区北東半F12-o13
11土坑掘削状況・南北断面土層(北寄り西から)
- 3 2008-Ⅵ区北東半F12-n13-o14 調査区南東壁断面土層
(北西から)
- 写真図版22 2008-II区 検出遺構
- 1 2008-II区東側 調査遺構全景(北から)
- 2 2008-II区東側E12-m19周辺 第3層下面遺構(西から)
- 3 2008-II区東側E12-m19
包含層第3層内遺物出土状況(北から)
- 写真図版23 2008-II区 検出遺構
- 1 2008-II区西側 調査遺構全景(東上空から:右側が北)
- 2 2008-II区西側 調査遺構全景(北から)
- 3 2008-II区西側E12-o・p17-19 掘立柱建物1(東から)
- 写真図版24 2008-II区 検出遺構
- 1 2008-II区西側E12-o17 掘立柱建物1
33柱南北断面土層(西から)
- 2 2008-II区西側E12-o・p22 21土坑(南南西から)
- 3 2008-II区西側E12-q22-23
補足調査 調査区西壁断面土層(東から)
- 写真図版25 2008-Ⅲ区 検出遺構
- 1 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(真上から:手前右下が北)
- 2 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(西南西から)
- 3 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(東北東から)
- 写真図版26 2008-Ⅲ区 検出遺構
- 1 2008-Ⅲ区東半 土坑群・落ち遺構全景(西南西から)
- 2 2008-Ⅲ区C12-t1 10土坑(東北東から)
- 3 2008-Ⅲ区C12-s・t2 補足調査
21土坑調査区南壁断面土層(北北西から)

- 写真図版27 2008-V区上位面 検出遺構
- 1 2008-V区上位面 調査遺構全景(東北東から)
- 2 2008-V区上位面東半部 土坑群・落ち遺構全景(西から)
- 3 2008-V区上位面東半部 調査遺構全景(西南西から)
- 写真図版28 2008-V区上位面 検出遺構
- 1 2008-V区上位面
8落ち・8落ち埋土掘削後の遺構(東北東から)
- 2 2008-V区上位面C12-s2・3周辺
20・49・50土坑・51柱穴(北北西から)
- 3 2008-V区上位面C12-o・p1 56・57・58土坑(北北西から)
- 写真図版29 2008-V区下位面 検出遺構
- 1 2008-V区下位面
調査遺構全景(真上から:手前が北北西)
- 2 2008-V区下位面 粗砂細砂層下面遺構全景(東北東から)
- 3 2008-V区下位面C12-r3・4 101土坑(南寄り西から)
- 写真図版30 2008-V区下位面 検出遺構
- 1 2008-V区下位面 調査区北壁断面土層(南南西から)
- 2 2008-V区下位面 調査区南壁断面土層
調査区東端から10~20m(北北西から)
- 3 2008-V区下位面 調査区南壁断面土層
調査区東端から20~35m(北北西から)
- 写真図版31 2008-V区下位面 補足調査
- 1 2008-V区下位面C12-p3 補足調査A
調査区南壁断面土層(北北西から)
- 2 2008-V区下位面C12-s・t4 補足調査B
調査区南壁断面土層(北北西から)
- 写真図版32 出土遺物 1
- 写真図版33 出土遺物 2
- 写真図版34 出土遺物 3
- 写真図版35 出土遺物 4
- 写真図版36 出土遺物 5
- 写真図版37 出土遺物 6
- 写真図版38 出土遺物 7
- 写真図版39 出土遺物 8
- 写真図版40 出土遺物 9

第Ⅰ章 藤並地区遺跡の歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

藤並地区遺跡(図2の32)は、和歌山県有田郡有田川町(旧吉備町・旧金屋町・旧清水町)土生・明王寺・水尻に所在し、有田川河口から約10km遡った左岸に位置する。有田川町の内、旧吉備町域は、紀の川下流域を中心に広がる和歌山市・海南市の南に位置し、これらとは長嶺山脈を介して接しており、有田川流域ではもっとも安定した平野部が広がる地域である。

旧吉備町付近の地形は、有田川右岸では片岩を主体とする三波川変成帯からなる山地地形が河川近くまで迫ってきており、河成段丘も発達しない。一方、藤並地区遺跡が所在する有田川左岸は、中世代白亜紀の地層からなる緩やかな傾斜を示す山地地形が広がり、その間に小河川により形成された小規模な開析谷が多く存在する。さらに、山地北斜面では浸食作用による河成段丘面が形成され、その下位には堆積作用による氾濫原および沖積平野部が発達する。旧石器時代には山地地形上に、縄文時代には段丘上に、弥生時代以降には主として沖積平野部と段丘上に各々の時代の集落遺跡が展開している。

藤並地区遺跡は沖積平野部の南西端に立地しつつも、雲雀山からの派生丘陵や土生山・水晶山・神楽山などの標高60~130mほどの山地地形に囲まれている。そのため、標高20m付近に位置するにも関わらず、盆地状の湿地に近い条件下に位置している。

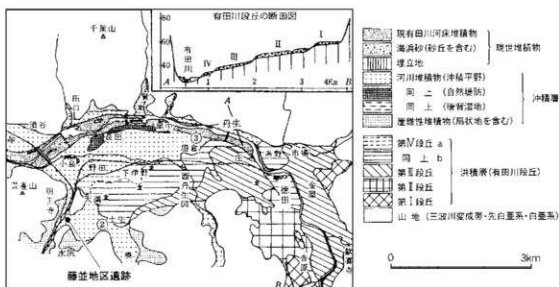


図1 有田川町西端部(旧吉備町域)の地形と地質

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

藤並地区遺跡(図2の32、以下、「図2」を省略)が所在する有田川下流域は、旧石器時代の遺跡を皮切りに遺跡の分布が比較的密に認められる地域である。付近には沖積平野と河成段丘が発達し、有田川流域では最も広い平野が広がっており、この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡は多く、縦長剥片を創出するための頁岩製石核を出土した野田地区遺跡(38)、サヌ



図2 藤並地区遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

表1 藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	摘要
有田川町(旧古備町域)						
1	田殿庵寺跡	田口	寺院跡	奈良	丘陵裾	瓦
2	大谷古墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	須恵器
3	大谷2号墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	円墳、鉄刀
4	篠部印跡	大谷	寺院跡	平安～室町	扇状地	土師器、須恵器、瓦器、仏像瓦、文字瓦、石塔
5	賢遺跡	賢	散布地	奈良	扇状地	
6	夏間の森遺跡	出	散布地	弥生	山麓	弥生土器
7	夏間の森祭壇遺跡	出	祭壇跡	弥生	丘陵頂	神奈備形山岩、弥生土器
8	最勝寺跡	出	寺院跡	平安～室町	丘陵	瓦、瓦器、石塔
9	田殿尾中遺跡	尾中	集落跡	弥生～室町	沖積平野	竈穴建物、環壕、水田跡、弥生土器、石器、瓦器
11	旧古備中学校校庭遺跡	下津野	集落跡	弥生～鎌倉	河岸段丘	竈穴建物、掘立柱建物、銚子造遺構、弥生土器、石器、小型青銅鏡、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器
12	野田の宝篋印塔	野田	石塔	南北朝	河岸段丘	貞和二年銘、泉史跡
13	観音寺跡	野田	寺院跡	平安～室町	河岸段丘	布目瓦、瓦器
14	藤並遺跡	天満	散布地	古墳	河岸段丘	竈穴建物、掘立柱建物、櫓、土師器、須恵器
15	天満古墳群	天満	古墳群	古墳	河岸段丘	
15の-1	天満1号墳 (泣沢女の古墳)	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、須恵器、耳環、刀子、ガラス玉、鈴帯、人骨、泉史跡
15の-2	天満2号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
15の-3	天満3号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
16	天満1遺跡	天満	集落跡	縄文～室町	河岸段丘	竈穴建物、掘立柱建物、土坑墓、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、和紙(花文散敷鳥籠)、板状鉄製品、刀子
17	天満II遺跡	天満	散布地	古墳、鎌倉	河岸段丘	土師器、瓦器
18	宗祇法師屋敷跡	下津野	旧宅	江戸	河岸段丘	櫓、古井戸、泉史跡
19	藤並城跡	下津野	城跡	鎌倉～室町	河岸段丘	櫓、土塁
20	石ヶ谷遺跡	西丹生園	集落跡	古墳～室町	丘陵裾	掘立柱建物、井戸、土坑墓、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦
21	羽釜古窯跡	土生	窯跡	中世	河岸段丘	瓦器
22	城山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡3基、須恵器、瓦
23	地蔵山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡2基、須恵器、瓦(奈良～平安時代)
24	風呂の谷窯跡群	土生	窯跡	奈良～平安	丘陵裾	窯跡4基、須恵器、瓦(奈良時代)
25	土生池遺跡	土生	散布地	旧石器、平安	山麓	ナイフ形石器、削器、鏃、石核、土師器、黒色土器、硬石建物、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨
26	長楽寺跡	植野	寺院跡	平安～鎌倉	山麓	
27	八幡神社板碑	奥	碑	室町	丘陵裾	
28	八幡神社宝篋印塔	奥	石塔	室町	丘陵裾	
29	地蔵山遺跡	土生	散布地	平安	河岸段丘	
30	奥の宝篋及び宝篋印塔	奥	石塔	南北朝	河岸段丘	宝篋(文中三年銘)、宝篋印塔(文中二年銘)、泉史跡
31	奥I遺跡	奥	散布地	平安	丘陵裾	瓦器
32	藤並地区遺跡	土生 明王寺 水尻	散布地	旧石器～鎌倉	河岸段丘	掘立柱建物、土坑墓群、ナイフ形石器、有舌尖頭器、土師器、須恵器、陶棺、布目瓦、円面硯、瓦器、国産陶器、山茶碗、輸入陶磁器、板碑
33	岩室城跡	田口	城跡	中世	山頂	湯浅氏・畠山氏の城、天正13年落城、二の丸・三の丸の平坦部が残存
35	奥II遺跡	奥	出土地	縄文	丘陵	有舌尖頭器
36	土生池南岸遺跡	土生	出土地	古墳	丘陵	須恵器壺
37	土生池須恵器窯跡	土生	窯跡	奈良	丘陵	須恵器(坏、坏蓋、高坏、甕、甕、水甕形製品)
38	野田地区遺跡	野田	寺院跡ほか	旧石器～中世	河岸段丘、沼澤原	竈穴建物、掘立柱建物、宝篋印塔、大溝、石核、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、建築材、棹子、木器、柿経、下駄など
39	湯浅城跡	熊井	城跡	中世	丘陵端	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
40	小島遺跡	小島	散布地	弥生、室町	丘陵	弥生土器、石塔
42	崎山屋敷跡	井口	館跡	鎌倉	丘陵	
43	勝真山館跡	賢・船坂	館跡	中世	山頂	
有田市						
17	岩室城跡	宮原町須谷	城跡	中世	山頂	有田川町33に同じ
18	岩室遺跡	宮原町須谷	散布地	弥生	丘陵	弥生土器
22	糸我地蔵堂遺跡	糸我町中蔵	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
29	雲雀山遺跡	糸我町中蔵	散布地	弥生	山麓	弥生土器
46	城跡	地蔵堂	城跡	中世	丘陵	
湯浅町						
5	湯浅城跡	青木	城跡	中世	丘陵	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
6	青木I遺跡	青木	散布地	室町	河岸段丘	瓦器
7	青木II遺跡	青木	散布地	弥生	河岸段丘	弥生土器、土師器
8	青木III遺跡	青木	散布地	古墳	河岸段丘	須恵器(灰須恵)
10	山田北山遺跡	山田	散布地	室町	丘陵裾	鉄鉤、瓦器、明鏡
11	山田庵寺	山田	寺院跡	平安	丘陵裾	蓮華文軒瓦
12	山田堂山遺跡	山田	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
15	青木大塚墓	青木	墳墓	奈良	山麓	蔵骨器、和同開珎、新金具、木炭
17	広保山城跡	吉川	城跡	平安	山頂	曲輪、空壕、湯浅宗重築城
21	帝の跡	山田	館跡	中世	河岸段丘	

遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地名表』
2007年3月31日発行を一部改変・補筆

カイト製のナイフ形石器を出土した鷹巣池遺跡（旧吉備町徳田）、また、これまでの発掘調査で土生池遺跡（25）・藤並地区遺跡からはナイフ形石器（写真1）や搔器・削器などが多数発見されている。その他、藤並地区遺跡からは、有舌尖頭器・石鏃・矢柄研磨器や縄文時代草創期の土器片が出土している。

縄文時代は、陸地側に近い島嶼や河成段丘上に分布し、前期末から晩期までの時期の縄文土器が確認される。主要な遺跡としては、中期初頭の標識遺跡である鷹島遺跡（有田郡広川町）や地ノ島遺跡（有田市初島町）などがあげられ、付近には中期の土器片と石棒が発見された野田地区遺跡、後期中葉の北白川上層式併行の土器や耳栓などが発見された糸野遺跡（旧金屋町糸野）などが所在する。

弥生時代には、平野部に環濠集落である田殿尾中遺跡（10）（写真2）が存在する。数次にわたる調査により、弥生時代中期には拠点的な集落であったことが明らかになっている。集落は中期中葉に形成され始め、後期前半の空白ののち後期後半から古墳時代初頭まで展開する。田殿尾中遺跡に空白が認められる後期前半には、当遺跡から有田川河口にかけての丘陵上に遺物が散布しており、野井奥の谷遺跡（有田市千田）・星尾山遺跡（有田市星尾）などの高地性集落が展開していたと考えられる。天満Ⅰ遺跡において、少量ながらも弥生時代前期・中期の土器の出土も見逃せないところである。また、2005（平成17）年度以後、複数次の調査において旧吉備中学校校庭遺跡（11）（写真3・4）では、方形周溝墓を伴う弥生時代中期後葉から後期末に継続する集落が調査されている。

古墳時代は、田殿尾中遺跡で前期の方形竪穴建物が6棟、野田地区遺跡で溝2条が検出され、集落の様相が徐々に解明されつつある。また、野田地区遺跡の南西に隣接する段丘上では、天満Ⅰ・Ⅱ遺跡（16・17）や藤並遺跡（14）において古墳時代の遺物の散布が確認されていたが、天満Ⅰ遺跡において2000（平成12）年度の調査で弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物1棟が、2003（平成15）年

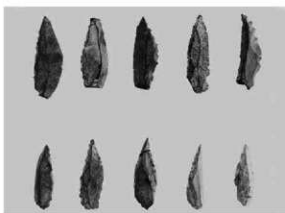


写真1 土生池遺跡出土のナイフ形石器



写真2 田殿尾中遺跡出土の弥生土器



写真3 旧吉備中学校校庭遺跡第1次調査 全景（北から）



写真4 旧吉備中学校校庭遺跡第4次調査
竪穴建物 20・22（南西から）

度の調査で古墳時代中期の堅穴建物 1 棟が検出され段丘上の集落が確認されている。古墳は、有田川流域の丘陵上および海岸部に築造され、中期古墳を一部含むものの後期古墳が主体である。付近では、藤並神社境内に天満古墳群（15）が形成されている。天満 1 号墳（泣沢女の古墳）（写真 5）は、直径 22～24 m の円墳で、内部主体は玄室前道がつく巨石使用の両袖式横穴式石室である。石室内からは銅芯金板張耳環や土器類のほか歯が出土した。これらの遺物から 7 世紀中葉に築造され、被葬者に 12 歳の女性が含まれる公算が大きいと考えられている。天満 1 号墳は、古墳時代では県内でも珍しい巨石積みみの石室をもつ古墳で、発掘調査され復元整備されている。



写真 5 天満 1 号墳（泣沢女の古墳）石室（南から）



写真 6 天満 1 遺跡中世墓出土和鏡

また、古代の須恵器を焼成した窯跡も多く土生池須恵器窯跡（37）などが明らかにされており、歴史時代においては川原寺軒丸瓦・重弧文軒平瓦が採集された田殿庵寺しか知られておらず、官衙遺跡や寺院跡などの様相はよく分かっていない。しかし旧古備町大字土生・水尻では窯業に適した良質な粘土が採掘され、城山窯跡群（22）・地藏山窯跡群（23）・風呂の谷窯跡群（24）などでは奈良時代から平安時代までの古代紀伊国でも最大級の須恵器・瓦窯跡群が展開する。中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満 1 遺跡で和鏡（写真 6）や刀子を副葬した土葬墓が見つかった。

このように、藤並地区遺跡の周辺部は、原始・古代より有田地方の中心的地域であったと言える。

第3節 調査の経緯と経過（既往の調査）（図3～5）

藤並地区遺跡は、1980（昭和 55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる有田インターチェンジから国道 42 号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われた。その結果を受けて、本格的な調査が必要と判断された野田地区遺跡および藤並地区遺跡の範囲において、1980（昭和 55）年度から 1981（昭和 56）年度にかけて調査が実施された。

次いで、近畿中枢部から紀南への円滑な物資の輸送・観光資源の活性化などに伴う交通網の整備を意図した一般国道 42 号湯浅御坊道路（写真 9）の建設工事に先立ち、1989（平成元）年度から 1993（平

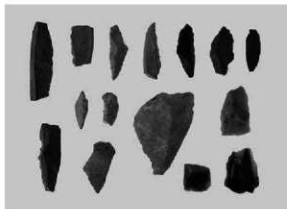


写真 7 藤並地区遺跡 1991 年度 M 地区出土土器器

成5) 年度までの5箇年あたり試掘調査を含めた発掘調査が実施されている(写真7・8)。

今回の調査の対象となった「県道吉備屋線」は、有田郡有田川町を横断する国道42号と国道424号を連絡し、阪和自動車道(高速自動車道近畿自動車道松原那智勝浦線)の有田インターチェンジへのアクセス道路ともなっている。現状では、「県道吉備屋線」は交通混雑の悪化と安全性の低下が進み、主要幹線道路として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となるバイパス路線は、現道の交通問題に対処し、地域に活力とゆとりをもたらすために2車線道路として整備することになった。

このような中、当地には藤並地区遺跡が所在するため、その取扱いについて和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課(以下、県文化遺産課とする)と和歌山県有田振興局建設部(以下、県建設部とする)との協議がなされた。その結果、一般国道42号湯浅御坊道路の隣接地においては、既往の調査成果を鑑みて本調査を実施する運びとなった。また、少し離れた範囲においては随時、県文化遺産課が確認調査を行い、その結果を受けて遺跡の取扱いについて協議がなされた。なお、2007(平成19)年度、及び2008(平成20)年度の調査に先立って行われた県文化遺産課と県建設部との協議では、既往の調査成果から随時「本発掘調査を要しない範囲」の設定が成された。

これらの経過の中で、2006(平成18)年度は、藤並地区遺跡全体の中では北端(2006-I区・II区)(写真9)ないしは北半部(2006-III区)に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計1,807㎡について実施した。何れも、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東側に位置する。調査では、鎌倉～室町時代の粘土採掘土坑・谷状落ち・石列状遺構・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による噴砂を確認した。

出土遺物の大半は、鎌倉時代の土器類で占められるが、旧石器時代の石器剥片、縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器・瓦、室町時代の土器類なども少量ある。鎌倉・室町時代の遺物には、砥石・鉄滓各数点、鉄砲弾1点がある。

2007(平成19)年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部(2007-I区・II区)ないしは北東部(2007-III区)(写真10)に該当する範囲で調査を行った。当該年度の調査は、3地区合計608㎡について実施した。調査では、平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土坑・



写真8 藤並地区道路1991年度「地区検出掘立柱建物」



写真9 2006-I区 調査遺構全景と湯浅御坊道路(北北東上空から)



写真10 2007-III区 I溝掘削状況(南東から)

井戸・溝・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、2006（平成18）年度と同様に地震による液状化の噴砂を確認した。

出土遺物の大半は、平安時代末～鎌倉時代の土器類で占められる。その他、2007（平成19）年度の調査時に旧石器時代と考えた土坑に伴って硬質頁岩製の剥片石器・石器剥片が、平安時代末～鎌倉時代の遺物に混じって奈良時代の須恵器・瓦、砥石などがある。

2008（平成20）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区）ないしは北東端（Ⅲ・Ⅶ区）に該当し、一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東西両側に位置する。このことから2007（平成19）年度と同様に旧石器時代、並びに奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の一端や北東端での遺跡の在り方が解明されるところであった。当該年度の調査は、7地区合計

2,237㎡について実施した。

なお、2008（平成20）年度の調査に先立って、2007（平成19）年度に有田川町教育委員会により2006-Ⅲ区の南側において調査が実施されている（町1区・町2区）。

調査は、阪和自動車道の4車線化事業に伴う町道拡幅工事に先立ち実施されたものである。調査では、弥生時代前期の可能性が考えられる自然流路、奈良時代から平安時代の溝1条、中世の水田区画などが検出された。奈良時代から平安時代の溝からは、須恵器の坏・甕・香炉蓋（写真11）、丸瓦・平瓦、陶棺などが出土している。この内、須恵器の香炉蓋は、鈕の形状が塔の相輪形を呈している点が特徴である。



写真11 有田川町 2007 年度調査出土香炉蓋



図3 既往の調査地点位置図（1：8,000）

第Ⅱ章 発掘調査・出土遺物整理の方法

第1節 調査現場の記録作業

藤並地区遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（6×7判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小判カメラ（35mm判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小型デジタルカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、速攻性に優れた小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。これは、従来の小判カメラ35mm判でのカラーネガフィルムの代替で、メモ記録としては非常に有効な手段である。

2 実測図作成作業（写真12）

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（縮尺=1/100）・全体の遺構平面実測図（縮尺=1/20 or 1/50）・個別遺構や遺物の出土状況図（縮尺=1/10 or 1/20）・個別遺構の断面土層図（縮尺=1/20）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺=1/20）などを記録として作成した。



写真12 2008-II区東側 遺構位置全体図作成
（北寄り西から）

3 航空写真撮影・基準点測量（図5、写真13）

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げ等のため、2006（平成18）年度に設置した3級基準点（藤並-1・藤並-2・藤並-3・藤並-4）から国土座標第VI系（世界測地系）により各年度各地区内に4級基準点の設置を実施した。併せて、4級基準点には水準測量も行っている。

発掘調査により検出した遺構は、ラジコンヘリで調査地全体の航空写真撮影を行った。

航空写真撮影及び基準点の設置は、2006-I～III区を「藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」と「藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で株式会社 共和に、2007-I～III区を「平成19年度 藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影」で株式会社 共和に、「平成19年度 藤並地区遺跡発掘調査に伴う基準点測量」で和歌山航測株式会社に、2008-I～IV区を「平成20年度 藤並地区遺跡発掘調査に伴う航空写真撮影・基準点測量」で株式会社 サンヨーナイスコーポレーションに、2008-VI・VII区を「平成20年度 藤並地区遺跡発掘調査（その2）」に伴う航空写真撮影・基準点測量」でワコウコンサルタント株式会社に業務委託して実施した。



写真13 2008-III区 航空写真撮影

今後の調査では、確認調査の結果、遺構密度が低いと判断されたため航空写真測量は実施していない。

表2 発掘調査・出土遺物等整理業務工程表

調査 年度	地区	平成 18 (2006) 年度												平成 19 (2007) 年度												平成 20 (2008) 年度												平成 23 (2011) 年度												
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
第 1 次	I 区																																																	
	II 区																																																	
	III 区																																																	
第 2 次	I 区																																																	
	II 区																																																	
	III 区																																																	
第 3 次	I 区																																																	
	II 区																																																	
	III 区																																																	
	IV 区																																																	
	V 区																																																	
第 4 次	VI 区																																																	
	VII 区																																																	
遺物等整理 報告書印刷																																																		

第2節 調査地の位置と地区割 (図4・5)

調査の地区割は、和歌山県内全域を同一条件で統一したものがいないため、和歌山県文化財センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して、今回の一連の調査に供するものを2006（平成18）年度に作成した。但し、同一地域において複数パターンの地区割を作成すると将来的に煩雑になると判断されたため、藤並地区遺跡の北側で2006（平成18）年度の上半期に調査を実施した野田地区遺跡の区画割を延長させて使用している。

調査地の地区割は、既往の調査および今後の調査に共通して使用できるように旧吉備町発行の縮尺1/2,500の「吉備町都市計画図」No.10・No.14（旧日本測地系により、昭和54年測量・平成6年修正：アジア航測株式会社調整）を基本として、世界測地系（国土地標第VI系）に変換した図面を作成して行った。調査地の地区割は国土地標第VI系（世界測地系）を使用し、野田地区遺跡を網羅する範囲の北東に基点（X=-214.0km、Y=-73.3km）を設けた。この基点からX軸西方向とY軸南方向にそれぞれ100mの大区画（100m方眼）を設定した。これらの呼称は、基点からX軸西方向にA～Y（アルファベット大文字）、基点からY軸南方向に1～25（算用数字）とした（図2 区画呼称例 E13）。次いで、100m方眼の大区画を625等分し、4m方眼の区画割（小区画）を行なっている。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅を基点として、X軸西方向にa～y（アルファベット小文字）、Y軸南方向に1～25（算用数字）とした（図5 小区画呼称例 h21）。

実測基準点および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。全て、野田地区遺跡及び各年度の藤並地区遺跡調査の地区割に続くものである。

なお、標高は、東京湾標準潮位T.P.+を使用した。

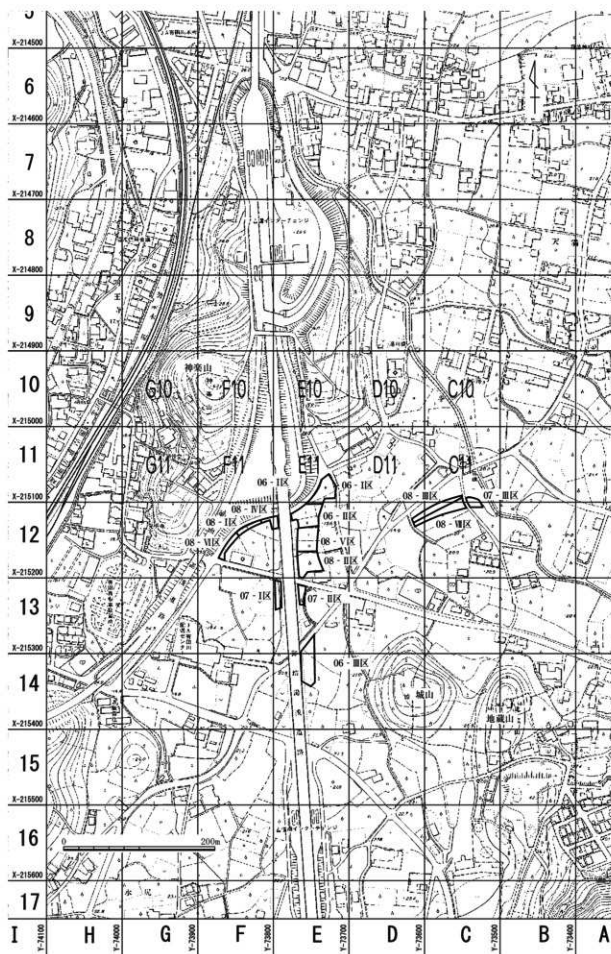


図4 調査範囲と地区割 (100 m区画) (1 : 5,000)

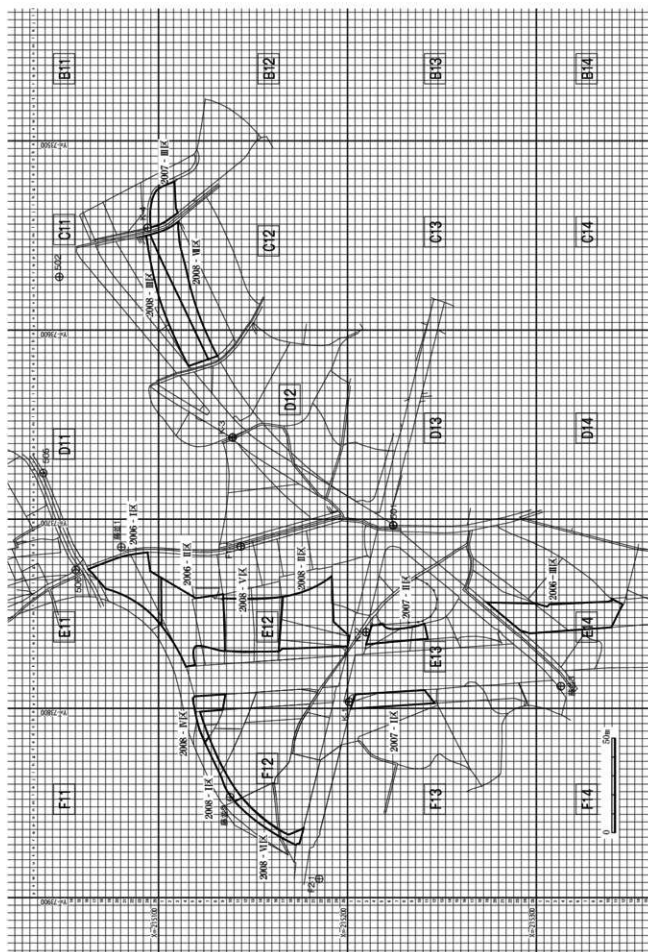


図5 調査位置と区画割 (4 m区画) (1 : 2,000)

第3節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理等

応急整理作業（写真6）

出土遺物については、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、調査現場の監督員詰所において出土遺物について応急整理作業を実施した。洗浄作業についてはほぼ全て、注記作業は一部を行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までの収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。しかし、出土遺物の詳細な内容登録までは行っていない。

旧石器時代の石器・石器剥片の抽出

2008-Ⅲ区の補足調査（写真図版26-3）では、下部の粗砂細礫層に関して2007-Ⅲ区検出の6土坑と下部の堆積層との関連を探る必要があったため、粗砂細礫層の一部を採取し（土嚢袋約80袋分）、洗い出し（写真15）・抽出作業を行った。その結果、時代が確定できないながらサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製石器剥片12点を確認した。

上記の2008-Ⅲ区の補足調査で粗砂細礫層からのサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩）製の石器剥片の存在が確実となったため、更に、南隣調査地の2008-Ⅶ区の調査において粗砂細礫層からの石器・石器剥片の洗い出し・抽出作業（写真16）を行った。その結果、旧石器時代のナイフ形石器4点・石器剥片など49点を確認した。調査時点では、ナイフ形石器以外の石器は認識できていなかった。

2 出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ（28ℓ）にして53箱と旧石器時代の遺物抽出に必要な粗砂細礫層である。出土遺物の整理は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠して、全遺物を対象に台帳登録・遺物洗浄・遺物の調査コードと出土遺物登録番号の注記（写真



写真14 出土遺物台帳登録（応急整理）



写真15 2008-Ⅲ区下位面 粗砂細礫洗浄作業（応急整理）



写真16 Ⅶ区下位面 粗砂細礫からの旧石器遺物の抽出（応急整理）



写真 17 遺物（土器）への登録コード注記



写真 18 遺物の接合



写真 19 遺物充填材による補強・復元



写真 20 出土遺物の実測図作成



写真 21 遺物実測図トレース作成



写真 22 実測遺物台帳登録データ入力

17）・遺物破片点数の集計（表3：総数 6,589 点）・接合作業（写真 18）を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強（写真 19）・復元・遺物実測（写真 20）・実測遺物台帳登録（写真 22）・遺物実測図トレース作成（写真 21）・トレースレイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、集計登録データ等入力を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図・図面トレース（レイアウト）を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納・登録番号の記載作業を行った。

第Ⅲ章 各年度の調査成果と出土遺物

第1節 第1次調査 (2006 年度)

1 調査の概要

調査地は、大きく北側と南側の2箇所に別れ、地目の違いにより工法が異なるため北側から順に2006-I区・II区・III区と呼称して調査を行なった。また、掘削排土の仮置場が十分確保できないため、北側調査地では2006-I区と2006-II区とに分割し、2006-III区では北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これらに伴い4級基準点測量・航空写真撮影も各々、分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土層を主体として、2006-I区では大別して4面、2006-II区では2面、2006-III区では1面のみが確認できた。遺構の主だったものとして、2006-I区では鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まりなどを、2006-II区では土坑・畦畔状の高まりなどを、2006-III区では土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。なお、何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

調査地の現地地形は、盛土による宅地化や果樹園などによりかなり改変されているが、鎌倉時代から室町時代の旧地形は大きく南西から北東方向に緩やかに傾斜する。

詳細に見ると、現地地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して中世遺物包含層(旧水田耕作土)が認められることからこれらの耕作土の下部が往時の旧地形を表出するものと思われる。各々、2006-I区での最下層の遺構面は、北端で標高T.P.=17.6m～南端で17.5m、2006-II区での最下層の遺構面は、南端でT.P.=18.2m～北端でT.P.=17.7m、2006-III区での遺構面は、南半分と北半分の間に段を挟んで南端でT.P.=19.5m～北端でT.P.=19.1mを測る。都合、2006年度調査地の南北両端では、約2.0mの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、遺物包含層(旧水田耕作土)や落ち込み地形(1落ち)・谷状落ちから出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、旧石器時代の頁岩製の縦長剥片、縄文時代の石鏃・砂岩製窪み石、弥生時代後期の土器、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、時期不詳の敷き石・サヌカイト剥片が十数点出土している。

鎌倉・室町時代の遺物には、土師器(皿・土釜)、瓦器(椀・皿・鉢)、瓦質土器(三足釜・火舎)、陶器(備前擂鉢・甕、常滑甕)、磁器(中国製白磁碗・青磁碗)、土鏝がある。これらの遺物に混じって、砂岩製砥石数点・鉄滓数点、鉄片1点、鉄砲弾(鉛玉)1点が出土した。

遺物の全体量は、通常の遺物コンテナ(28ℓ入り)にして、19箱分である。

2 2006-I区 調査面積590㎡(図6・7・9～12、写真23～26、写真図版1～4・6)

2006-I区は、1992(平成4)年度調査のA地区の南東側に位置する(図3)。

基本層序(図7、写真23、写真図版6)

2006-I区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、大別して鎌倉・室町前期・

室町後期・江戸時代の4面が認められる。詳細には(図7)、基盤層直上から第6層上面が鎌倉時代前期・後期、第5b層上面が室町時代前期・中期、第5層上面が室町時代後期、第2f層上面が江戸時代前期、第2層内に江戸時代の水田面が最低4面認められるものと考えられる。

2006-1区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の谷状落ち・粘土採掘土坑・石列状遺構・畦畔状の高まり、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を検出した。

51 谷状落ち (図6・9・46、写真図版1・2・32)

2006-1区での最下層の遺構面(基盤層Ⅲ10BG5/1 青灰色粘質シルト乃至は、基盤層Ⅲ⁴5Y6/1 灰色粘質シルト)は、51 谷状落ちの南北両肩の高さを示し、北東端で標高17.6m～南東端で17.5mの数値を示す。部分的ではあるが、51 谷状落ちの両肩に近い部分を検出したことになり、南北幅約20m以上、深さ平均0.75mとなる。51 谷状落ちは、平面的に検出した範囲において北西-南東方向(図6のA-A')にサブトレンチと断面土層観察用の畦を残し、堆積状況の観察に努めた。

下部では比較的、流速の速い状況の中で第8層・第9層の細砂・粗砂を含む粘泥が堆積したものと思われる。上部では、流速の遅い凝みの状態の中で第7a層～第7c層の埋積が認められる。観察した限りでは、有機質の混入の少ない泥溜りの状況を呈している。

51 谷状落ちは、第7a層を主体に掘削した結果、奈良時代の遺物も混在するが、133点が出土した。遺物は、瓦器碗(13)・小碗(12)・小皿(10・11)、土師器皿(9)・土釜、瓦質火舎(14)など鎌倉時代のもので占められる。限られた掘削範囲であるが、遺物の内容は、第7a層以下の下位の層においても瓦器を含む傾向が認められる。瓦質火舎(14)は、51 谷状落ちの上位層第7b層で取上げたが、52 石列状遺構に近接することから52 石列状遺構に関係する遺物と考えられる。

53 粘土採掘土坑 (図12、写真24、写真図版4)

53 土坑は、短軸0.96m・長軸1.34m・深さ0.63mを測り、南北に長い楕円形状を呈する。

53 土坑は、埋土の下部に基盤層Ⅲ(10BG5/1 青灰色粘質シルト)に51 谷状落ち堆積層の第7層系の2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト(N3/0 暗灰色ぎみ)～2.5Y2/1 黒色粘泥シルトの塊が多量に混在する。また、上部は、2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト(N3/0 暗灰色ぎみ)に2.5Y2/1 黒色粘泥シルトと基盤層Ⅲの小さい塊が少量混在する。明らかに人為的に埋めたものと判断でき、粘土採掘に伴う掘り穴と判断した。

53 土坑の埋土からは、他の遺構に比較して多くの遺物(24点)が出土した。奈良時代の須恵器2点・瓦(凹面布目痕、凸面格子叩き、焼成遺存良好堅緻)15点、鎌倉時代の瓦器碗7点があり、鎌倉時代



写真23 2006-1区E11-f22 調査区東壁断面土層
(西から)



写真24 2006-1区E11-f23 53 粘土採掘
土坑掘削状況(北西から)

の遺物が最も新しい内容となる。遺物は、細片が主体で図示できるものはない。

その他、53 土坑に隣接して、54・55・56 土坑の 3 基を確認している。各々、検出面での埋土は、第 5 層系の埋土を攪拌した状態にある。遺物は、54 土坑の最上層から奈良時代の瓦 2 点、鎌倉時代の瓦器碗 5 点 (7) が出土した。

52 石列状遺構 (図 10・11、写真 25、写真図版 3・32)

52 石列状遺構は、51 谷状落ちに堆積した第 7c 層の上部に一定の幅員約 2 m に粗砂礫混じりの土砂 (図 11 の A～F) を盛上げ、その上に大小の割石を乱雑に据え置いた状態にある。検出時には、粗砂礫混じりの土砂の範囲は、土質の違いから乾燥度が著しく、明らかに 51 谷状落ちの埋積土とは異なる様相を呈していた。その状態から、52 石列状遺構は 51 谷状落ちの埋没後に構築された土橋の可能性が高いと考えられる。

52 石列状遺構に伴う客土と考えた埋土 (図 11 の A～F) には、狭い範囲において今回の調査の中では、最も遺物の密度の高い状況となる。遺物は、瓦器碗・小皿・二次焼成の認められる三足釜 (206・207)、須恵器埴鉢など、細片化した状態で多量 (171 点) に出土した。52 石列状遺構に係る遺物 (53 点) として、土師器皿 (4)、瓦器碗・小皿 (5)、常滑甕などがある。

土壌サンプルの採取 (写真 26)

調査の一環として、土壌中に含まれる花粉や珪藻などの微化石分析をすることによって当時の環境を復元する資料を得る事が可能である。そのための試料として、旧水田耕作土や谷状落ちの堆積土の一部を採取している。前者の旧水田耕作土は、堆積層 (遺物包含層) であるが、土壌の珪酸体分析、花粉・珪藻分析を通じて当地域の水田開発時の水田の状況と周辺の環境を推し量る事が可能となる。また、後者の谷状落ちの埋積土の土壌分析を通じて当時の植生や気候などの周辺環境を復元するための資料を得るには、花粉・珪藻分析を同時に行うことが最も望ましいと思われる。土壌分析用サンプルは、2 箇所で合計 12 点の試料を採取している。



写真 25 2006-I 区 52 石列状遺構掘削状況
(北北西から)



写真 26 2006-I 区 E11-h・i22 51 谷状落ち
土壌採取状況 (北東から)

3 2006-II 区 調査面積 729 m² (図 6～8、写真 27・28、写真図版 5・6)

2006-II 区は、1990 (平成 2) 年度調査の B 地区の東側に位置する (図 3)。

2006-II 区での遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土を主体として、大別して 2006-I 区と同様の 4 面が認められるものと考えられる。詳細には (図 7・8)、ほぼ I 区と同様であるが、

第2層は後世の削平のために調査区の南端で現存するのは、現在の耕作土に伴う床土のみである。

2006-II区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・畦畔状の高まり、2006-I区に向かって下降する地形の落ち、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

第3層系包含層からは、サヌカイト製の石鏃(110)、奈良・鎌倉時代の遺物(図46～48)が多数出土した。

土坑群(図6・48、写真28、写真図版5・6)

調査地内の基盤層直上(第3層系包含層・1落ちの埋積土除去面)において28基の土坑を検出した。土坑からの出土遺物は、極めて少量である。遺物は、2土坑からサヌカイト剥片1点が(63)、5土坑から瓦器2点が、12土坑から瓦器8点(64)・土師器皿1点・土師器小皿1点が、13土坑から瓦器5点が、30土坑から瓦器3点が出土したに過ぎない。大半の土坑は、人為的に埋められた埋土は認められず、澁みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認められない。遺物は、上位からの踏み込み遺構によってこれらの土坑の埋土に混じり込んだものと考えられる。このことから、土坑は人為的な所産による可能性が低いものと考えられる。

1落ち(図6・7、写真図版5)

1落ちは、2006-II区の北側で地形の不整形な落ちが2006-I区に向かって下降する。埋土は、2006-II区全体に広がる第3層系包含層の下位に第4層系包含層・第5層系包含層・第6層系包含層が埋積する状態にある。1落ちの遺物(726点)は、旧石器時代のサヌカイト製のナイフ形石器(98)・横長剥片(108)、チャート製の縦長剥片(107)・剥片など、比較的多くの後期旧石器時代の遺物が出土した。遺物の主体は、奈良時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の土師器・瓦器碗・小皿などである。

鉄砲弾(図51、写真図版6・40)

鉄砲弾(112)は、2006-II区の北西隅E12-q5の側溝位置で、奈良・鎌倉時代の遺物を主体とする第3層系包含層の最下部から出土した。出土層位は、水田に伴う上位からの踏み込み遺構と考えられるものであり、鉄砲弾の時期を明確にできていない。

鉄砲弾は、直径11.5mm、重量8.88g(2.368匁)を量る。鉤型の合せ目痕が明瞭に観察できる。合せ目痕は、上下方向に細筋状の2条の突線として遺存している。また、上下方向の突線に対して直行する方向にも突線状の細筋を認めることができる。全体では4区分されたように見受けられる。現時点での県内での出土事例は、岩出市根来寺遺跡や和歌山市太田城跡・中野遺跡(城跡)・史跡和歌山城などで10点内外に止まる。なお、鉄砲弾は、現地から取上げ後に風化が進行し、現時点では表面上



写真27 2006-II区E12-n9 調査区南壁断面土層
(北から)



写真28 2006-II区E12-ℓ5
18土坑南西～北東断面土層(南東から)

は灰濁色を呈している。

4 2006-Ⅲ区 調査面積 488 m² (図 13～15、写真 29～31、写真図版 7・8)

2006-Ⅲ区は、1990 (平成 2)・1991 (平成 3) 年度調査の D・E 地区の東側に位置する (図 3)。

2006-Ⅲ区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田を主体として、1 面のみ確認できた。

2006-Ⅲ区で遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による液状化の噴砂を確認した。また、2006-Ⅲ区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

基本層序 (図 14、写真 29)

調査時点で上位層は殆んど削り取られていたため、第 1 層 (耕作土)・第 2 層 (水田床土) は部分的にしか存在しない。上部は、約 1 m の客土によって整地がなされていた。調査区の壁際に沿って、堆積層序の確認と排水を兼ねた側溝を設けた。

2006-Ⅲ区での遺構面は、途中で段差を生じ南端で標高 19.5 m～北端で 19.1 m を測る。第 3 層層系包含層は、北に向かって緩やかに下降する。遺物包含層 (第 3 層：中世耕作土) には、縄文時代の窪み石 (115)、奈良時代の須恵器 (65、238・239)・瓦 (241)、中世の土釜・瓦器 (66～69)・須恵器捏鉢 (70～72) などの破片が認められる。

〈北半地区〉 (図 13・15、写真 30、写真図版 7)

地形的に、北側へと緩やかに傾斜する。県文化遺産課の 2006 年度の試掘調査で、調査地の北側約 40 m の地点で自然流路が確認されている。小溝群の方向と自然流路の方向は概ね一致すると考えられる。

水田耕作に伴う小溝群 (図 13、写真図版 7・8)

幅員 20 cm 前後・深さ約 5 cm の溝を 20 数条検出した。埋土の大半は、第 3 層系遺物包含層 (水田耕作土) が埋積している。小溝群は、北西～南東方向にほぼ平行に認められ、重複関係から古い段階が N-55°-W、新しい段階が N-50°-W の走向を示す。

土坑 (図 15、写真 30、写真図版 7)

土坑は、5 基検出した。8 土坑からは、白鳳期の焼成遺物が硬質で凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦 1 点が出土している。15 土坑からは、縄文時代と考えられる砂岩製の石皿 1 点 (116) が出土した。その他の土坑から、遺物は出土していない。11 土坑は、短軸 0.4 m・長軸 0.55 m、深さ 0.15 m を測り、明確な平面形を検出できた土坑である。埋土は、基盤層 IV に類似し 10YR5/1 褐色灰粘質シルトである。遺物は出土していない。11 土坑も、2006-Ⅱ区で検出した土坑と同様に、人為的に埋められた埋土は認められず、掘みながら埋積した自然堆積の状況を呈している。また、遺物を伴う包含層の埋積も認め



写真 29 2006-Ⅲ区北半 E13-m23
調査区東壁断面土層 (西から)



写真 30 2006-Ⅲ区北半 E14-m1 11 土坑
断面土層 (南東から)

られない。このことから、2006-Ⅲ区検出の土坑も人為的なものとは判断できない。

水田畦畔

調査区の北端で検出し、畦畔の一部を検出した。畦畔の末端が調査範囲外におよぶため、全体の形状・水田の区画面積については不明である。

〈南半地区〉(図 13、写真 31、写真図版 8)

小溝群(図 13、写真 31、写真図版 8)

幅 20cm 前後・深さ約 5～10cm の小溝を 20 数条検出した。小溝群の走向性は、北半調査区とは異なり、北東-南西方向に平行に認められ、重複する前後関係から、古い段階が N-60°-E、新しい段階が N-40°-E の走向を示す。

遺物は、瓦器碗(73・74)・小皿(75～77)など、鎌倉時代を主体としたものが出土した。

南半地区の北端には、古い段階の小溝群と並行する段状地形が存在し、この段(高低差約 20cm)が北半と南半の水田を画する境となる。

噴砂(写真図版 8)

北北西-南南東方向にかけて地震による液状化現象によって生じた噴砂を検出した。噴砂は、最大で 1m の幅をもつ。調査区内では延長 16m におよび、地上に細砂・粗砂が噴出している。噴砂は、13 世紀の小溝群によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡である。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、南半地区では確認できなかった。南半地区の調査中に湧水が著しく、殆ど全面にわたり壁面が大きく崩落したため断念せざるを得なかった。北半調査区では、第 3 層系包含層除去面から約 50cm の深さで基盤層 V(5BG6/1 青灰色細砂・粗砂)が確認でき(図 14)、この層が砂の供給源となるものと考えられる。



写真 31 2006-Ⅲ区南半 小溝群(北東から)

5 小結

調査の成果と周辺の現状地形から、まず、2006-Ⅰ区で 51 谷状落ちの南北両肩に近い部分を検出したこと、北東端では調査区外の町道部分から北側の丘陵に向かって急に高くなっていること、また現状地形から考えて、調査地の北西側に位置する神楽山の南麓および東麓から天満Ⅰ遺跡(図 2 の 16)の西端を抜けて、野田地区遺跡の段丘崖に向けて開析谷の広がり認められる。調査地では、51 谷状落ちの地形状況と出土遺物から鎌倉時代以降に埋積が進んだ状況を窺う事ができる。

2006 年度の調査では、既往の調査でも検出されている鎌倉時代を中心とした遺構・遺物の検出によって、遺物包含層化した水田耕作土によって中世中期から江戸時代にかけての集落から外れた範囲の状況が判明してきた。集落や屋敷地に関係する遺構は、何れの時代においても 2006 年度の調査範囲内では存在しないことが明らかとなり、鎌倉時代以後の水田化の様相を考えるができた。

中世期の土地開発を示す具体的な事例は、日高郡みなべ町(旧南郡町)に所在する徳蔵地区遺跡や当地域においても例に漏れず、今回の調査地から 500m 南西側の 1980 年(昭和 55 年度)調査地においても中世における水田開発を示す資料が確認されており、当地域の広範に渡って開発が進められたものと考えられる。

第2節 第2次調査（2007年度）

1 調査の概要

調査地は、大きく3箇所に別れ、地点の違いにより西側から順に2007-I区・II区・III区と呼称して調査を行なった。3地区合計608㎡について実施した。また、掘削排土の仮置場が十分確保できないため、2007-I区のみ北半分と南半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2007-I区では航空写真撮影も分割して作業を行った。

検出遺構

各調査区は、柑橘類の畑地造成に伴い現代の耕作土・床土を始め、遺物包含層の大半が削平されていた。そのため、各地区の遺構は、基盤層直上（無遺物層であるが、本来の地山と区別するため「基盤層」の用語を使用する）で確認できたのみである。遺構の主だったものとして、2007-I区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う小溝群などを、2007-II区では土坑・地震による液状化の噴砂などを、III区では柱穴・井戸・土坑・溝などを検出した。また、2006年度と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構と稲株痕を多数検出した。

調査地の現地形は、盛土による果樹園などによりかなり改変されている。しかし、調査の成果から鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006-III区・2007-I・II区や2007-III区から2006-I・II区の方へ下降し、北西側の神楽山南東裾に沿う谷地形を形成していることが判明してきた。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、各地区に共通して僅かに中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められる範囲が存在する。このことから、これらの耕作土の下部が往時の旧地形を大きく逸脱しないと思われる。各々、2007-I区での最下層の遺構面は、北端でT.P.=18.85m～南端で18.55m、2007-II区での最下層の遺構面は、北端でT.P.=18.98m～南端で18.75m、2007-III区での遺構面は、東端でT.P.=18.95m～西端で19.00mを測る。都合、今回の調査地の北東端と南西端では、約0.4mの高低差を認めることができる。

出土遺物

出土遺物の大半は、主に2007-III区の溝や井戸から出土した平安・鎌倉時代の土器類で占められる。その他、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器・瓦などがある。平安・鎌倉時代の遺物に混じって、砥石・サヌカイト製石器剥片が出土している。

平安・鎌倉時代の遺物には、土師器（皿・甕・土釜）、黒色土器（椀）、瓦器（椀・皿）、須恵器埴鉢、砂岩製砥石がある。

遺物総数は、通常の遺物コンテナ（28 $\frac{1}{2}$ 入）にして、9箱分である。

2 2007-I区 調査面積224㎡（図16～19、写真32・33、写真図版9～11）

2007-I区は、1991（平成2）年度調査のC地区の西側に位置する（図3）。

2007-I区では鎌倉時代の土坑15基・水田耕作に伴う小溝2条などを検出した。その他、踏み込み遺構



写真32 2007-I区北半E13-x・y1
調査区北壁断面土層（南から）

の集中する範囲(図16の遺構14～25)が認められた。第3層系耕作土(遺物包含層)は、極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物は、僅かであるが土坑・遺物包含層・攪乱層から鎌倉時代を主体とした瓦器7点・須恵器埴鉢1点、弥生土器1点、須恵器1点が出土した。

土坑群(図18・19、写真図版9～11)

1土坑(写真図版9・10)

1土坑は、2007-I区の中央に位置し、調査区西壁に延びる状態で検出した。東西0.8m以上・南北1.5m以上・深さ0.32mで、歪な形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後に人為的な埋土によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。また、1土坑の東側で、長軸0.5m・短軸0.3m・深さ0.1m前後の小土坑を7基(遺構2～8)検出した。

13土坑(図19、写真図版11)

13土坑は、2007-I区の南端に位置し、調査区東壁に延びる状態で検出した。東西2m以上・南北2.1m・深さ0.25mで、半楕円形状を呈する。土坑の基底部に基盤層Aの崩れと思われる自然堆積層(図19の5・6)が埋積し、上部は基盤層Aを主体とした多量のブロック土を含む人為的な埋土(図19の1・2)で埋め尽くされている。遺物は出土していない。



写真33 2007-I区南半E13-y7

1土坑調査区西壁 断面土層(東南東から)

23土坑(図18、写真図版11)

23土坑は、側溝掘削のために平面で検出することができなかったが、2007-I区の調査区西壁中央で検出した。南北1.9m・深さ0.25mで、形状は不明である。土坑の基底部に人為的な埋土(図18の3)が埋められた後に、部分的に自然堆積層(図18の2)が入り込み、再び、多量のブロック土を含む人為的な埋土(図18の1)で埋め尽くされている。遺物は出土していない。23土坑の上部には第3層系耕作土層(図18の第3層系)が存在し、鎌倉時代の瓦器1片が出土した。

水田耕作に伴う小溝群(図16)

幅員30cm前後・深さ約5cmの溝を2条検出した。埋土は、第3層系の堆積層が埋積している。小溝群は、北北西-南南東方向にほぼ平行に認められ、N-15°-Wの走向を示す。

3 2007-II区 調査面積 194㎡(図20～24、写真図版12・13)

2007-II区は、1991(平成2)年度調査のC地区の東側に位置する(図3)。

2007-II区では鎌倉時代の土坑12基・不整形な落ち1基・地震による液状化に伴う噴砂の砂脈2条などを検出した。第3層系包含層は、2007-I区同様に極めて狭い範囲に遺存するのみであった。遺物(69点)は、2007-I区同様に僅かであるが、土坑・攪乱層から鎌倉時代を主体とした土師器3点・瓦器64点(内、54点が17土坑から小片で出土)、須恵器2点が出土した。

土坑群(図22・23、写真図版12・13)

ここでは、主な土坑の記述のみに止める。

5土坑(図22、写真34、写真図版13)

5 土坑は、2007-Ⅱ区の北半部東側溝寄りに位置し、調査区東側に延びる状態で検出した。短軸 1.3 m 以上・長軸 2.1 m・深さ 0.31 m で、やや歪な楕円形状を呈する。基底部に自然堆積層が埋積した後には人為的な踏み込みによって攪拌された状況(図 22 の 3 b・3 c)を示し、後に再び自然堆積層(図 22 の 2・3 a)が埋積し、最終的には人為的な埋土(図 22 の 1)によって埋め尽くされている。遺物は、鎌倉時代の瓦器碗 3 点が出土した。

11 土坑 (図 23、写真図版 12)

11 土坑は、2007-Ⅱ区の中央に位置し、全体が把握できる状態で検出した。東西 1.4 m・南北 2.2 m・深さ 0.24 m で、やや歪な形状を呈する。11 土坑は、段階的ではあるが、人為的な埋土(図 23 の 1・2)によって埋め尽くされている。遺物は出土していない。

18・19 噴砂 (図 24、写真 35、写真図版 13)

2007-Ⅱ区の北半部で、地震による液状化現象によって生じた噴砂の砂脈(遺構 18)を検出した。18 噴砂は、最大で 0.75 m の幅をもち、北東-南西方向に走向する。調査区内では延長 5.5 m 以上におよび、地表面に細砂・粗砂が噴出している。18 噴砂は、第 3 層系埋土の中世の素掘り小溝によって削り取られていることから中世以前の地震痕跡であることが判明した。

18 噴砂の約 2 m 南東側で 19 噴砂を検出した。

19 噴砂は、18 噴砂と同一方向性を指向し、最大幅 0.8 m・延長 1.5 m 以上を検出した。時期の判明する遺構との重複関係はないが、18 噴砂と方向性が同じであること、18 噴砂と 19 噴砂の間の基盤層Ⅲ(10YR4/1 褐灰色粘質シルト)が両噴砂の影響によって砂質化している状況にあることから同時に生じた噴砂である蓋然性が高いと判断している。

以上のことから、18・19 噴砂は 2006-Ⅲ区で検出した噴砂と同一時期の所産と考えられる。中世以前の南海大地震などの巨大地震の所産と考えるのが妥当と言える。噴砂の砂の供給源となる下部の堆積層は、調査中に降雨・湧水が著しく、今回の調査区では確認できなかった。



写真 34 2007-Ⅱ区 E13-o6 5 土坑検出状況
(北北東から)



写真 35 2007-Ⅱ区 E13-p7
18 噴砂調査区西壁断面土層 (東から)

4 2007-Ⅲ区 調査面積 190 m² (図 25～28・46、写真図版 14～16・38・39)

2007-Ⅲ区は、2007-Ⅱ区から 250 m 北東側に位置し、天満川に隣接している。従来の藤並地区遺跡の北東縁辺部に該当する。Ⅲ区では調査を反転方式にしても掘削排土の仮置場が十分に確保できないため、全ての掘削土を調査地外に搬出することとした。

2007-Ⅲ区では柱穴 15 基・井戸 2 基・土坑 3 基・溝 1 条などを検出した。遺物(785 点)は、旧石器時代の石器剥片、奈良時代の須恵器・瓦、平安・鎌倉時代の土師器(皿・甕・土釜)、黒色土器(碗・皿)、瓦器(碗・小皿)、須恵質埴鉢、砂岩製砥石等が出土した。遺物の殆どが 1 溝からの出土である。

基本層序 (図 26、写真 36)

調査時点で上層は殆んど削り取られていたため、第1層(耕作土)は部分的にしか存在しない。上部は、約0.4～0.5mの客土によって果樹園の造成がなされていた。基盤層Ⅰは、2007-Ⅰ・Ⅱ区の基盤層A(図18・23)に類似している。

柱穴群 (図 25、写真図版 15)

柱穴は、2007-Ⅲ区の北東側に集中して位置し、15基検出した。総体的に北西から南東方向に並びを有するものと思われるが、建物としての柱並びを捉えることができなかった。柱穴の配置状況から調査地の北東側に広がるものと思われる。柱穴は、重複関係を有するものもあるが、掘形長軸40～50cm・短軸30～40cm・深さ30～60cmの規模である。掘形埋土は、基盤層Ⅰを成因としたものが主体を占め、殆どが類似している。柱穴には、柱痕跡(柱当り)の認められるものもあり、細砂を混在したシルトが自然堆積した状態にある。遺物は出土していない。

2井戸 (写真 37)

2井戸は、2007-Ⅲ区の北東隅に位置する。当初、遺構の平面検出において大型柱穴の柱痕跡・掘形の重複関係を考えたが、井戸と判明した。

2井戸は、東西長軸1.1m・南北短軸1.0m・深さ1.1m(基底部でT.P.=17.80m)の規模である。井戸の掘り込みは、基盤層Ⅳ類似層に達し、素掘りである。埋土は、上記した柱穴埋土に酷似した埋土を認めることができる。そのため、時代が不明ながら同一段階に帰属する所産と思われる。遺物は出土していない。

5井戸 (写真 38、写真図版 15)

5井戸は、2007-Ⅲ区の北西隅に位置し、1溝と重複関係にある。調査区北壁断面土層と1溝・5井戸間の断面土層の層序関係から、1溝の埋没途上において5井戸が掘削されたことが判明した。

5井戸の規模は、1溝との関係で判然としないが、東西掘形上端で3.2m(掘削できた下部での掘形は東西1.8m)・深さ1.1m(T.P.=17.70mまで掘削)以上である。井戸の掘り込みは、基盤層Ⅴよりさらに下位に及んでいる。遺物は、上層で1溝と同様の平安・鎌倉時代の土師器1点・瓦器1点、須恵器1点が出土した。下部で遺物は出土していない。



写真 36 2007-Ⅲ区 調査区南西壁断面土層
(南東から)



写真 37 2007-Ⅲ区 C12 - g1 2井戸東西断面土層
(南から)



写真 38 2007-Ⅲ区 1溝・5井戸間の断面土層
(東南東から)

1溝 (図25・27・49、写真39、写真図版14・15・38・39)

1溝は、Ⅲ区の西半部に位置し、南側から調査地を斜め(N-31° ~ 33°-W)に横切り、5井戸の手前で西側に屈曲(内角約115°)する。一方、溝は調査区北壁断面土層には現れないが、検出・掘削した平面形では、5井戸の東側で直線的に北西方向に延びているように見受けられる。基底部の深さは、南端と西端ではさほどの差がなく、走向を判断できない状態にある。

埋土の最下層は、自然堆積層(図27の8・9)で、9は流水痕跡、8は澱み状態の認められる状況にある。断面土層位置では、図27の2~4において掘り直しと思われる堆積層序を示すが、調査区南壁及び南西壁では認めることができない。

遺物(766点)は、図27の3下半~4にかけて集中する。奈良~平安時代(470点)の須恵器、土師器・黒色土器、平安時代末~鎌倉時代(292点)の土師器(88・89)・瓦器(90・91)・砥石(117)等がある。5井戸の東側では、鎌倉時代以前の遺物が特に集中する傾向にあり、別遺構の重複をも考える必要がある。中には白鳳期の凹面布目痕・凸面格子叩きの瓦1点(249)が出土した。

6土坑 (図28、写真40、写真図版16)

6土坑は、Ⅲ区の北西側で1溝と重複して位置する。東西3.1m・南北3.0m・深さ0.7mで、やや歪な隅円方形形状を呈する。法面の立ち上がりは比較的緩やかで、丸みをもって基底部に達する。基底部では、南東から北西に向かって緩傾斜するものの、最大2×2mの歪な面を認めることができる。埋土は、大別して3区分できる。上位層は図28の4~6で基盤層Ⅱ・Ⅲを成因とし、下位層は図28の7・8・10で褐灰色から黒褐色シルトを主体とする。最下層は、粗砂礫を多量に含み基盤層Ⅳを成因とする埋積である。

遺物は、土器と思われるものは一切ない。6土坑に関して、基底部に堆積した埋土(図28の8・9)の一部と当遺構と関連性の高い基盤層Ⅳ黄褐色粗砂礫の一部を採取し(土嚢袋18袋分)、遺物の洗い出し作業を行った。石器製作に伴う剥片と判断した凝灰岩(硬質頁岩)製剥片1片(写真42)が出土した。

3土坑 (写真図版16)

2007-Ⅲ区の西半部で1溝と重複して位置する。東西0.85m・南北0.75m・深さ0.50mの規模で、



写真39 2007-Ⅲ区 1溝遺物出土状況(南南東から)



写真40 2007-Ⅲ区 C11-k25・C12-k1 6土坑
(北東から)



写真41 2007-Ⅲ区 C11-k25・C12-k1 4土坑
(北から)

円形状を呈する。埋土は、褐灰色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。石器遺物ではないが、6土坑で選別した類いの泥岩・粘板岩の小片が数点出土したのみである。

4土坑 (図28、写真41)

4土坑は、2007-Ⅲ区の北西側に位置し、1溝・6土坑と重複関係にある。4土坑は、1溝より古く、6土坑より新しい段階にある。短軸0.84m・長軸1.8m・深さ平均0.32mの規模で、北端は凹凸の著しい状況にある。埋土は、図28に示すように3土坑と類似している。遺物は出土していない。

6土坑出土の凝灰岩(硬質頁岩)製剥片 (写真42)

凝灰岩(硬質頁岩)製剥片は、長さ18mm・幅11mm・厚み6.5mmを測る小片である。剥片そのものは、乳濁色を呈し非常に風化の著しいものと見受けられる。剥片は、明瞭に打痕痕が観察できることから石器製作に伴う剥片と判断した。剥片の先端部に非常に細かな割れが認められるが、乳濁色の色調よりやや鮮明な状態にあるため調査時に生じた欠けである可能性が高い。



写真42 2007-Ⅲ区 6土坑出土の石器剥片

断定するには至らなかったが、石器剥片の出土から6土坑は縄文時代以前に遡る遺構の蓋然性が高いものとなった。なお、基盤層Ⅲの下部に一定の広がりが見られる基盤層Ⅳ黄褐色粗砂細礫は、6土坑の基底部でも確認されている。基盤層Ⅳにも人為的な石器剥片が含まれるかどうかの検討は、その後の調査2008-Ⅲ区・Ⅶ区下位面において明確にすることができている。なお、選別作業によって得られた自然礫の大半は、基盤層Ⅳが成因となるものと思われるが、量の多い順から泥岩・粘板岩・砂岩・チャート系・長石・石英・その他不明となる。

5 小結

調査の成果と周辺の現状地形から、さらに調査地付近の古い微地形を考える事が可能となった。鎌倉時代から室町時代にかけての旧地形は、2006-Ⅲ区・2007-Ⅰ・Ⅱ区や2007-Ⅲ区から2006-Ⅰ・Ⅱ区の方へ緩やかに下降し、北西側の神楽山南東麓に沿う谷地形を形成していることが判明した。ただ、2007-Ⅰ・Ⅱ区の北端より南端の方が30cm程度低くなることから、部分的に下位層の自然流路等の影響による微低地が入り込んでいる様相も理解できる。

また、現状地形から考えて、調査地2007-Ⅲ区の東側の天満川を境にして北東側に位置する天満Ⅱ遺跡(図2の17)に向かって高位の地形を形成している。2007-Ⅲ区の東側では、既に県道工事が進捗している状態であったが、中世と思われる土器破片数片を採取した。このことから、2007-Ⅲ区の東側にも中世の何らかの遺跡の展開が想定されるところであった。

今回の2007-Ⅰ・Ⅱ区周辺でも、2006-Ⅲ区を含めて縄文・弥生・古墳時代の集落からも外れた範囲である事も事実となった。2007-Ⅰ・Ⅱ区周辺の鎌倉時代以前の状況は、2006-Ⅲ区を含めて上位層での流水痕跡を留めた自然流路などが確認されなかった事から考えれば、土地利用のされない荒廃した立地と考える事が可能である。平安時代については、2007-Ⅲ区の鎌倉時代の溝からの出土ながらまとまりのある遺物群が存在することから、狭い範囲に平安時代の一定の遺構の広がりを考えることが可能となった。これは、1980(昭和55)年度から1981(昭和56)年度にかけて調査が実施された藤

並地区遺跡（32）の南西側範囲や野田地区遺跡の近接する範囲とは別の広がりをもつものである。

今回の調査の内、2007-I・II区で検出した土坑群は、埋土の堆積状況から一部に自然堆積と認められるものがあることから一概に土坑墓としての性格を与えることができない結果となった。湯浅御坊道路 1991（平成 2）年度調査の C 区土坑群を土坑墓群と性格付けたい意味合いを、再検討する必要がある。

基盤層に関して、全体を通した層序関係を見ると、2006-III区の基盤層Ⅲ・Ⅳ褐色系シルト（写真 29）と 2007-III区の 6 土坑の堆積層（図 28 の 7・8・10）、2007-III区の 3・4 土坑の堆積層全般、2007-I・II区の基盤層Ⅲが非常に似通った状況にある。ただ、2006-III区では 2007-III区の 3・4 土坑に類似した埋土遺構が基盤層Ⅲより上位の面から切り込まれていたことから、一概に基盤層Ⅲ類似層が同一の成因・時期とはできない。故に、2006-III区の基盤層Ⅲ・Ⅳが縄文時代の堆積層に対応するかどうかは俄かに判断し難いところでもあった。

また、2007-I・II区においては、基盤層Ⅲより下位に基盤層Ⅵ・Ⅶが存在する。2007（平成 19）年度の調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層Ⅶが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層が存在するものと思われた。この事から周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当たって、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われた。と共に、2007-III区周辺は元より、広範において旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起される場所でもあった。

第3節 第3・4次調査（2008 年度）

1 調査の概要

調査地は、大きく 7 箇所に別れ、地点の違いにより 2008-I 区～VII区と呼称して調査を行った。調査は、7 地区合計 2,237 m²（調査対象面積 3,138 m²）について実施した。

また、掘削排土の仮置場が十分確保できない 2008-I・II・VI区は各々東側半分と西側半分に分割する反転方式で調査を行った。これに伴い、2008-I・II・VI区では航空写真撮影も分割して作業を行った。なお、2008-IV区～VII区は、県文化遺産課・県建設部から追加変更の依頼のあった地区である。

今次の調査では調査区が複数に分かれるため、検出遺構等の記述は、西側の範囲 2008-I・IV・VI区、中央の範囲 2008-II 区、東側の範囲 2008-III・VII区の順で行うこととする。

検出遺構

検出遺構は、各地区において様相を異にするため詳細は後述するが、ここでは大要を記述する。

2008-I・II・IV・VI区の遺構は、主に中世遺物包含層（第 3 層・第 4 層）上面と旧石器時代以降の形成層の直上（第 3 層・第 4 層下面）で確認できた。

調査区の内、2008-III・VII区は、昭和 30 年代の大規模な粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、粘土採掘坑に充填されていた。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査によって下位面の遺構と自然地形を確認することができた。

遺構の主だったものとして、2008-I・IV・VI区では鎌倉時代の土坑・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを、2008-II 区では奈良時代の掘立柱建物、時代不明の土坑・溝などを、2008-III・VII区では上位面の調査で褐色系シルトを埋土とする土坑・落ち込み状遺構などを検出した。また、既往の調査と同様に何れの地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

特筆すべき事項として、2008-III区補足調査、2008-VII区下位面として行った調査において既往の

調査では確認されていなかった旧石器時代の堆積層（粗砂細礫層）や往時の自然地形と石器・石器剥片類、更に下位の基盤層を確定できたことにある。

出土遺物（図 49・写真図版 39）

出土遺物の大半は、主に各地区の包含層や 2008-Ⅲ・Ⅶ区の粘土採掘坑の改変土から出土した鎌倉・室町時代の土器類で占められる。鎌倉・室町時代の遺物には、土師器（皿・土釜）、瓦器（小壺・甕・椀・皿）、須恵器埴鉢、瓦、砂岩製砥石、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁・白磁）、銭貨などがある。

その他、旧石器時代のナイフ形石器・石器剥片、縄文時代の石鏃、弥生時代の土器（甕）、奈良時代の須恵器（壺・甕・坏・坏蓋）・瓦などがある。

2 2008-Ⅰ区 調査面積 84 m²（調査対象面積 114 m²）（図 29・30、写真 43、写真図版 17・18）

Ⅰ区は、一般国道 42 号湯浅御坊道路（1990（平成 2）年度調査の B 地区より西側、同 1992（平成 4）年度調査の A 地区の南東側に位置する（図 3））。

Ⅰ区は、後世の果樹園の造成のため大半の耕作土・床土が削平され、造成土（岩砕礫）が中世遺物包含層第 3 層（中世水田耕作土）に喰い込む状態となっていた。

遺構検出面と出土遺物

Ⅰ区の遺構は、中世遺物包含層第 3 層下面（旧石器時代以降の形成層の直上）で確認できた。遺構調査は、第 3 層下面で行った。中世遺物包含層第 4 層は、形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存するのみであった。

遺物（71 点）は、遺物包含層第 3・4 層から鎌倉時代を主体とした土師器（皿・土釜）、瓦器（椀・皿）、須恵器（甕）が出土した。

水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり（図 29、写真 43、写真図版 17）

遺構の主だったものとして、Ⅰ区西側調査地で鎌倉時代の水田区画畦畔と考えられる南北方向の基盤層の盛り上がり 2 条を検出した。盛り上がりの高さは、第 3 層（中世水田耕作土）下面からすると 0.08 m を測る。盛り上がりの走行は、N-11°-E である。基盤層の盛り上がりの上に人為的な盛土を確認していないため、畦畔と考える見解に否定的な意見もある。なお、現況地形では特に走行性の定まった地形区画は認められない。



写真 43 2008-Ⅰ区西側西 水田区画（南西から）

人間・牛の足跡（写真図版 17・18）

また、既往の調査と同様に何れの範囲においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込みを多数検出した。特に、水田を形成していると考えられる第 3 層系堆積層を埋土とする踏み込み遺構が多数存在する。

シルト層に喰い込む自然石（角礫）の性格（写真 43）

調査区の範囲内には、下部基盤層のシルト層に喰い込む状態で拳大から人頭大の自然石（角礫）が比較的多く存在した（写真 43 手前の角礫）。特に、Ⅰ区西側調査区の南西端に集中して多く見受けられ、Ⅰ区東側調査区にも散在的に認めることができた。これらの自然石の埋没が人為的な所産によるかどうか

かを確認するため、調査区南西壁断面土層の詳細な観察、検出平面の再々にわたる観察を行ったが、人為的な掘形・埋め込みの状態を確認することができなかった。結果的には、下部基盤層のシルト層が不安定な状態の時に北西側の丘陵斜面からの転石と考えるに至っている。後述するⅠ区より南西側のⅥ区北東半・南西半の調査区においても多数認められるところである。

自然石(角礫)は、当地区の北東側に位置する2008-Ⅳ区では殆ど見受けられない。また、2006-Ⅰ・Ⅱ区では、第3層系・第4層系堆積層に含まれるものの、基盤層内には包含しない。

3 2008-Ⅳ区 調査面積154㎡(調査対象面積172㎡)(図31・32、写真44・45、写真図版19)

2008-Ⅳ区は、2008-Ⅰ区の北東側に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路(1990(平成2)年度調査のB地区より西側、同1992(平成4)年度調査のA地区の南東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物(図32、写真44)

2008-Ⅳ区の遺構は、中世遺物包含層第3層上面と第3層下面(旧石器時代以降の形成層の直上)で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第4層が遺存する。

遺物は(299点)、遺物包含層第3・3'層・4層から鎌倉時代を主体とした土師器(皿・土釜)、瓦器(椀)、須恵器(甕・須恵質埴輪)、奈良時代の須恵器(壺・甕)が出土した。

水田耕作に伴う不整形な小溝群(写真45)

遺構の主だったものとして、2008-Ⅳ区東側中央E12-x・y7で鎌倉・室町時代の水田耕作に伴う不整形な小溝群を多数検出した。不整形な小溝群は、最大幅員0.6m・最小幅員0.15m・深さ0.02~0.03mで、東西方向N-86°-EからN-85°-Wに走行する。埋土は、中世遺物包含層第4層である。

第3'層埋土の落ち込み

Ⅳ区西側F12-a6~d6・7では東西13m・南北2.7m以上・検出最深0.1mにおよぶ第3'層埋土の落ち込みを検出した。また、既往の調査と同様に当地区においても人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

その他の遺構

その他、調査区東壁断面土層E12-x6にかかって褐色から黒褐色系シルト埋土の土坑が1基確認されていたが、壁面崩壊のため断面土層図に記録することができなかった。また、中世遺物包含層第3層上面の遺構は、第2層(現代の床土)下面に該当し、中世以後、江戸時代から近代に至る間の耕作に伴う痕跡と考えられる。記録は、デジタルカメラによるスナップ写真に留めた。



写真44 2008-Ⅳ区F12-d6 調査区北壁断面土層
(南南東から)



写真45 2008-Ⅳ区E12-x7・F12-a7 小溝群
(西から)

4 2008—Ⅶ区 調査面積 121 m²(調査対象面積 147 m²) (図 33 ~ 36、写真 46、写真図版 20・21)

2008—Ⅶ区は、2008—Ⅰ区の南西側に位置し、今次の調査では最も西端の地区になる。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチの設定地区に該当する。また、一般国道 42 号湯浅御坊道路から国道 42 号線への導入路部分の調査 (1980 (昭和 55) 年度) Ⅰ区とは、僅か約 80 m の位置関係にある。

遺構検出面と出土遺物

2008—Ⅶ区の遺構は、中世遺物包含層第 3 層下面 (旧石器時代以降の形成層の直上) で確認できた。調査区の一部に中世遺物包含層第 4 層が遺存する。第 4 層の一部は形成層として遺存せずに踏み込み遺構の集合体として遺存する範囲もある。遺構は、第 3 層に掘り込まれた状態で溝 1 条、第 3 層下面で不整形な土坑数基が、2008—Ⅶ区南西端で第 3 層に掘り込まれた土坑 1 基などがある。

なお、下位層の旧石器時代を対象とした調査は行っていない。

遺物 (267 点) の大半は、中世遺物包含層第 3 層からの出土である。一部は、踏み込み遺構の集合体としての第 4 層系埋土からの出土である。

1 溝 (図 36、写真 46、写真図版 20)

第 3 層下面で、東西に走行する 1 溝を検出した。1 溝は、Ⅶ区南西半中央から南側 F12-p5 ~ q16 に位置する。県文化遺産課の確認調査 29 トレンチ部分に該当する。

溝は、基本的に東西に走行するが、西側では南西方向に浅い落ちの広がりが見られる。1 溝は、最大幅員 1.35 m・深さ 0.90 m・延長 6.5 m 分を検出した。埋土は、自然堆積と考えられ、上端部では包含層第 3 層は窪まず、第 3 層によって整形された状態にある。また、溝の埋土に第 4 層系の堆積層を含まない。埋土の中心以下に厚さ約 40 cm の木屑層 (幾層にもわたる木っ端・木の葉層: 図 36 の E) を形成するが、流水による影響が及んだためか、肩崩れを起こし基盤層類似土が木屑層の上に覆い被さる。

木屑層の埋没状況は、2008—Ⅶ区下位面の補足調査による地山基盤層直上の木屑層基盤層に類似するが、性格・相関関係は不明である。遺物は出土していない。

1 溝は、包含層第 3 層 (室町時代) によって埋土の上端部が削平されること、第 4 層系の堆積層 (鎌倉時代) が存在しないことから両層の形成の過渡期に掘削されたとも考えられる。

11 土坑 (図 35、写真図版 21)

11 土坑は、第 3 層下面で、2008—Ⅶ区北東半の南寄り F12-o13 に位置する。11 土坑は、南北 0.45 m・東西 0.40 m・深さ 0.17 m を測り、やや歪な隅丸方形を呈する。埋土は、基盤層のブロック土が少量入ることから、人為的埋土の可能性が高い。遺物は出土していない。

不整形な土坑群

不整形な土坑群は、2008—Ⅶ区南西半の 1 溝より南側 F12-p・q16 に集中して位置する。最深 0.10 m 前後で、埋土は第 4 層系の堆積層である。特に方向性のある配置は認められない。

2 溝

2 溝は、2008—Ⅶ区南西半の南端 F12-q16 に位置し、上記の不整形な土坑に重複する。2008—Ⅶ



写真 46 2008—Ⅶ区南西半 F12-p15
1 溝調査区南東壁断面土層 (西から)

区南西半では、最も上位の遺構である。2溝は、南北方向N-12°-Wに走行し、幅員0.25～0.40m・深さ0.10～0.15m・延長約2.3m分を検出した。埋土は、粗砂を主体として少量の細礫を含む単層であり、自然堆積か人為的埋土かは不明である。遺物は、近代と思われる磁器が1点出土した。

5 2008-Ⅱ区 調査面積824㎡(調査対象面積868㎡)(図37～40、写真47、写真図版22～24)

2008-Ⅱ区は、2007-Ⅱ区とは町道を隔てて北側に位置し、一般国道42号湯浅御坊道路(1990(平成2)年度調査のB地区より東側に位置する。県文化遺産課の確認調査10～13・18トレンチの設定地区に該当する。

遺構検出面と出土遺物

2008-Ⅱ区の遺構は、中世遺物包含層第3層下面と旧石器時代以降の形成層の直上で確認できた。

遺構の主だったものとして、奈良時代の掘立柱建物1棟・落ち込み状遺構1条、鎌倉・室町時代の土坑10基・落ち込み状遺構・水田耕作に伴う不整形な小溝群などを検出した。また、人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

遺物(1,290点)は、中世遺物包含層第3層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、サマカイト剥片、銭貨などが出土した。

2008-Ⅱ区では第3層系・第4層系遺物包含層は、主に北半側の低い範囲に遺存するのみであった。

ここでは、主な遺構についてのみ記述する。

掘立柱建物1(図40、写真図版23・24)

掘立柱建物1は、2008-Ⅱ区の北西隅E12-o・p17～19に位置し、南北桁行3間(東側柱並び6.60m・西側柱並び6.65m)×東西梁行2間(北側柱並び4.65m・南側柱並び4.80m)の南北棟の側柱建物である。柱穴掘形は、方形・長方形・歪な方形を呈し、一辺最小寸法0.54m～最大寸法0.77mを測る。柱穴柱当りに該当する埋土部分は、円形を呈し、最小寸法径0.13m～最大寸法径0.31m、深さ最浅0.26m～最深0.46mである。

掘立柱建物1は、棟方向が東側柱並びでN-5°-E、西側柱並びでN-8°-Eである。

埋土は、柱穴掘形は人為的埋土、柱穴柱当りは人為的埋土もしくは自然埋没、そしてその両方を合わせ持つ三過程が認められる。中には埋土に炭粒を多量に含み、焼成粘土塊を包含する33柱穴(写真図版24-1)も存在する。

遺物は、柱穴掘形・柱当り埋土から奈良時代の須恵器杯・蓋・甕、土師器甕の小片30点が出土した。

21土坑(写真図版24)

21土坑は、2008-Ⅱ区の西側南寄りE12-o・p22に位置する。東西長軸5.0m・南北短軸3.4m・最深部0.10mの規模である。埋土は、基盤層のブロック土を少量含む黄灰色シルトで人為的埋土と考えられる。遺物は、鎌倉時代の瓦器碗・土師器皿、須恵器杯の小片20点が出土した。

耕作に伴う小溝群(図38、写真図版22)

耕作に伴う小溝群を対象とした調査は、部分的にE12-m19区画周辺で行い、中世遺物包含層第3層下面(中世遺物包含層第4層上面)で検出した。

小溝群の走行は、南北方向がN-1°-WからN-2°20'-W、東西方向がN-82°30'-Eである。現況地形では、床土直下の暗渠排水溝に一定の方向性が認められ、南北方向がN-5°40'-W前後の一群とN-11°-W、N-20°-Wの三群がある。一部、小溝群との相関性が考えられる。

遺物は、鎌倉時代の瓦器・土師器の小片が数点出土した。

その他の遺構

その他の遺構として、調査区東壁断面土層 E12-k19 において褐色から黒褐色系シルト埋土の土坑 1 基、調査区の中央北寄り E12-n19・20 において同埋土の不整形な土坑状の窪みが東西楕円形状に配置する 10 遺構などがある。

また、人間の足跡と考えられる踏み込み遺構が特に集中する範囲を確認した。集中する範囲は、特に方向性・規模の規格性は認められなかった。

補足調査（写真図版 24）

2008-Ⅱ区西側 E12-q22・23 の調査区西壁沿いにおいて、天端面積約 10 m²（東西 2.5 m×南北 4 m）で補足調査を行った。補足調査では、調査区西壁断面土層での粗砂細礫層の厚層・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面は、最も高い部分で T.P.=17.60 m 前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取は行っていない。



写真 47 2008-Ⅱ区東側 E12-n・m19・20
10 遺構（北から）

6 2008-Ⅴ区

調査面積 532 m²（調査対象面積 815 m²）

Ⅴ区は、県文化遺産課の確認調査（27・28 トレンチ）に伴う地区設定である。2006-Ⅱ区と 2008-Ⅱ区に挟まれた範囲に位置し、一般国道 42 号湯浅御坊道路（1990（平成 2）年度調査の B 地区より東側に位置する。

遺構検出面と出土遺物

Ⅴ区の遺構は、褐色系から黒褐色系シルト埋土の土坑などがあるが、詳細は県文化遺産課「県道古備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡確認調査報告書」に譲る。

遺物は、中世遺物包含層第 3 層から鎌倉時代を主体とした土師器・瓦器を始め、奈良時代の須恵器、瓦などが出土した。

7 2008-Ⅲ区 調査面積 410 m²（調査対象面積 410 m²）（図 41～44、写真 47、写真図版 25・26）

2008-Ⅲ区は、2008-Ⅶ区の北隣、2007-Ⅲ区の西側に位置し、今次の調査では東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査 22～25 トレンチの設定地区に該当する。計画当初は排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側に排土置場を確保できたことから一括調査が可能となった。

遺構検出面と出土遺物

Ⅲ区は、昭和 30 年代の粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、1～3 粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去されていた。この地区では、上位面の遺構と一部調査区南壁沿いの補足調査によって下位面の粗砂細礫層の状況を確認することができた。

遺構の主だったものとして、Ⅲ区では土坑 20 基・柱穴状遺構 3 基・落ち込み状遺構 3 箇所などを検出した。

遺物(768点)は、奈良時代の須恵器・瓦、平安・鎌倉時代の遺物の土師器(皿・甕・土釜)、瓦器(椀・小皿)、須恵器埴輪、砂岩製砥石、現代(昭和)の陶磁器・瓦・土管などがある。遺物の大半は、西側に位置する1～3粘土採掘坑に係る3次的な埋土からの出土である(765点)。

補足調査による粗砂細礫層からは、旧石器時代のサスカイト製・凝灰岩(硬質頁岩)製の石器剥片が出土した(Ⅲ区補足調査時には、石器が確認されず時代が確定できていなかった)。なお、一連の褐色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

4土坑(図43、写真48、写真図版25-3の手前の土坑)

4土坑は、2008-Ⅲ区の東端部C11-n24・25に位置する。4土坑は、東西0.93m・南北0.70m以上・最深0.62mを測る。北側半部は、北壁際側溝の掘削により損壊した。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトで自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

10土坑(写真図版26)

10土坑は、2008-Ⅲ区の中央東寄りC12-t1に位置する。10土坑は、東西短軸1.75m・南北長軸2.75m以上・最深0.70mを測り北側の調査区外に続く。土坑の北側から北壁際側溝位置で最も深くなり、歪な形状を呈している。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトを基本として基盤層黄褐色シルトが入り込む。遺物は出土していない。

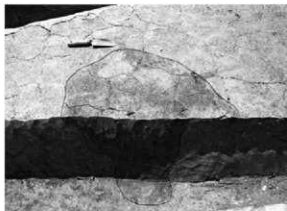


写真48 2008-Ⅲ区C11-n24・25
4土坑検出状況(北から)

8落ち込み状遺構(写真図版26)

8落ち込み状遺構は、2008-Ⅲ区の東側C11-o25～C12-r・s1に位置し、北側調査区外に延びる。また、南側は、Ⅶ区上位面C11-n・o25～C12-r・s3へ続く遺構である。8落ち込み状遺構は、東西22.4m・南北13.2m以上・最深0.34mに及ぶ。埋土は、褐色系から黒褐色系シルトを基本とする。両地区を通して、遺物は出土していない。

1～3粘土採掘坑(写真49、写真図版25-2手前の遺構)

1～3粘土採掘坑は、2008-Ⅲ区～Ⅶ区C11-x3・4・v5から西側にかけて位置する。県文化遺産課の確認調査22・23トレンチ部分に該当する。1～3粘土採掘坑の大半は、人為的な埋め戻しが行われ、最上層から中位にかけて中世遺物包含層(層厚約40cm)が充填されていた。そのため、当初は中世の遺構と判断して調査を進めた。1～3粘土採掘坑は、東西29m以上・南北25m以上・深さ1.2m以上の規模を有し、大きく3単位に分けて掘削→埋め戻し(山土・岩砕造成土(岩砕礫))を繰り返し、東側から西側に掘り進んでいる。下層ないし最下層に近い部分において昭和の陶磁器・瓦・土管が出土した。その時点で、粘土採掘坑に係る掘削を放棄した。



写真49 2008-Ⅲ区 1～3粘土採掘坑(東北東から)

また、元地権者の方から昭和30年代に瓦を焼くための粘土採掘がⅢ区・Ⅶ区において大規模に行われた事実を確認することができた。そのため、Ⅶ区上位面では粘土採掘坑の平面位置の確認に留め、掘削は行わなかった。

補足調査（写真図版26・39）

2008-Ⅲ区C12-s・t2の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9㎡（東西3.5m×南北2.5m）で補足調査を行った。補足調査では、21土坑に関係した調査区南壁断面土層での粗砂細礫層の層厚・層序関係と平面での粗砂細礫層の広がりを確認した。粗砂細礫層の下面は、最も高い部分でT.P. 17.70m前後である。ここでは、粗砂細礫層の採取を行い（土嚢袋80袋分）、洗い出し・抽出作業を行った。その結果、調査時点では時代が確定できないながら、旧石器時代のサヌカイト製・凝灰岩（硬質頁岩：写真図版39-305）製石器剥片12点が出土した（写真図版39-305）。

8 2008-Ⅶ区 調査面積644㎡・下位面の調査面積292㎡（調査対象面積636㎡）（図41～45、写真50、写真図版27～31）

2008-Ⅶ区は、2008-Ⅲ区の南隣、2007-Ⅲ区の西側に位置し、今次の調査では2008-Ⅲ区と共に東側の地区になる。県文化遺産課の確認調査32・33トレンチの設定地区に該当する。計画当初は、2008-Ⅲ区と同様に排土置場の関係から反転調査の予定であったが、北側と南側に排土置場を確保できたことから一括調査が可能となった。

遺構検出面

2008-Ⅶ区も2008-Ⅲ区と同様に粘土採掘による改変に伴う水田造成のため中世遺物包含層の全てが削平され、1～3粘土採掘坑に充填されていた。また、調査開始直前に全ての耕作土・床土が除去された。この地区では、上位面の遺構と一部下位面の調査を行うことができた。

〈2008-Ⅶ区上位面の調査と出土遺物〉

2008-Ⅶ区上位面では、土坑15基・落ち込み状遺構3箇所などを検出した。大半の遺構は、褐灰色系シルトを埋土とするものである。検出した土坑の内、53・54・55・56・57・58土坑は、8落ち込み状遺構の埋土を除去した下面においての検出である。

2008-Ⅶ区上位面の遺物（12点）の大半は、粘土採掘坑に係る埋土最上層から出土した鎌倉・室町時代の土器・瓦類で占められる。なお、一連の褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・柱穴状遺構・落ち込み状遺構からの遺物は皆無である。

ここでは、主な土坑・落ち込み状遺構についてのみ記述する。

46土坑

46土坑は、2008-Ⅶ区の東側南寄りC12-q3に位置し、45落ち込みに重複する。46土坑は、東西長軸1.23m・南北短軸0.60m・最深0.48mで、長楕円形状を呈する。基底部の東寄りに径0.18m・最深0.20mの柱穴様の小穴が存在する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

49土坑（写真図版28）

49土坑は、2008-Ⅶ区の中央北寄りC12-s3に位置する。49土坑は、東西2.90m・南北1.75m・最深0.34mで、不整形な形状を呈する。埋土は、傾度の高い順に褐灰色系シルト・黒褐色系シルト・灰黄褐色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

55 土坑

55 土坑は、2008—Ⅶ区の東側北寄り C12—p・q 1 に位置する。55 土坑は、東西長軸 1.92 m・南北短軸 0.54 m・最深 0.10 m で、隅丸長方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする単層である。遺物は出土していない。

57 土坑 (写真図版 28)

57 土坑は、2008—Ⅶ区の東側北寄り C12—o・p 1 で、55 土坑の東隣に位置する。57 土坑は、東西短軸 0.91 m・南北長軸 0.98 m・最深 0.20 m で、隅丸方形の形状を呈する。埋土は、褐灰色系シルトを基本とする。遺物は出土していない。

45 落ち込み状遺構

45 落ち込みは、2008—Ⅶ区の中央南寄り C12—q 3・4～s 3・4 に位置し、46 土坑が重複する。45 落ち込みは、東西 9.4 m・南北 3.5 m・最深 0.10 m を測り、やや歪な形状を呈する。埋土は、灰黄褐色系シルトを基本とし、直下の基盤層に類似する。遺物は出土していない。

〈2008—Ⅶ区下位面の調査と出土遺物〉(図 45、写真 50、写真図版 29・30)

2008—Ⅶ区下位面では、土坑 1 基、複数箇所其自然流路状の落ち込みを検出した。

2008—Ⅶ区下位面の出土遺物は、粗砂細礫層からの石器・石器剥片のみである。

下位面：101 土坑 (図 44、写真 50、写真図版 29)

101 土坑は、下位面の調査で唯一掘り込みの認められる土坑である。調査区の中央南側 C12—r 3・4 に位置する。101 土坑は、東西長軸 1.5 m・南北短軸 0.84～1.05 m・最深 0.17 m で、歪な形状を呈する。土坑の法面は、北側と東側が比較的緩やかに傾斜し、南側が急角度で傾斜する。基底部は、北側から南側に向けて緩やかに傾斜するものの比較的平坦である。

埋土は、部分的に緑灰色ないし暗緑灰色粗砂細礫層が入った上に、褐灰色シルトないし黒褐色シルトが入り込む。堆積埋土の観察に努めながら丹念に掘削を行ったが、遺物は出土していない。

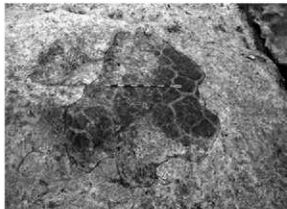


写真 50 2008—Ⅶ区下位面 C12—r 3・4
101 土坑検出状況 (南寄り西から)

下位面：自然流路状の落ち込み

2008—Ⅶ区下位面は、粗砂細礫層を埋土とする大小の落ち込みによって形成され、全体の中で、大きく広い範囲で高低差を形成している。落ち込みの形状は様々であるが、タイプ分けすることも可能である。落ち込みの走行は、調査区西側では主に南東から北西を、東側では南西から北東を指向する。また、調査では、落ち込みの形状と粗砂細礫の大きさの相関関係にまで及んでいない。

粗砂細礫層は、調査区壁面の断面土層観察では一時に堆積したのではなく、複数回による堆積と見なされる状況にある。粗砂細礫層の堆積は、調査区全域に及ぶものであり、層厚 0.16 m～0.84 m を測る。

旧石器時代の遺物の抽出を目的とした粗砂細礫層の採取は、4 m 方眼を基本にしたが、採取位置・範囲について厳密にしていない。粗砂細礫層の採取に当たっては、極力、落ち込み内の粗砂細礫層の採取も行ったが、現時点の資料では石器・石器剥片が特に多くなる傾向はなかった。

補足調査 (巻頭写真図版 2・写真図版 31)

2008—Ⅶ区下位面では、補足調査A・Bと呼称して2箇所で行った。

補足調査A（巻頭写真図版2）は、2008—Ⅶ区下位面 C12—p3 の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9㎡（東西3m×南北3m）で行った。補足調査Aでは、調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=14.00m前後（耕作土天端復元値 T.P.=19.20m前後）まで行い、地山基盤層はT.P.=16.00m前後で確認した。

補足調査B（写真図版31）は、2008—Ⅶ区下位面 C12—s・t4 の調査区南壁沿いにおいて、天端面積約9㎡（東西3m×南北3m）で行った。補足調査Bでも、補足調査Aと同様に調査区南壁断面土層での地山基盤層までの層厚・層序関係と下位層の確認を行った。最終的な掘削は、T.P.=15.30m前後（耕作土天端復元値 T.P.=19.20m前後）まで行い、地山基盤層はT.P.=16.00m前後で確認した。

9 小結

2008年度の調査で、当該範囲の和歌山県土木部から依頼・県文化遺産課から指示のあった地区の調査を完了することになった。1980（昭和55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる吉備インターチェンジ（現、有田インターチェンジ）から国道42号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われて以来、広範囲に及ぶ調査が行われてきた。

旧石器時代に関しては、2007年度の調査に伴う『平成19年度県道吉備金屋線道路改良工事に伴う藤並地区遺跡発掘調査の概要報告』では、「07—Ⅰ区・07—Ⅱ区においては、基盤層Ⅲより下位に基盤層Ⅵ・Ⅶが存在する。調査で明確な根拠を得る事ができなかったが、基盤層Ⅶが締りのあるシルトであることから旧石器時代の基盤層である所謂地山が存在するものと思われる。周辺部での旧石器時代の遺構と遺物を考えるに当って、下部基盤層の時代認定を検討する必要があるものと思われる。と共に、07—Ⅲ区周辺は元より広範において、旧石器時代の遺構・遺物・層序の検出に当たって注意が喚起される場所である。」とした。

このことに関して、旧石器時代の基盤層である所謂地山は、今回の調査で更に下位に存在することが確定した。また、今回の調査による新たな成果を加えることにより藤並地区遺跡の理解に対して、旧石器時代の様相に一つの見解を提示することが可能となった。

この旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、既往の調査に伴う補足調査（2008—Ⅱ区）、県文化遺産課確認調査30トレンチ（写真51）、道路本体工事に伴う深掘り部分（3箇所）の確認・観察に伴い粗砂細礫層の存在が確認されている（写真52）。これらのことから、旧石器時代の往時の自然地形・生活面は、今次の調査範囲全域（2006



写真51 県文化遺産課確認調査30トレンチ
調査区南壁断面土層（北から）



写真52 2008—Ⅳ区 道路工事掘削部分
西壁断面土層（東から）

～2008年度調査)に広がるものと考えられる。

国道42号線への導入路部分の調査(1980(昭和55)年度)では、1980年度Ⅰ区T.P.=17.50～18.00m前後で多数の自然流路と流路周辺に展開する旧石器時代の生活領域が検出されている。

土生池遺跡(有田川町土生)では、緩斜面地1984年度N・M・S地点T.P.=29.40～30.50m前後で土坑・自然流路などが多数検出されている。

一般国道42号湯浅御坊道路の建設工事に先立つ調査(1989(平成元)年度から1993(平成5)年度)では、1991年度M地区T.P.=24.50～25.20m前後で当該期の生活面に散在する石器・石器剥片の広がりが見出されている。

今次の2008～Ⅶ区下位面調査では、粗砂細礫層下面のT.P.=17.50～17.80m前後で土坑1基(101土坑)・多数の自然流路状の落ち込みを検出した。調査では詳細な観察ができなかったが、調査地全体に厚薄に堆積する粗砂細礫層の在り方は、自然流路状と称するより土砂流等の作用による挟り込みが生じた痕跡と考えられる。

2008～Ⅱ区では、補足調査ながら2008～Ⅶ区と類似するT.P.=17.60m前後で下位面の存在を確認している。また、2006～Ⅲ区では、粗砂細礫層に関係する1層上位の粗砂層の上端面をT.P.=18.70m前後で確認している。更に、県文化遺産課の確認調査30トレンチにおいて粗砂細礫層に関する調査が行われ、T.P.=17.75～17.90m前後で確認されている。

これらのことから、旧石器時代に伴う遺物の確認できていない地点は実証性の低い状態となるが、同一層序の広範にわたる分布は土生池遺跡1984年度N・M・S地点、藤並地区遺跡1980年度Ⅰ区、藤並地区遺跡1991年度M地区調査との関連性を強く示唆するところである。旧石器時代の自然地形・生活面に対応する同一層序は、生活領域を確定できないにしろナイフ形石器段階の展開を広範に認めるところである。

藤並地区遺跡1980年度Ⅰ区での展開は、旧石器時代末の有舌尖頭器や縄文時代草創期の石鏃を伴う過渡的な時期と認識されていることから、小期により領域の展開が土生・水尻・天満の範囲の中で移動・併存しているものと考えられる。

旧石器時代領域の広がり、小期の石器組成の変遷など、詳細検討については今後も藤並地区遺跡1980年度Ⅰ区、土生池遺跡1984年度N・M・S地点、藤並地区遺跡1991年度M地区、藤並地区遺跡2008～Ⅲ・Ⅶ区との関係の中で検討していきたい。

2007～Ⅲ区において、6土坑と称した遺構については、調査時に最下位の堆積埋土と判断した粗砂細礫層から風化の著しい硬質頁岩製の剥片石器と認定した遺物(写真42)があり、旧石器時代の遺構と判断したところである。今次の2008～Ⅲ区・Ⅶ区下位面の調査等から勘案すれば、粗砂細礫層出土遺物と判断したものは疑似石器と判断した方が良いと思われる。また、これは、2007～Ⅲ区下位面の基盤層Ⅳ粗砂細礫層に伴うものと判断すべきと考えに至った。

また、2008～Ⅲ・Ⅶ区の上位面調査における褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みは、先述したとおり、出土遺物が皆無のための確かな時期判断ができない。根拠に乏しいが、縄文時代から弥生時代前期に至る何れかの時期に対応するものと思われる。その他、調査の主体にはなっていないが2006～Ⅱ・Ⅲ区、2008～Ⅱ区においても褐灰色系から黒褐色系シルト埋土の土坑・落ち込みを確認している。但し、これらの土坑の堆積層には遺物が伴わない事、堆積層に人為的に手の加わった埋土でない可能性が高いことなどから、土坑は倒木等による自然の所産、落ち込みは自然地形への埋積によるものと考えたい。

第IV章 総括

出土遺物内容とその分布領域の性格に関して

2007—Ⅲ区、2008—Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ区の下位層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する1990年調査M地区及び土生池遺跡(25)周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうるができることとなった。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイト製ナイフ形石器・サヌカイト製横長剥片・チャート若しくは凝灰岩(硬質頁岩)製縦長剥片・サヌカイト製錐状石器、その他のサヌカイト・凝灰岩(硬質頁岩)・チャート製剥片がある。

縄文時代草創期・縄文時代晩期若しくは弥生時代前期・後期後半については、遺物が極めて少ないため、その内容を推し量るには無理があることが明らかとなった。

飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包含層(水田耕作土)からの出土であるため、全ての地区において窯場からの集積を反映したものでないことが確認されることとなった。ただ、出土遺物の中には飛鳥Ⅱの段階の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する城山窯跡群(22)や地藏山窯跡群(23)・風呂の谷窯跡群(24)などの須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008—Ⅱ区において、単独で検出した奈良時代の掘立柱建物の位置付けを明確にすることができていない。

平安時代後期は、掘立柱や溝を検出した2007—Ⅲ区のみに当該期の遺構・遺物が集中して認められることから、2007—Ⅲ区調査地から東側に水路を挟んで展開する未周知の遺跡に關与することが濃厚であると考えられる。

平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007—Ⅲ区の良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007—Ⅲ区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含(包含層第3層・第4層)として位置付け理解しうる。

以後、室町時代にかけて当該地一帯は水田経営の基盤となっている。鎌倉時代から室町時代の集落の中心は、既往の有田川町教育委員会の調査から、藤並地区遺跡の北側に位置する天満Ⅰ遺跡(16)・天満Ⅱ遺跡(17)にあるものと考えられる。

以上のように、調査・出土遺物整理作業によって得られた遺物内容とその分布領域から、藤並地区遺跡の周辺部の状況を踏まえてその変遷を把握することとなった。

【引用・参考文献】

- 吉松敏隆 1982『地理的環境』『田殿・尾中遺跡—庄地区道12号長田連絡改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』吉備町教育委員会
- 藤井保夫・渋谷高秀他 1985『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書—海南湯浅道路に伴う関連遺跡発掘調査—』和歌山県教育委員会
- 井石好裕他 1995『藤並地区遺跡発掘調査報告書—一般国道42号湯浅御坊道路(Ⅰ)建設に伴う発掘調査—』(財)和歌山県文化財センター
- 2005『吉備町の文化財』吉備町教育委員会
- 川口修実・佐々木宏治 2008『旧吉備中学校校庭遺跡—有田川町公共下水処理施設建設に伴う発掘調査報告1—』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書 第1集 有田川町遺跡調査会
- 川口修実 2008『藤並地区遺跡—町道吉備インター連絡線改修工事に伴う発掘調査—』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書 第2集 有田川町遺跡調査会

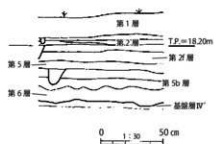


図7 2006-II区 基本土層 調査区北壁断面土層

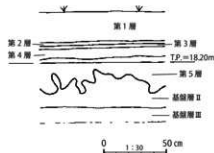


図8 2006-II区 基本土層 調査区南壁断面土層

- 第1層 耕作土
第2層 床土、旧耕作土
第3層 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト
第4層 10YR5/1 褐色色(粘質)シルト
第5層 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト
第6層 10YR5/1 ~ 4/1 褐色色粘質シルト
基盤層II 2.5Y5/1 緑灰色粘質シルト
基盤層III 10YR5/1 青灰色粘質シルト

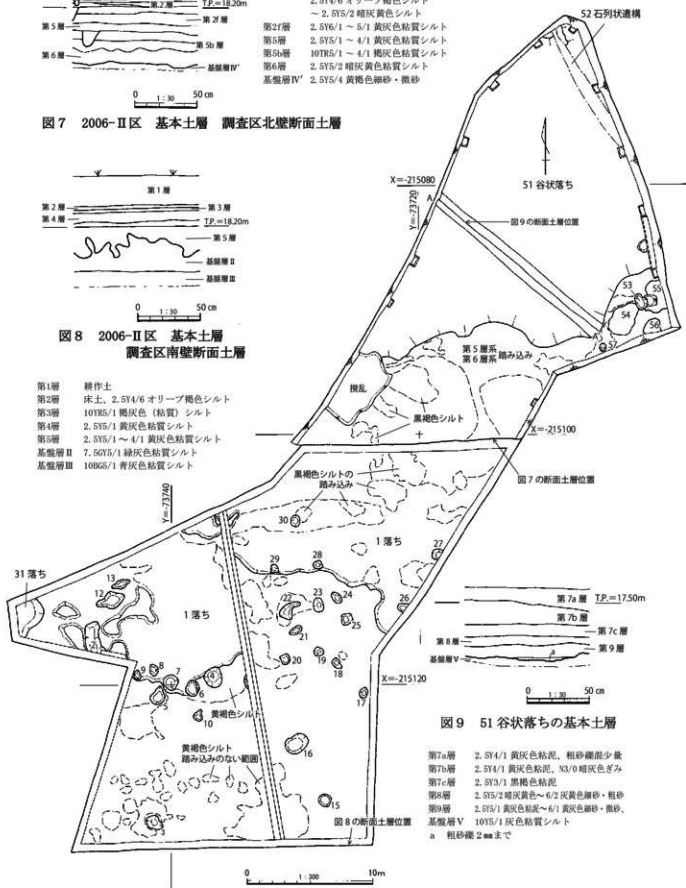


図6 2006-II区 調査遺構全体図

図9 51 谷状落ちの基本土層

- 第7a層 T.P.=17.50m
第7b層
第7c層
第8層
第9層
基盤層V
a 粗砂礫 2mmまで

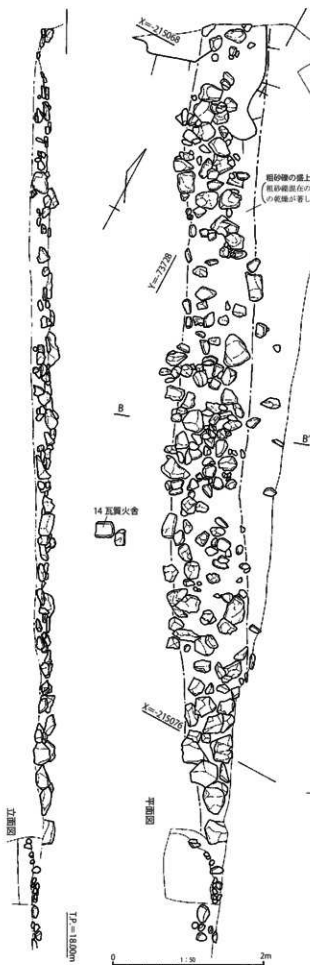


図 10 2006-I 区 52 石列状遺構実測図

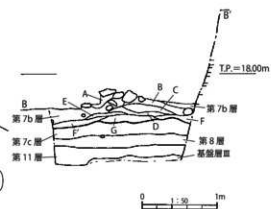


図 11 2006-I 区 52 石列状遺構断面土層図

人為的堆土

- A 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
- B 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂礫
- C 2.5Y4/3 オリーブ褐色～5/6 黄褐色粗砂礫
- D 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、粗砂礫多量混
- E Dに類似、粗砂礫極多量混
- F 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、2.5Y2/1 黒褐色粘泥混在粗砂礫少量混
- F' 基本的にFと同じ、粗砂礫中量混
- G 2.5Y2/1 黒色～3/1 黒褐色粘泥

自然堆積層

- 第7b層 2.5Y4/1 黄灰色粘泥、N3/0 暗灰色ぎみ
- 第7c層 2.5Y3/1 黒褐色粘泥
- 第8層 2.5Y5/2 暗灰黄色～6/2 灰黄色細砂・粗砂
- 第11層 2.5Y2/1 黒色～3/1 黒褐色粘質シルト
- 基盤層Ⅲ 10B G5/1 青灰色粘質シルト

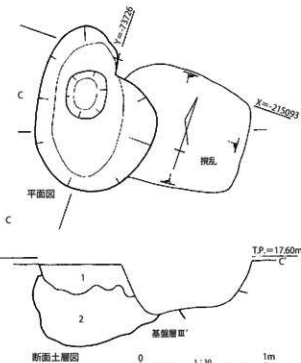


図 12 2006-I 区 53 粘土探掘土坑実測図

- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト
- 2.5Y2/1 黒色粘質シルト・基盤層Ⅲ小ブロック少量混
- 2 基盤層Ⅲの中に、1の大小小ブロック多量混
- 基盤層Ⅲ 5Y6/1 灰粘質シルト

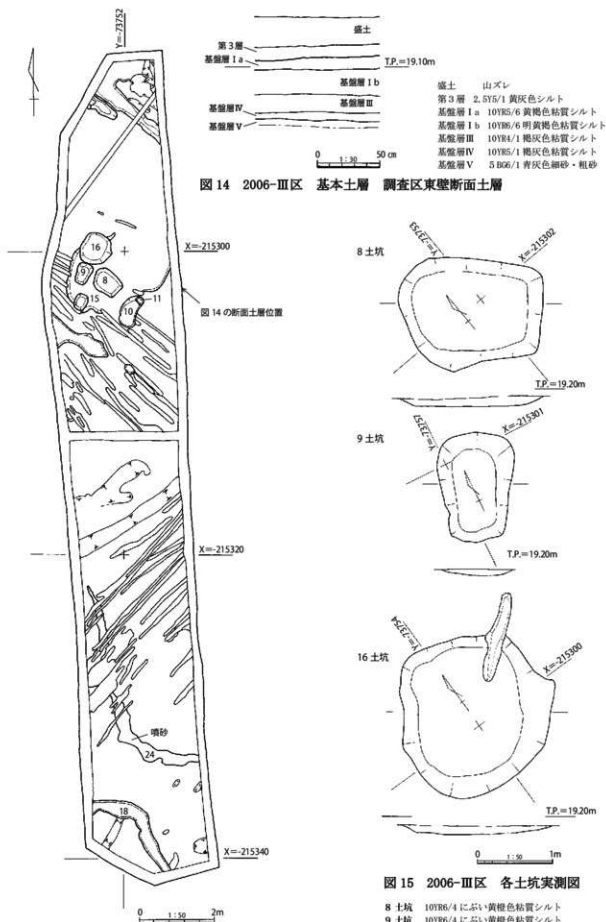


図 14 2006-Ⅲ区 基本土層 調査区東壁断面土層

図 14 の断面土層位置

図 15 2006-Ⅲ区 各土坑実測図

図 13 2006-Ⅲ区 調査遺構全体図

図 17 の断面土層位置
Y=73800



図 16 2007-I 区 調査遺構全体図

- 1 人為 10YR5/1 褐色シルト
～10YR6/2 黄褐色シルト
- 2 人為 10YR6/1・10YR4/1 褐色シルト中大ブロック多量
10YR2/1 黒色シルト小中ブロック少量
10YR5/6 黄褐色・10YR4/6 褐色シルト中大ブロック中量
- 5 自然 2.5Y6/1 黄灰色シルト
- 6 自然 2.5Y6/1 黄灰色シルト、基盤層 B 中大ブロック多量



図 17 2007-I 区 基本土層 調査区北壁断面土層

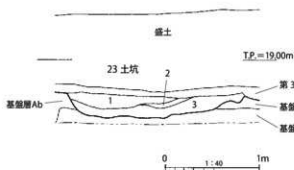


図 18 2007-I 区 23 土坑調査区西壁断面土層

- 基盤層 A 2.5Y6/3 に近い黄色粘質シルト
2.5Y5/4 黄褐色粘質シルト
2.5Y5/1 黄褐色粘質シルト } 混在
- 基盤層 Ab 基盤層 A に
10YR5/1 褐色粘質シルト破砕状に多量
- 基盤層 B 2.5Y6/1～5/1 黄灰色シルト
- 23 土坑
1 人為 10YR3/1 黒褐色粘質シルト中大ブロック極多量
2 自然 10YR3/2 黒褐色シルト
3 人為 10YR2/1 黒色粘質シルト中大ブロック極多量



図 19 2007-I 区 13 土坑実測図

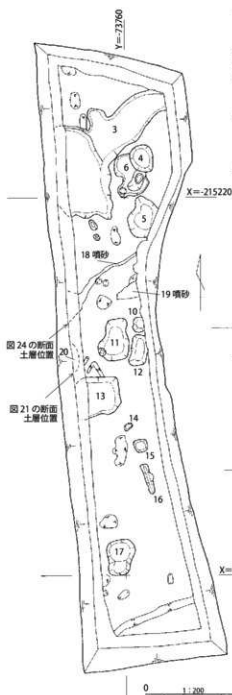


図20 2007-II区 調査遺構全体図

- 1 人為 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
10YR5/6 黄褐色シルト (基盤層 1a)
中大ブロック多量
- 2 自然 10YR5/1 褐色粘泥 NS/0 暗灰色さみ
- 3a 自然 10YR5/1 褐色粘泥
- 3b 自然・人為攪拌 3aに 2.5Y7/3 浅黄色
〜2.5Y5/3 黄褐色細砂混シルト
小ブロック中量
- 3c 自然・人為攪拌 10YR5/1 褐色粘泥
10YR3/1 黒褐色粘泥
2.5Y7/3 浅黄色細砂混シルト
ブロック状
- 4 人為 1に3bと 10YR3/1 黒褐色シルト
中大ブロック混在

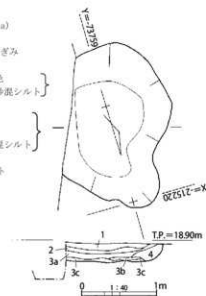


図22 2007-II区 5土坑実測図

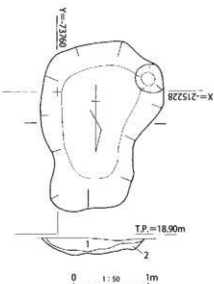


図23 2007-II区 11土坑実測図

- 1 人為 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト
2.5Y7/6 明黄褐色シルト
ブロック多量
- 2 人為 2.5Y5/1 黄褐色シルト
基盤層 A ブロック混在

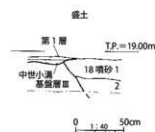


図24 2007-III区 18噴砂と中世小溝の関係
調査区西壁断面土層



図21 2007-II区 基本土層 調査区西壁断面土層

- 第1層 耕作土
- 第3層系 中世小溝
- 2.5Y5/1 黄褐色シルト
- 基盤層III 10YR4/1 褐色粘泥シルト
(I区北壁と同じ)

18噴砂

- 1 2.5Y7/1 灰白色〜7/2 灰黄色細砂
下半は、10YR5/4 にぶい黄褐色細砂・粗砂
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂塊
縦5mm まで
〜7.5YR4/4 褐色細砂・粗砂

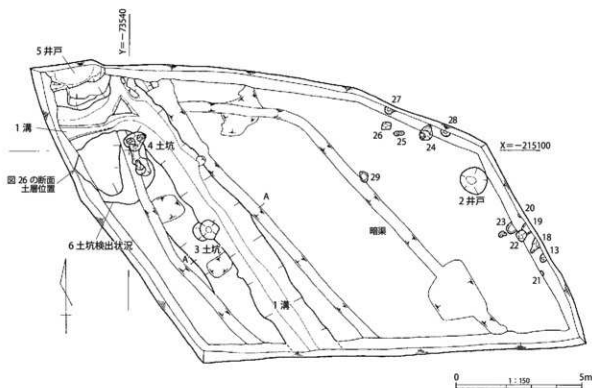


図 25 2007-Ⅲ区 調査遺構全体図



図 26 2007-Ⅲ区 基本土層 調査区南西壁断面土層

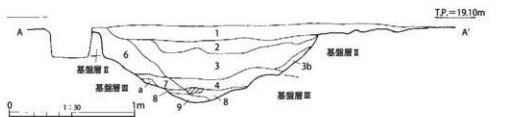


図 27 2007-Ⅲ区 1溝断面土層図

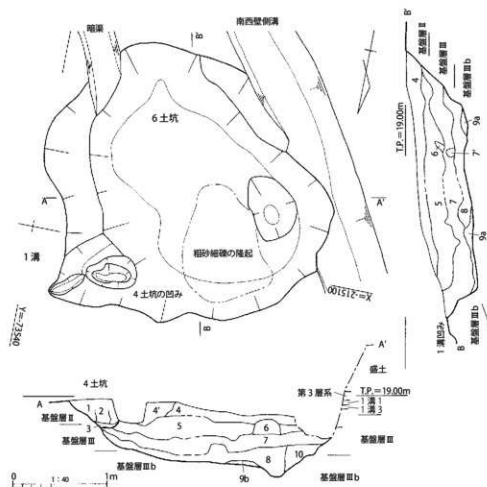


図 28 2007-Ⅲ区 6 土坑実測図

6 土坑

- 4 10YR5/6 黄褐色シルト
- 4' 4の 10YR3/3 暗褐色ぎみ
- 5 7.5YR5/6 明褐色シルト 10YR4/6 褐色ぎみ
基礎層Ⅲに類似
- 6 10YR5/6 黄褐色粗砂礫混シルト、礫 3～4 mm まで
10YR4/6 褐色ぎみ
- 7 10YR4/1 褐灰色シルト、基礎層Ⅲ中大ブロック多量
10YR3/1 黒褐色シルト小ブロック少量
- 7' 粗砂礫ブロック
- 8 10YR3/1 ～ 3/2 黒褐色シルトまだら
基礎層Ⅲ中大ブロック多量
- 9a 10YR5/6 黄褐色・5/1 褐灰色細粗砂、礫 3～5 mm 少量
- 9b 10YR5/2 ～ 4/2 灰黄褐色粗砂礫、礫 1～3 cm 角礫まで
- 10 基礎層Ⅲ + 10YR5/1 褐灰色シルト中ブロック少量
10YR3/1 黒褐色シルト中ブロック微量

4 土坑

- 1 10YR5/6 黄褐色～5/2 灰黄褐色シルトまだら
- 2 10YR3/3 暗褐色～3/2 黒褐色シルト
基礎層Ⅱ小ブロック中量
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト
基礎層Ⅲ中大ブロック少量
- 基礎層Ⅱ 10YR6/6 明黄褐色～6/4 に近い黄褐色シルト
- 基礎層Ⅲ 7.5YR5/8 明褐色～10YR 4/6 褐色ぎみシルト
- 基礎層Ⅲb 7.5YR5/8 明褐色～10YR 4/6 褐色ぎみ細砂シルト

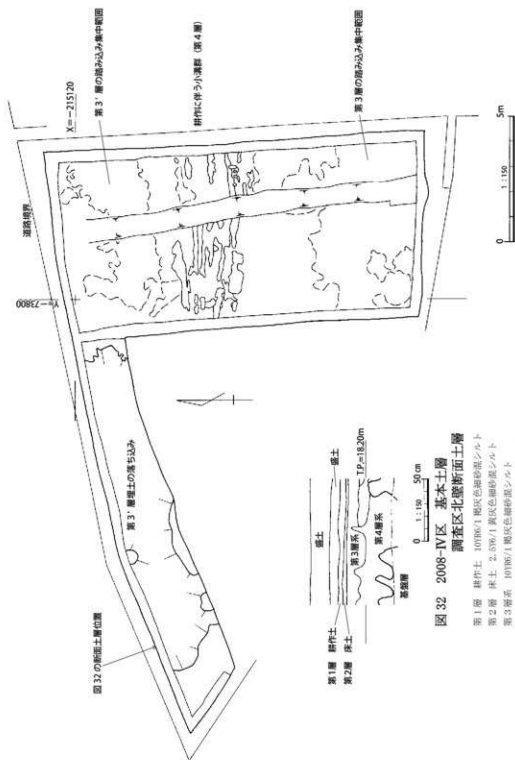


図 31 2008-IV区 調査遺構全体図

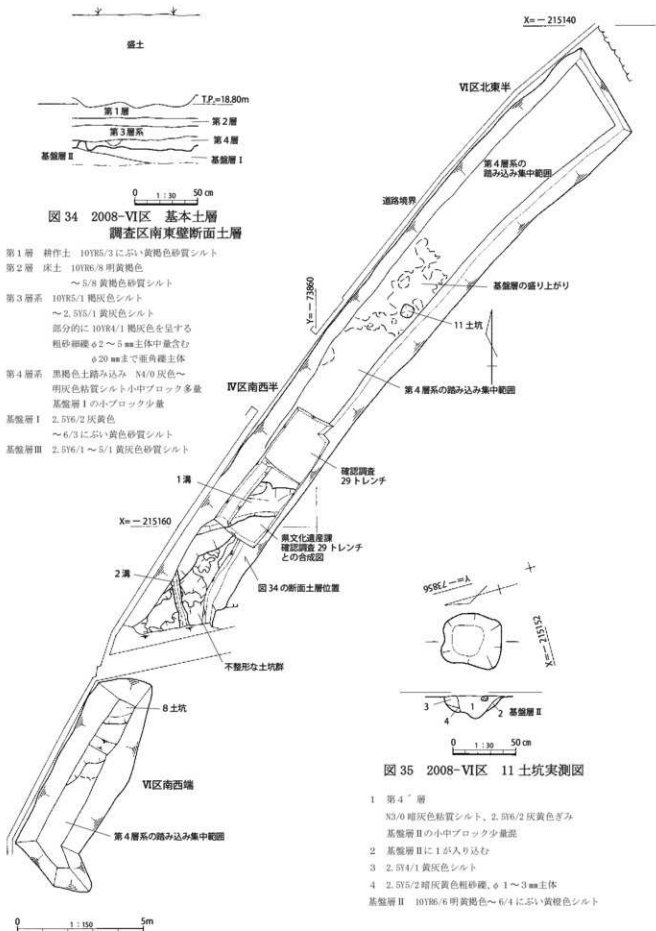


図 33 2008-VI区 調査遺構全体図

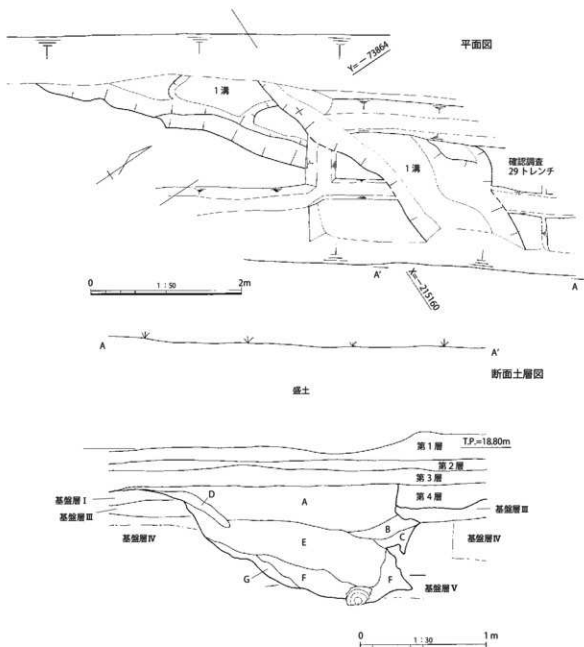


図 36 2008-VI区 1 溝実測図

1 溝

※全体に、2.5Y5/2 暗灰黄色を呈する。硬は殆んど皆無に等しい

A N3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥

5Y6/1 オリーブ灰色シルト小ブロック少量

2.5Y6/1 黄灰色シルト小ブロック少量

B A と N4/0 灰色細砂混シルト織状に埋積する。細かい木屑が中量混じる

C 基盤層IVに N3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥が入り込む。木屑が中量混じる

D 基盤層IIIに極めて類似する

E 7.5YR4/3 褐色砂泥 (N3/0 暗灰色に変色)

細かい木屑 (木っ葉) 極めて多量、腐った有機質状態

φ 3～5 cm の短寸の自然木少量・断面に対して直交するものが多い

上端 15 cm 層厚は、3～5 mm の織状の層を成して木屑層が埋積する

各木屑層間に細砂層が入り込む

F 基本的にCの逆転

木屑中量、N3/0 暗灰色～2/0 黒色粘泥に基盤層IV中大ブロック少量入り込む

G 5Y6/1 灰色粘泥と 2.5Y5/1 黄灰色細砂が織状に埋積する

第1層 耕作土 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト

第2層 床土 10YR6/8 明黄褐色～5/8 黄褐色砂質シルト

第3層系 10YR5/1 褐色シルト～2.5Y5/1 黄灰色シルト

部分的に 10YR4/1 褐色色を呈する

粗砂細砂 φ 2～5 mm 主体中量含む

φ 20 mm まで亜角礫主体

第4層系 N4/0 灰色～明灰色粘質シルト小中ブロック多量

基盤層1の小ブロック少量

基盤層 I 2.5Y6/2 灰黄色～6/3 に近い黄色砂質シルト

基盤層 III 2.5Y6/1～5/1 黄灰色砂質シルト

基盤層 IV 10G6/1～5/1 緑灰色砂質シルト

基盤層 V 基盤層IVに細・粗砂多量混入

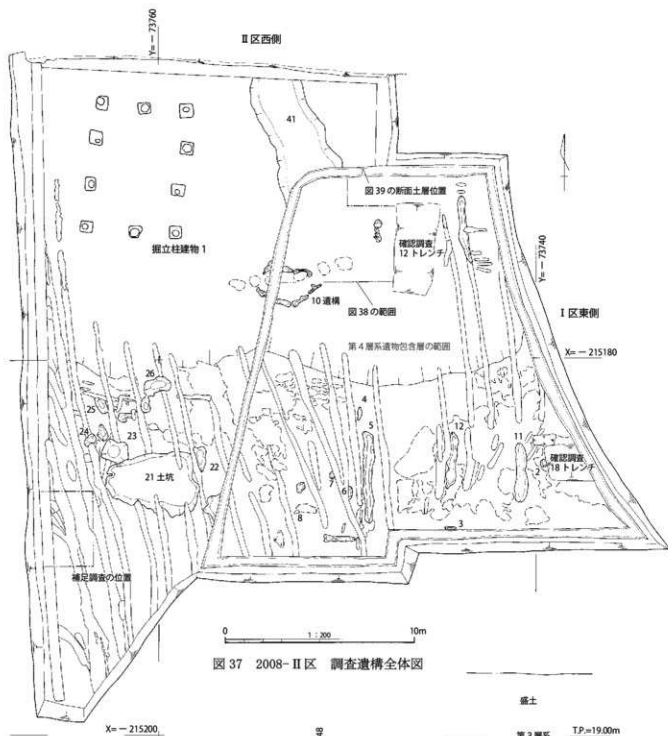


図 37 2008-II区 調査遺構全体図

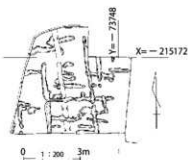


図 38 2008-II区 第3層系包含層
下面遺構

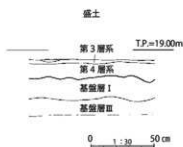


図 39 2008-II区 基本土層
調査区北壁断面土層

- 第3層系 10YR5/2 灰黄褐色シルト
- 第4層系 10YR6/2 灰黄褐色シルト
- 基盤層I 10YR5/6 黄褐色シルト
- 基盤層II 10YR5/6 黄褐色微砂混シルト

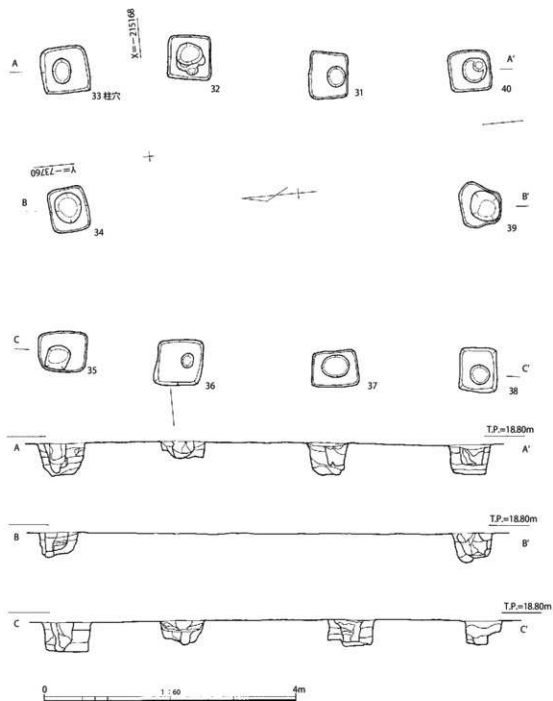
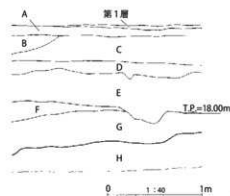


图 40 2008-II 区 掘立柱建物 1 实测图



補足調査Bの位置(写真図版31～2に参照)

第1層 耕作土

A 7.5YR6/8褐色～5/8明褐色粘質シルト(基盤層Ⅱ)*褐色粒

A-C層界 暗褐色粒が西側に進むにつれ減少し、層界が明確でなくなる

B 10YR5/4にふく黄褐色粗砂礫、粗砂主体、直径0.1～3mm中量・4～5mm少量

C 基盤層Ⅱに類似するが、7.5YR5/8明褐色シルト、10YR4/4～4/6褐色シルト多量

D 変色の粘質シルト、2.5Y5/1～4/1黄灰色シルト

E 10YR6/4にふく黄褐色～10YR6/6明褐色シルト

F 旧石器遺物を包含する、7.5Y4/2灰オリーブ粗砂礫

G 旧石器遺物を包含する、30Y3/1暗オリーブ灰色粗砂礫

H 8/4灰色粘泥、砂礫を含まない

当該地点33m以西は、10YR5/6黄褐色4/6褐色6/1暗灰色粗砂礫

上平均20cmは上位層に影響されて変色2.5Y4/3オリーブ褐色

図 42 2008-VII区 基本土層 調査区南壁断面土層

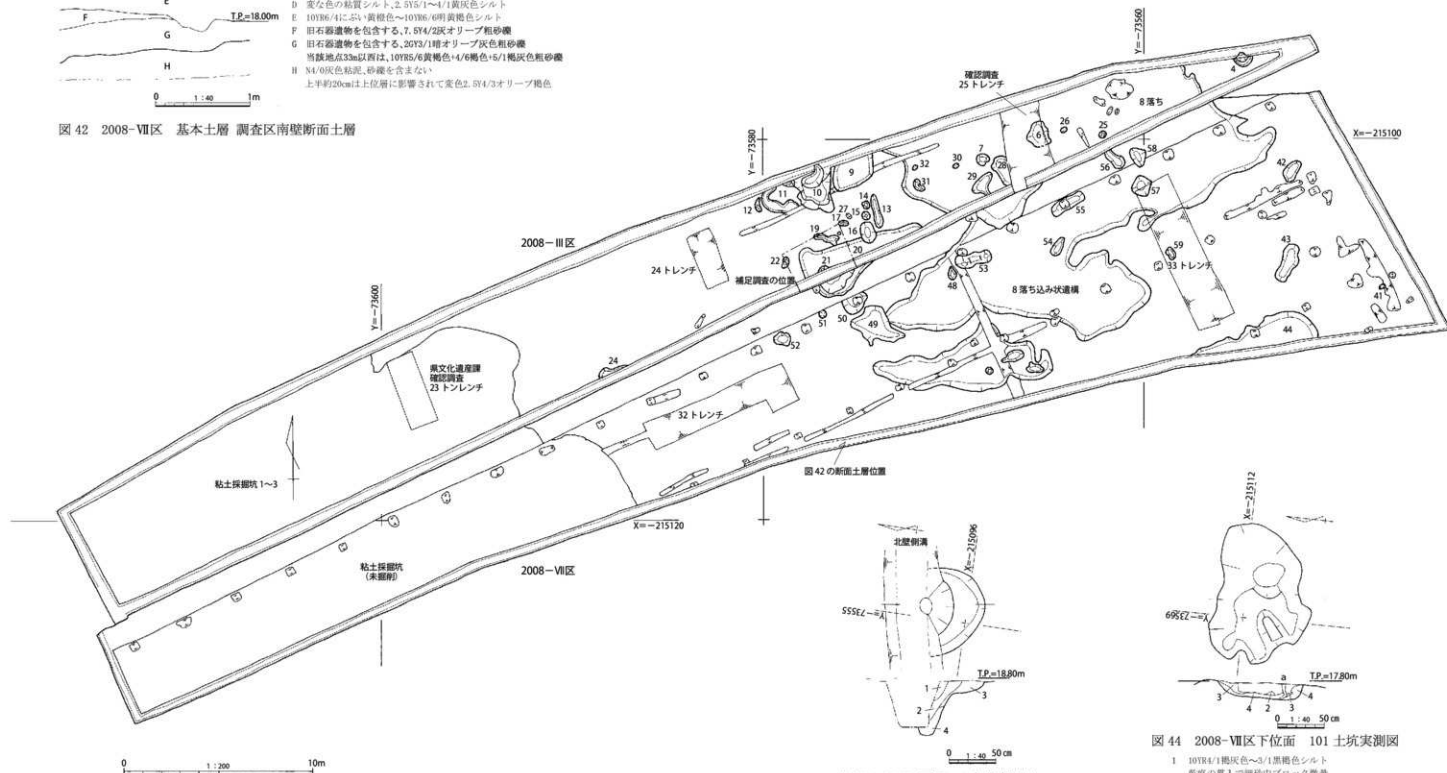


図 41 2008-III区 VII区上位層 調査遺構全体図

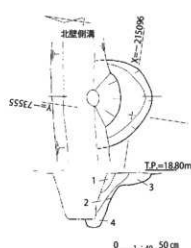


図 43 2008-III区 4土坑実測図

- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 2 10YR3/2黒褐色シルト
- 3 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト
- 1～4共に、基盤層Ⅲ黄褐色シルトをブロック状に含む

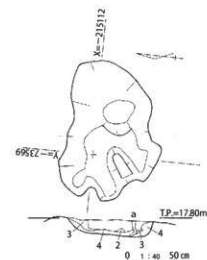


図 44 2008-VII区下位面 101土坑実測図

- 1 10YR4/1暗灰色～3/1黒褐色シルト
乾涸の貫入で細砂中ブロック微量
- 2 5GY5/1オリーブ灰色細砂礫シルト
- 3 10Y5/1緑灰色～4/1暗緑灰色粗砂礫、直径0.1～5mm主体
- 4 基盤層Ⅲ灰色粘泥に細砂少量入り込む
- a 乾涸 5Y灰褐色粗砂

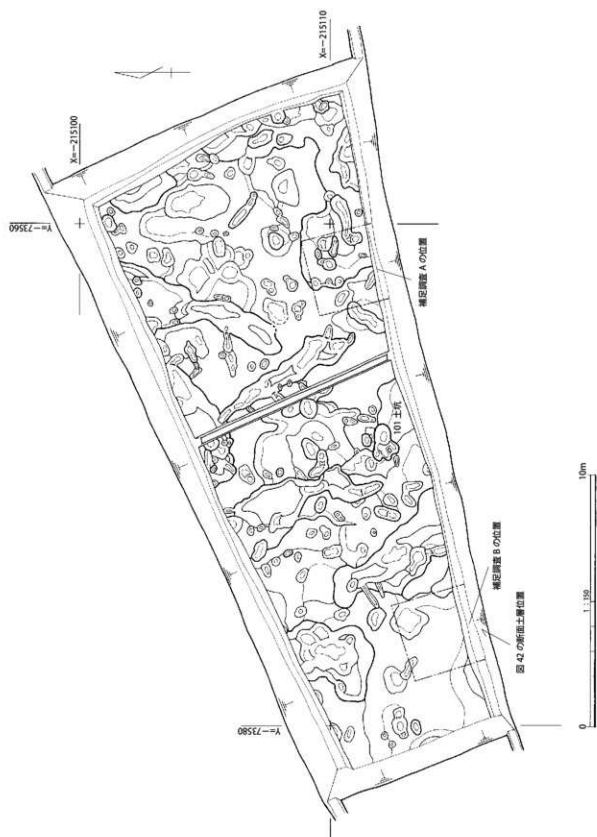


図 45 2008-VII区下位面 調査遺構全体図

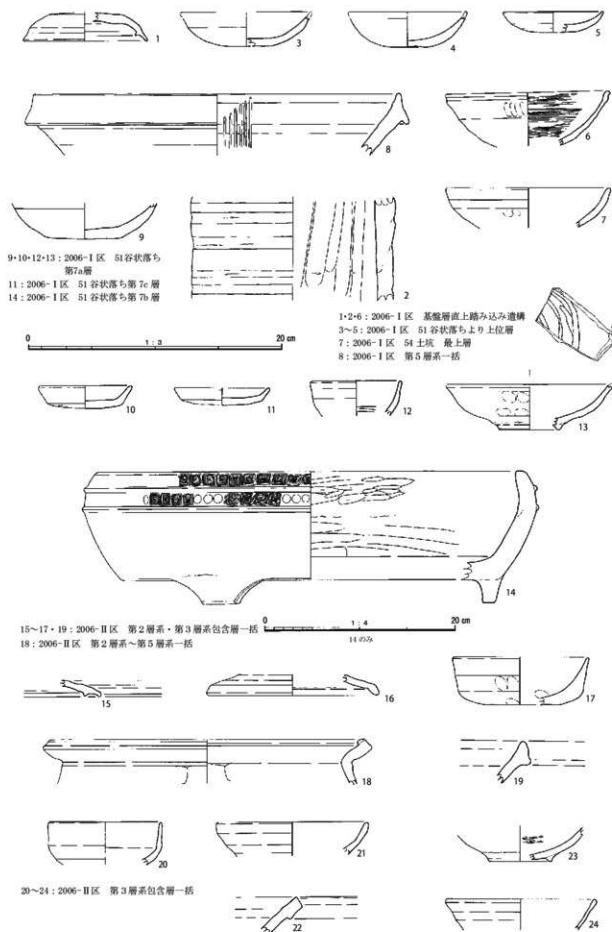


図 46 出土遺物実測図 1

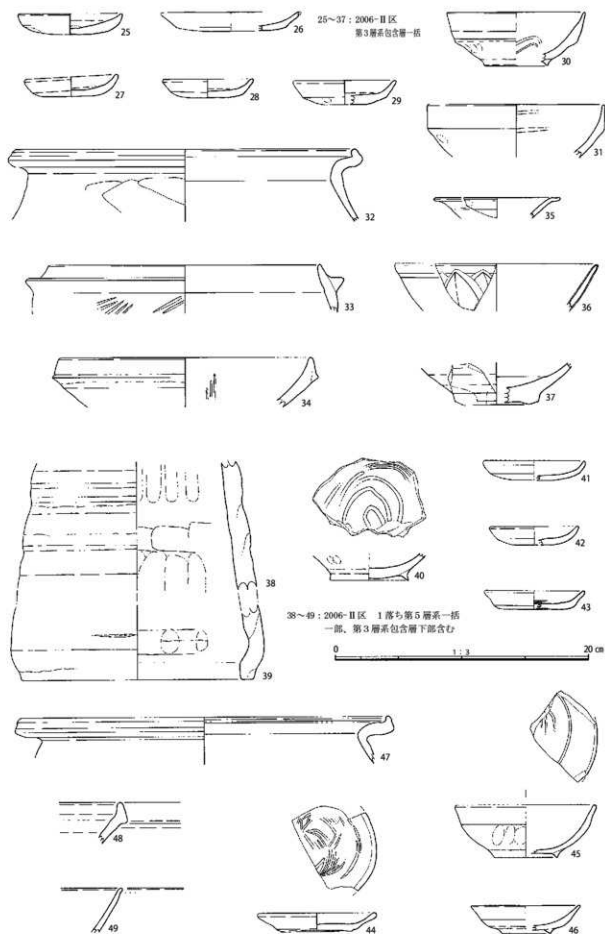


図 47 出土遺物実測図 2

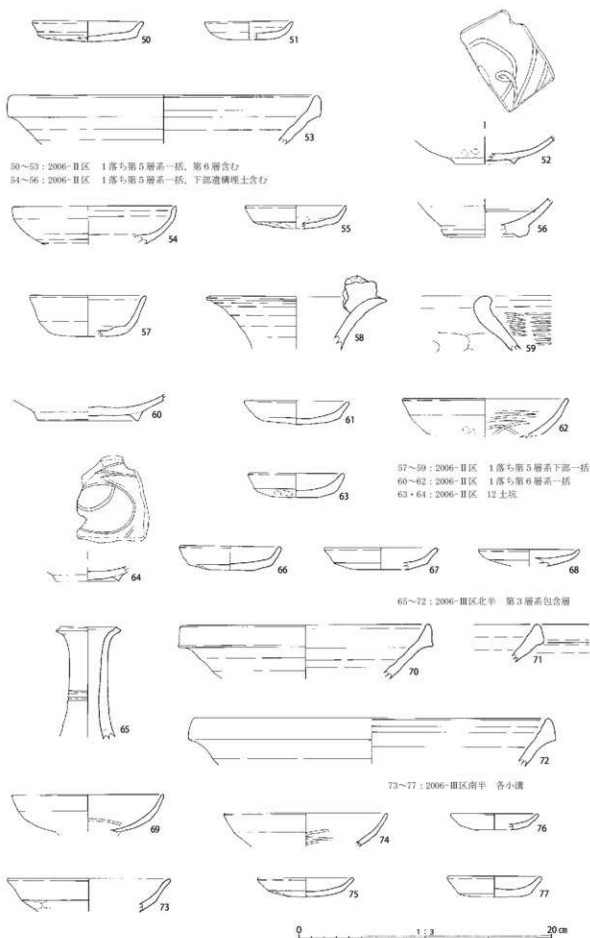


図 48 出土遺物実測図 3

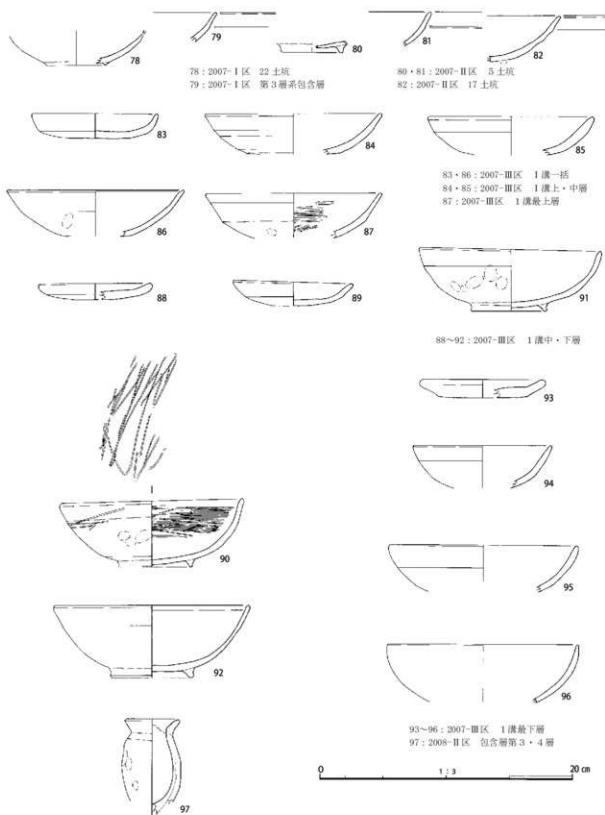


图 49 出土遺物実測図 4

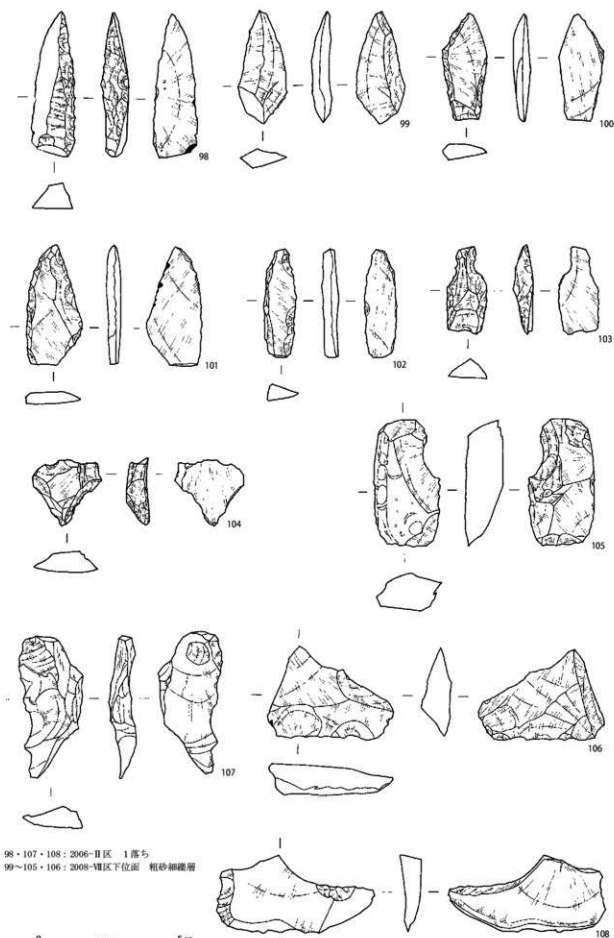
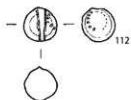
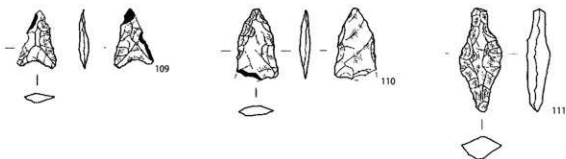


图 50 出土遺物実測図 5



- 109 : 2006-Ⅱ区 1 落子
110 : 2006-Ⅱ区 第3层系包含层上部
111 : 2006-Ⅱ区北半 第3层系
112 : 2006-Ⅱ区 第3层系包含层下部
113・114 : 2006-Ⅱ区 第3层系包含层一括
115 : 2006-Ⅱ区北半 第3层系包含层下部一括
116 : 2006-Ⅱ区北半 15 土坑
117 : 2007-Ⅱ区 1 溝最下层基底部

0 3 4 5 cm
109~112

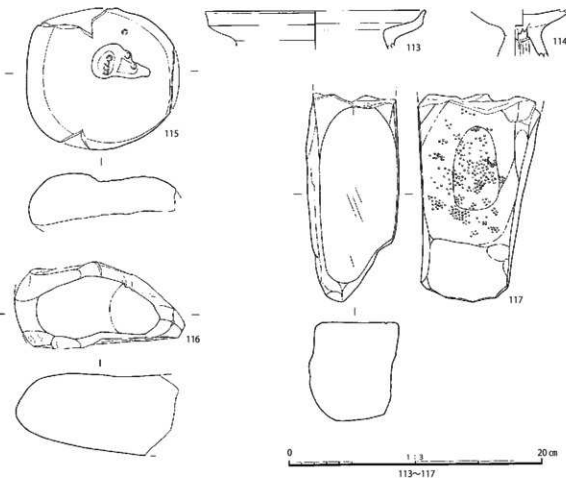


图 51 出土遺物実測図 6

表3 藤並地区遺跡 各地区出土遺物数量 (西端の地区から東側の地区へ)

大凡の時代		旧石器			縄文		弥生 (庄内期含む)				飛鳥・奈良・平安				平安末・鎌倉・室町										江戸				不明	合計	備考				
	地区	石器	剥片 他	小計	縄文 土器	石器 剥片 他	小計	弥生 土器	石器 剥片 他	小計	土器	甕 土器	漆器	埴輪 灰輪 他	瓦	小計	土器	瓦器	土釜	須恵 瓦土器	瓦葺 土器	陶器	磁器	その他	瓦	小計	土器 瓦土器	陶器				その他	瓦	小計	
1	2008-V区	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	5	0	54	0	2	61	20	161	4	9	0	2	3	2	1	202	0	0	0	0	0	267		
2	2008-I区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	7	7	51	1	0	0	1	0	3	1	64	0	0	0	0	0	71		
3	2008-IV区	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	37	0	0	37	7	236	3	6	0	1	1	3	4	261	0	0	0	0	0	299		
小計	Aブロック	0	0	0	0	1	1	4	0	0	4	5	0	98	0	2	105	34	448	8	15	0	4	4	8	6	527	0	0	0	0	0	637		
4	2006-I区	0	0	0	0	1	1	1	1	0	2	0	0	34	0	20	54	19	384	32	11	12	3	1	1	1	464	0	0	0	0	0	6	527	
5	2006-II区	2	13	15	0	3	3	18	7	0	25	44	12	300	1	11	368	190	1050	70	34	23	26	17	35	13	1458	0	11	0	0	11	10	1890	
小計	Bブロック	2	13	15	0	4	4	19	8	0	27	44	12	334	1	31	422	209	1434	102	45	35	29	18	36	14	1922	0	11	0	0	11	16	2417	
6	2008-V区	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	0	15	0	0	17	0	91	1	5	0	1	1	0	2	101	0	1	0	1	2	0	121	平面的には未調査	
7	2008-II区	0	0	0	0	1	1	4	1	0	5	51	2	221	1	8	283	122	790	29	13	2	9	8	2	18	993	0	2	0	0	2	6	1290	
小計	Cブロック	0	1	1	0	1	1	4	1	0	5	53	2	236	1	8	300	122	881	30	18	2	10	9	2	20	1094	0	3	0	1	4	6	1411	
8	2007-I区	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	7	0	1	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0	10		
9	2007-II区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	64	0	0	0	0	0	0	0	67	0	1	0	0	0	0	69	
小計	Dブロック	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	0	0	3	3	71	0	1	0	0	0	0	0	75	0	1	0	0	0	0	79	
10	2006-III区	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415	
小計	Eブロック	0	0	0	0	0	0	2	10	0	12	1	1	40	0	5	47	20	297	11	12	1	6	0	8	1	356	0	0	0	0	0	0	415	
11	2008-III区	0	5	5	0	0	0	0	0	0	4	0	42	0	2	48	18	647	15	14	0	7	6	2	0	709	0	6	0	0	6	0	768	粘土探掘坑掘削	
12	2008-V区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	9	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	12	粘土探掘坑未掘削	
13	2007-III区	0	5	5	0	3	3	6	0	0	6	281	125	58	2	4	470	67	200	23	1	0	0	0	1	0	292	0	0	0	0	0	9	785	
小計	Fブロック	0	10	10	0	3	3	6	0	0	6	285	125	103	2	6	521	85	856	38	15	0	7	6	3	0	1010	0	6	0	0	6	9	1565	
14	2008-III区下位面	0	12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	一部、補足調査のみ
15	2008-V区下位面	7	46	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53	部分的な調査 相砂組遺構の一部	
小計	Fブロック下位面	7	58	65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65		
合計		9	82	91	0	9	9	36	19	0	55	388	140	814	4	52	1398	473	3987	189	106	38	56	37	57	41	4984	0	21	0	1	21	31	6589	

表4 各地区出土遺物接合關係一覽

出土 遺物 登録 番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合關係	出土 遺物 登録 番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
151	2006-Ⅱ区 E12-ε2	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む	奈良 須惠實 陶器部 (内筒状土製品)	163	2006-Ⅱ区 E12-ε2	——	第2層系一括 第3層系包含層上 部一括
153	2006-Ⅱ区 E12-ε2	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む		172	2006-Ⅱ区 E12-ε	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む
162	2006-Ⅱ区 E12-ε2	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む					
131	2006-Ⅱ区 E12-ε3	1 薄ち	第5層系下部一括	奈良 須惠實 長頸壺 口縁部	153	2006-Ⅱ区 E12-ε2	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む
168	2006-Ⅱ区 E12-ε1	1 薄ち	第5層系一括 一部、第3層系包含層 下部含む	奈良 須惠實 壺 口縁部	184	2006-Ⅱ区 E12-ε6	1 薄ち	第5層系一括 第6層含む
					186	2006-Ⅱ区 E12-ε3	1 薄ち	第5層系一括 第6層含む
190	2006-Ⅱ区 E12-ε5	1 薄ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む	奈良 須惠實 小型壺 体部	191	2006-Ⅱ区 E12-ε5	1 薄ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む
107	2006-Ⅱ区 E12-ε4	1 薄ち一括	第5層一括 一部、第3層系包含層 下部含む?	奈良 平瓦	136	2006-Ⅱ区 E12-ε3	1 薄ち	第5層系一括 下部遺構埋土含む
24	2008-Ⅱ区 1/2 東側 E12-ε19	——	包含層第3層	鎌倉 壺 体部	28	2008-Ⅱ区 1/2 東側 E12-ε18	——	包含層第3層 包含層第4層
32	2008-Ⅱ区 1/2 東側 E12-ε20	——	包含層第3層 包含層第4層	奈良 須惠實 短頸壺 口縁部	17	2008-Ⅱ区 1/2 東側 E12-ε19	——	包含層第3層系 一部埋れ含む
107	2008-Ⅱ区 1/2 西側 E12-ε20	暗渠・掘込	埋土一括	鎌倉 白磁 碗 底部	119	2008-Ⅱ区 1/2 西側 E12-ε18	——	包含層第3-4層
2	2008-Ⅵ区 南西半 F12-p16	1 溝 最上層含む	包含層第3層	奈良 須惠實 中壺 体部	15	2008-Ⅵ区 南西半 F12-p16	1 溝 最上層	第3層含む
					20	2008-Ⅵ区 北東半 F12-ε13	——	第2層 包含層第3-4層
18	2008-Ⅵ区 北東半 F12-ε12	——	第2層 包含層第3層 南東壁側溝	奈良 須惠實 壺 口縁部	31	2008-Ⅵ区 北東半 F12-ε12	10 踏み込み	第4層黒褐色土 第4層
					32	2008-Ⅵ区 北東半 F12-ε11	10 踏み込み	第4層黒褐色土 第4層

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 1

建物番号	階数	方位	実測面積㎡	国土利用計画法上の用途	地区区分	遺構出露 聖地帯・埋蔵品等	遺構番号・種類 遺構位置	遺物種類	基盤	部位	残存率	備考
1	046	西照32	99	280	2006-1-E11-a24	基礎層直上	踏み込み状遺構 第6層土	須恵器	溝	口縁部→ 天井部	約50% 約50%	口縁部内側の底は傾斜し、天井部外周面傾斜ヘラタスリ、ロク口面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
2	046	西照32	100	236	2006-1-E11-a25	基礎層直上	踏み込み状遺構 第6層土	須恵器	陶棺	脚部	不明	跡部は内側壁に突出する。内面は横方向のナメ潰れと傾斜方向のツバ潰れがあり、内面はほとんどナメ潰れ方向のナメ潰れ、粘土の接合部等の位置に凹陥跡のナメ潰れ、焼成遺存や軟弱化、反転直上
3	046	西照32	94	251	2006-1-E11-a21	第5層～第7層直上	――	土師器	皿	口縁部→ 底部	5%以下 約40%	厚みの異なる底部から内湾して立ち上る口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
4	046	西照32	95	239	2006-1-E11-a18	51号墳直上より上7	62石列葬墓	土師器	皿	口縁部→ 底部	9%以下 約30%	やや厚みのある底部から内湾して立ち上る口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
5	046	西照32	96	240	2006-1-E11-a17	51号墳直上より上7	62石列葬墓	瓦器	小皿	口縁部→ 底部	約25% 約25%	厚みの異なる底部から内湾して立ち上る口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
6	046	西照32	98	278	2006-1-E11-a23	基礎層直上	踏み込み状遺構 第5層土	瓦器	鉢	口縁部→ 底部	約30% 約30%	内湾して底部から口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
7	046	西照32	101	279	2006-1-E11-f-a23	基礎層直上	64土坑	瓦器	鉢	口縁部→ 底部	約20%	跡部は傾斜が一定で、傾斜のたために一定、傾斜不明瞭、口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
8	046	西照32	93	268	2006-1-E11-a25	第5層土一取	――	備前	漆鉢	口縁部	約5%	覆り目5本/22本、粘土に深裂跡、液状灰土・LL土を含む、ロク口面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
9	046	西照32	102	248	2006-1-E11-a20	――	51号墳直上 第7a層	土師器	皿	体部→ 底部	約60% 約20%	厚みの異なる底部から内湾して口縁部に延びる。内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
10	046	西照32	107	264	2006-1-E11-a22	――	51号墳直上 第7a層	瓦器	小皿	口縁部→ 底部	約100%	厚みの異なる底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
11	046	西照32	113	281	2006-1-E11-a19	――	51号墳直上 第7c層	瓦器	小皿	口縁部→ 底部	約20% 約25%	厚みの異なる底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
12	046	西照32	106	250	2006-1-E11-a21	――	51号墳直上 第7a層	瓦器	小皿	口縁部→ 底部	約10%	厚みの異なる底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
13	046	西照32	104	248	2006-1-E11-a20	――	51号墳直上 第7a層	瓦器	鉢	口縁部→ 底部	5%以下 約20%	厚みの異なる底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
14	046	西照32	112	282	2006-1-E11-a19	――	51号墳直上 第7a層	瓦器	火舎 (浅鉢)	口縁部→ 底部	約15% 約10%	跡部の厚い内面、跡部から内湾する口縁部に延びる。内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
15	046	西照33	4	158	2006-1-E12-m1	第2層土一取 第3層土一取	――	須恵器	蓋	口縁部	5%以下	底に散佈、ロク口面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
16	046	西照33	3	122	2006-1-E12-n3	第2層土一取 第3層土一取	――	須恵器	蓋	口縁部	約10%	底に散佈、ロク口面傾斜ヘラタスリ、型口式3段階、反転直上
17	046	西照33	5	125	2006-1-E12-k3	第2層土一取 第3層土一取	――	土師器	皿	口縁部→ 底部	約10% 約20%	厚い底部から直線的に口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
18	046	西照33	2	212	2006-1-E12-n7	第2層土一取 第3層土一取	――	土師器	土室A	口縁部	約20%	口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
19	046	西照33	1	97	2006-1-E12-m5	第2層土一取 第3層土一取	――	須恵器 東条系	浅鉢	口縁部	5%以下	口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
20	046	西照33	17	56	2006-1-E12-n6	第3層土一取	――	須恵器	杯A	口縁部→底面	約10%	未調査の底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
21	046	西照33	18	14	2006-1-E12-k1	第3層土一取	――	須恵器	杯A	口縁部	約10%	口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
22	046	西照33	20	78	2006-1-E12-q4	第3層土一取	――	須恵器	蓋	口縁部	5%以下	口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
23	046	西照33	16	59	2006-1-E12-d6	第3層土一取	――	黒色土器	鉢	体部→ 底部	約25%	粘土は図47-43（東64）瓦器小皿に類似し、10%以下は黒褐色、黒褐色の土質に類似、反転直上
24	046	西照33	19	59	2006-1-E12-p6	第3層土一取	――	灰土陶器	山形鉢	口縁部	約10%	外壁する口縁部、口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
25	047	西照33	21	76	2006-1-E12-j7	第3層土一取	――	土師器	小皿	口縁部→底面	約25%	内湾する底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
26	047	西照33	22	72	2006-1-E12-q4	第3層土一取	――	土師器	皿	口縁部→底面	約10%	全体に厚い底部で口縁部に延びる口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
27	047	西照33	23	33	2006-1-E12-r6	第3層土一取	――	瓦器	小皿	口縁部→底面	約90%	丸みのある底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
28	047	西照33	24	30	2006-1-E12-r2	第3層土一取	――	瓦器	小皿	口縁部→底面	約90%	丸みのある底部から内湾して口縁部に延びる。口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
29	047	西照33	25	2	2006-1-E12-p9	第3層土一取	――	瓦器	小皿	口縁部→底面	約25%	口縁部は、傾斜が一定で、傾斜のたために一定、傾斜不明瞭、口縁部傾斜ヘラタスリ、内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
30	047	西照33	30	66	2006-1-E12-j8-j9	第3層土一取	――	瓦器	鉢	口縁部→ 底部	約20% 約20%	厚い底部から外方に延びる口縁部へ続く。内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上
31	047	西照33	31	20	2006-1-E12-r2	第3層土一取	――	瓦器	鉢	口縁部→ 底部	約50% 約10%	厚い底部から外方に延びる口縁部へ続く。内湾部外周面傾斜ヘラタスリ、型口式2段階、反転直上

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 2

遺物番号	発掘区画	発見回数	発見時期	出土遺物 発掘時期	地区 区分	遺跡範囲・埋蔵層位	遺物番号・埋蔵 層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
32	047	08034	32	89	2006-Ⅱ区 E12-4・5	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	土師器	土釜A	口縁部	約20%	外面頸部以下底縁工具によるナリ。口縁部は内方に 湾み上がり。粘土に高石。ナリとS字状の溝は内方 に湾み上がり。片断SSとM角片少量含む(A粘土)。
33	047	08034	34	88	2006-Ⅱ区 E12-m6	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	土師器	土釜B	口縁部一 部	5%以下 約20%	斜下りに鋭角め上がり。高石。内方高石(C 粘土)。斜下に僅量付着。反転直。
34	047	08034	37	86	2006-Ⅱ区 E12-n6	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	備前	甕鉢	口縁部	約20%	内外面B67/4黄褐色・断面25/2R6/4に付く。黄褐色 を呈する。内方口縁部方向へ右回り。表面微細 な凹凸・筋を有する。断面微細な凹凸・筋を有する。
35	047	08034	40	72	2006-Ⅱ区 E12-q4	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	白磁	甕	口縁部一・底部	約10%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
36	047	08034	41	33	2006-Ⅱ区 E12-r5	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	青磁	甕	口縁部一・底部	約10%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
37	047	08034	43	66	2006-Ⅱ区 E12-s・8・9	第3層系包含層一括 遺構遺物を含む	——	白磁	甕	口縁部一・底部	約25%	内面見込と外部の縁目に差違1条。底部反転直。 全体がやや内湾して立ち上がる。内面は下方の履方 方向のナリ調整の上半の履方方向のナリ調整。外面は 全体がやや内湾して立ち上がる。全体に磨減・軟化が著 しい。反転直。
38	047	08035	56	151	2006-Ⅱ区 E12-t・2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	唐草器	陶埴	腹部	不明	全体に湾み上がり。内面は下方の履方 方向のナリ調整の上半の履方方向のナリ調整。外面は 全体がやや内湾して立ち上がる。全体に磨減・軟化が著 しい。反転直。
39	047	08035	57	172	2006-Ⅱ区 E12-u	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	唐草器	陶埴	腹部	不明	全体に湾み上がり。内面は下方の履方 方向のナリ調整の上半の履方方向のナリ調整。外面は 全体がやや内湾して立ち上がる。全体に磨減・軟化が著 しい。反転直。
40	047	08035	55	151	2006-Ⅱ区 E12-s・2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	土師器	甕	口縁部一・底部	約50%	断面の厚い部分から内湾して口縁部に湾む。口縁部は内 方に湾み上がり。断面は内方湾一面。反転直。
41	047	08035	60	172	2006-Ⅱ区 E12-v	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	土師器	小皿	口縁部一・底部	約20% 約20%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
42	047	08035	61	164	2006-Ⅱ区 E12-k2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	土師器	小皿	口縁部一・底部	約20% 約20%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
43	047	08035	64	127	2006-Ⅱ区 E12-k3	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約20% 約20%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
44	047	08035	63	141	2006-Ⅱ区 E12-j2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約20% 約20%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
45	047	08035	66	144	2006-Ⅱ区 E12-j2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	甕	口縁部一・底部	約10% 約20%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
46	047	08035	68	166	2006-Ⅱ区 E12-i2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	瓦器	小皿	口縁部一・底部	5%以下 約10%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
47	047	08035	62	162	2006-Ⅱ区 E12-j2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	土師器	土釜A	口縁部	約10%	「く」字に折れ曲がる部分からやや外反する口縁部に 湾む。口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
48	047	08035	69	151	2006-Ⅱ区 E12-s・2	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第5層系一括	唐草器 東洋系	佐鉢	口縁部	5%以下	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
49	047	08035	70	114	2006-Ⅱ区 E12-m4	一部、第3層系包含 層下部を含む	1落ち 第4層一括	白磁	甕	口縁部一・底部	不明	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
50	048	08036	74	187	2006-Ⅱ区 E12-l4	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約40% 約50%	やや内湾する部分から緩やかに外反する鋭い口縁部 に湾む。断面は内方湾一面。反転直。
51	048	08036	75	186	2006-Ⅱ区 E12-p3	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約30% 約30%	やや内湾する部分から緩やかに外反する鋭い口縁部 に湾む。断面は内方湾一面。反転直。
52	048	08036	72	187	2006-Ⅱ区 E12-l4	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	甕	口縁部一・底部	約50%	断面は内方湾一面。反転直。
53	048	08036	77	187	2006-Ⅱ区 E12-l4	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	唐草器 東洋系	佐鉢	口縁部	約10%	口縁部は内方に湾み上がる。断面は内方湾一 面。反転直。
54	048	08036	78	137	2006-Ⅱ区 E12-k4	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	唐草器	IF A	口縁部一・底部	約10% 約10%	やや厚みの部分から内湾して立ち上がり口縁部に湾 む。内外共に自然釉を有する。断面は内方湾一面。 反転直。
55	048	08036	79	137	2006-Ⅱ区 E12-k4	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約50% 約50%	やや内湾する部分から緩やかに外反する鋭い口縁部 に湾む。断面は内方湾一面。反転直。
56	048	08036	80	190	2006-Ⅱ区 E12-o6	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	白磁	甕	口縁部一・底部	約30%	内面見込と外部の縁目に付くナリ。断面は内方湾一 面。反転直。
57	048	08036	81	131	2006-Ⅱ区 E12-m3	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	唐草器	IF A	口縁部一・底部	5%以下 約25%	見込は鋭い口縁部により湾み呈する。全体に磨 減・軟化が著しい。反転直。
58	048	08036	82	131	2006-Ⅱ区 E12-m3	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	唐草器	長頸甕	口縁部	約20%	大きく外反する口縁部。口縁部は内方に湾む。内 面にスリ入り粘土の磨減あり。断面は内方湾二面 色。粘土に高石。ナリとS字状の溝は内方に湾み上 がり。片断SSとM角片少量含む(A粘土)。
59	048	08036	83	131	2006-Ⅱ区 E12-m3	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	甕	口縁部	不明	断面の厚い部分から内湾して口縁部に湾む。口縁部は内 方に湾み上がり。断面は内方湾一面。反転直。
60	048	08036	84	178	2006-Ⅱ区 E12-l4西半	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	土師器	高付付 直底	口縁部一・底部	約20%	やや厚みの部分から内湾して立ち上がり口縁部に湾 む。内外共に自然釉を有する。断面は内方湾一面。 反転直。
61	048	08036	85	178	2006-Ⅱ区 E12-l4西半	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	小皿	口縁部一・底部	約80%	やや内湾する部分から緩やかに外反する鋭い口縁部 に湾む。断面は内方湾一面。反転直。
62	048	08036	86	178	2006-Ⅱ区 E12-l4西半	——	1落ち 第5層系一括 第5層系一括 下部遺構を含む	瓦器	甕	口縁部一・底部	約10%	断面の厚い部分から内湾して口縁部に湾む。口縁部は内 方に湾み上がり。断面は内方湾一面。反転直。

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 3

遺物番号	発掘番号	発掘回数	発掘時期	出土遺物発掘時期	地区区分	遺構番号・種類	遺構位置・埋没位置	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
63	0848	08036	88	210	2006-Ⅱ区 E12-04	基礎層直上	12土杭 土層4	土師器	小皿	口縁部一部	約40%	やや厚い底部から内湾して立ち上る口縁部に延びる。内外共に磨滅著しく焼成遺存やヤケ変化。反転還元
64	0848	08036	90	203	2006-Ⅱ区 E12-04	基礎層直上	12土杭一基	瓦器	瓶	底部(肩台部)	約60%	肩台部は底縁から直湾して外方に延びる口縁部に延びる。口縁部は内湾して外方に延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋
65	0848	08037	133	47	2006-Ⅱ区北半 E13-m25	第3層土包含層 下部一基 遺構層土含む	——	須恵器	細頸甕	口縁部一 底部	約40% 約90%	肩台は底縁から直湾して外方に延びる口縁部に延びる。口縁部は内湾して外方に延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋
66	0848	08037	126	16	2006-Ⅱ区北半 E14-n2	第3層土包含層 埋没土含む	——	瓦器	小皿	口縁部一 底部	約10% 約25%	やや厚みの底部から延く内湾する口縁部に延びる。口縁部の残存率が低いため正確不明。焼成遺存やヤケ変化(熟土)。反転還元
67	0848	08037	127	24	2006-Ⅱ区北半 E13-m24	第3層土包含層一基 下部一基 遺構層土含む	——	瓦器	小皿	口縁部一 底部	約20% 約10%	肩台の底部からやや外反する口縁部に延びる。磨滅が著しく、焼成遺存やヤケ変化(熟土)。反転還元
68	0848	08037	135	48	2006-Ⅱ区北半 E13-m25	第3層土包含層 下部一基 遺構層土含む	——	瓦器	小皿	口縁部一 底部	約10% 約20%	扁平な底部からやや内湾する口縁部に延びる。焼成遺存やヤケ変化のため正確不明(熟土)。反転還元
69	0848	08037	125	36	2006-Ⅱ区北半 E13-m24	第3層土包含層一基 上部	——	瓦器	瓶	口縁部一 底部	約20% 約10%	内湾する底部からやや外反する口縁部に延びる。体部内面磨滅のミガキは太く幅3mm程度の筋線に磨滅。焼成遺存やヤケ変化(熟土)。同一個体群が検出不可。反転還元
70	0848	08037	130	3	2006-Ⅱ区北半 E13-m24	第3層	——	須恵器 東条系	甕鉢	口縁部	5%以下	口縁部で上下に肥厚する。外側に垂れ流す。口口部筋方向。右回り。肩台の筋線は口口部筋方向。肩型第1段筋。反転還元
71	0848	08037	129	1	Ⅱ区 北半 E13-m22	第3層	——	須恵器 東条系	甕鉢	口縁部	5%以下	口縁部で上下に肥厚する。外側に垂れ流す。口口部筋方向。右回り。肩台の筋線は口口部筋方向。肩型第1段筋。反転還元
72	0848	08037	136	39	2006-Ⅱ区北半 E13-m24	第3層土包含層 下部一基 基礎層遺構土含む	——	須恵器 東条系	甕鉢	口縁部	約10%	口縁部で上下に肥厚する。外側に垂れ流す。口口部筋方向。右回り。肩台の筋線は口口部筋方向。肩型第1段筋。反転還元
73	0848	08037	138	63	2006-Ⅱ区南半 E14-m6-7	基礎層直上	41小溝	瓦器	瓶	口縁部	約10%	外反する口縁部。焼成遺存磨滅のため正確不明(熟土)。相対のため正確不明。反転還元
74	0848	08037	139	64	2006-Ⅱ区南半 E14-n7	基礎層直上	35b小溝	瓦器	瓶	口縁部	約10%	内湾する口縁部。内面磨滅のミガキは太く幅3mm程度の筋線に磨滅。焼成遺存やヤケ変化(熟土)。相対のため正確不明。反転還元
75	0848	08037	140	59	2006-Ⅱ区南半 E14-m6-6 E14-m7	基礎層直上	40b小溝	瓦器	小皿	口縁部一 底部	5%以下 約25%	やや内湾する口縁部から延く外反する口縁部に延びる。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。相対のため正確不明。反転還元
76	0848	08037	141	61	2006-Ⅱ区南半 E14-m6 E14-m7	基礎層直上	36b小溝	瓦器	小皿	口縁部一 底部	約10% 約10%	内湾する口縁部。内面磨滅著しくヤケ変化(熟土)。相対のため正確不明。反転還元
77	0848	08037	142	68	2006-Ⅱ区南半 E14-m6 E14-m7	基礎層直上	42小溝一基	瓦器	小皿	口縁部一 底部	5%以下 約20%	肩台の底縁から斜めに上り直湾して延びる口縁部に延びる。焼成遺存やヤケ変化(熟土)。反転還元
78	0849	—	147	6	2007-Ⅱ区南半 E13-x10	——	22土杭一基	瓦器	瓶	底部一 底部	約10% 約5%	内湾する口縁部。肩台は底縁に直湾して延びる。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元
79	0849	—	146	2	2007-Ⅱ区北半 E13-y2	第3層土包含層	——	瓦器	瓶	口縁部	不明	磨滅の著しい外反する口縁部。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。新炭のみの
80	0849	—	149	3	2007-Ⅱ区 E13-o6	——	5土杭一基	瓦器	瓶	底部(肩台部)	約20%	磨滅の著しい底部に及ぶある遺構形状の肩台が付く。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元
81	0849	—	148	3	2007-Ⅱ区 E13-o6	——	5土杭一基	瓦器	瓶	口縁部	不明	外反する口縁部。焼成遺存磨滅のため正確不明(熟土)。新炭のみの
82	0849	—	150	4	2007-Ⅱ区 E13-o10	——	17土杭一基	瓦器	瓶	口縁部一 底部	不明	内湾する口縁部から延く外反する口縁部に延びる。口縁部の底に磨滅著しくヤケ変化(熟土)。新炭のみの
83	0849	08038	152	1	2007-Ⅱ区 C11-k25	1溝一基	土師器	小皿	口縁部一 底部	約20% 約30%	扁平な底部から内湾する口縁部に延びる。底部と口縁部の底に磨滅著しくヤケ変化(熟土)。相対のため正確不明。反転還元	
84	0849	08038	153	11	2007-Ⅱ区 C12-2	1溝 上・中層 間の2.3	土師器	瓶	口縁部一 底部	約20% 約10%	扁平な底部から内湾する口縁部に延びる。底部から口縁部にかけて三段の横溝が、内外共に磨滅著しく磨滅不明。反転還元	
85	0849	08038	154-1	25	2007-Ⅱ区 C11-k25	1溝分岐部 上・中層 間の2.3	土師器	瓶	口縁部一 底部	約10% 約10%	磨滅の著しい底部から斜めに外方に延びる口縁部に延びる。内外共に磨滅著しく磨滅不明。反転還元	
86	0849	08038	154-2	1	2007-Ⅱ区 C11-k25	1溝一基	瓦器	瓶	口縁部一 底部	約10% 約10%	磨滅の著しい底部からやや内湾する口縁部に延びる。口縁部は内湾して延びる。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元	
87	0849	08038	155	10	2007-Ⅱ区 C12-2	1溝 最上層第3層土 間の1	瓦器	瓶	口縁部一 底部	約5% 約10%	内面磨滅のミガキはやや細く1.5mm幅に磨滅する。焼成遺存やヤケ変化(熟土)。反転還元	
88	0849	08038	158	15	2007-Ⅱ区 C12-j11	1溝 中層 間の3以下	土師器	小皿	口縁部一 底部	約20% 約20%	扁平な底部からやや内湾する口縁部に延びる。口縁部の底に磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元	
89	0849	08038	159	15	2007-Ⅱ区 C12-j11	1溝 中層 間の3以下	瓦器	小皿	口縁部一 底部	約98% 100%	扁平な磨滅の著しい底部から斜めに外方に延びる口縁部に延びる。焼成遺存磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元	
90	0849	08038	160	18	2007-Ⅱ区 C12-j2	1溝 中層 間の3以下	瓦器	瓶	口縁部一 底部(肩台部)	約95% 100%	肩台の内湾する口縁部。体部からやや外反する口縁部に延びる。口縁部は1/2は外方に延びる。肩台は底縁から直湾して延びる。口縁部は内湾して延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋	
91	0849	08038	161	17	2007-Ⅱ区 C12-j2	1溝 中層 間の3以下	瓦器	瓶	口縁部一 底部(肩台部)	約70% 100%	肩台の内湾する口縁部。体部からやや外反する口縁部に延びる。口縁部は1/2は外方に延びる。肩台は底縁から直湾して延びる。口縁部は内湾して延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋	
92	0849	08038	162	34	2007-Ⅱ区 C11-k25	1溝 最上層第3層土 間の1	黒色土器A類	瓶	口縁部一 底部(肩台部)	約20% 約20%	内湾する口縁部。体部からやや外反する口縁部に延びる。口縁部は内湾して延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋	
93	0849	08038	166	38	2007-Ⅱ区 C11-k25	1溝 最上層第3層土 間の1	土師器	小皿	口縁部一 底部	約20% 約20%	磨滅の著しい底部から斜めに外方に延びる口縁部に延びる。口縁部は内湾して延びる。断面は2条の筋線、口口部筋方向。右回り。肩型3段筋	
94	0849	08038	165	23	2007-Ⅱ区 C12-j11	1溝 最上層	土師器	瓶	口縁部一 底部	約10% 約5%	扁平な底部から内湾する口縁部に延びる。口縁部の底に磨滅著しくヤケ変化(熟土)。反転還元	

遺物番号	発掘番号	発見回数	発掘者	出土遺物 発掘者	地区 地区区分	遺構番号・種類	遺構番号・種類	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
205	—	図版32	105	245	2006-Ⅰ区 E11-n-19	—	51 段状土 東側壁口 第7a層	瓦器	板	底部(両台部)	約60%	平均した厚みの底部から腰部に延びる。見込層文は幅3mm程く丸彫る連続線状。内面壁のミガキは不明。外壁は正三角形状。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
206	—	図版32	108	285	2006-Ⅰ区 E11-g-19	—	52 石状土塊 第7a層土塊	瓦器	三足釜	口縁部	5%以下	内湾して立ち上がり、口縁部で内側に丸く膨脹する。粘土に炭粉。炭石、石膏S、M多量含む。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
207	—	図版32	109	285	2006-Ⅰ区 E11-g-19	—	52 石状土塊 第7a層土塊	瓦器	三足釜	腹部	不明	206(第108)と同一個体。腹部外側に縦方向のヘラツテ調整。焼成遺存二次焼成のため緑化。未実測
208	—	図版32	110	257	2006-Ⅰ区 E11-h-23	—	51 谷状土 第7a層～c層 一様	須恵器	甕	天井部～口縁部	約10%	整った器形。天井部の約2/3は斜に回転へラツテ。内面壁は丸く膨脹。焼成遺存良好型。クワ口回転方向・右回り。未実測
209	—	図版32	111	269	2006-Ⅰ区 E11-h-19	—	51 谷状土 第7a層～c層 一様	瓦器	板	底部(両台部)	約50%	平均した厚みの底部から腰部に延びる。見込層文は幅3mm程く丸彫る連続線状。外壁は正三角形状。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
210	—	図版33	7	102	2006-Ⅱ区 E12-n-4	—	第2層系土塊 第3層系土塊 一様	須恵器 東条系	甕	口縁部	5%以下	器形が良く小型。クワ口回転方向・左回り。第1段階。未実測
211	—	図版33	8	126	2006-Ⅱ区 E12-n-2	—	第2層系土塊 第3層系土塊 一様	—	横切	口縁部	5%以下	粘土に炭粉。炭石3L程度含む。表面部中程5a層。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
212	—	図版33	9	125	2006-Ⅱ区 E12-k-3	—	第2層系土塊 第3層系土塊 一様	—	横切	口縁部	5%以下	粘土に炭粉。炭石3L程度含む。表面部中程5a層。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
213	—	図版33	10	171	2006-Ⅱ区 E12-k-1	—	第2層系土塊 第3層系土塊 一様	青磁	甕	口縁部	5%以下	色調揃った青磁。5GY7/1を呈する。通気漏れ。外壁は丸く膨脹。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
214	—	図版33	11	143	2006-Ⅱ区 E12-m1	—	第2層系土塊 第3層系土塊 一様	土師器	管状土師	—	約40%	外径13cm・内径0.5cm・高さ(3.3cm)・重量(4.6g)未実測
215	—	図版33	26	32	2006-Ⅱ区 E12-a5	—	第3層系土塊 一様	瓦器	小皿	口縁部～底部	約20%	平面的な底部から内湾する口縁部へ続く。口縁部は工具によるナデのため内湾する面を成す。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
216	—	図版33	27	89	2006-Ⅱ区 E12-a6	—	第3層系土塊 一様	瓦器	小皿	口縁部～底部	約25%	斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
217	—	図版33	28	93	2006-Ⅱ区 E12-n6	—	第3層系土塊 一様	瓦器	板	口縁部～底部	約10%	口縁部は斜め外方に延びる。内面壁のミガキは斜め約1mmややく用くされる。見込層文は不明。外壁は正三角形状。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
218	—	図版33	29	51	2006-Ⅱ区 E12-b7	—	第3層系土塊 一様	瓦器	板	口縁部～底部	約10%	内面壁のミガキはややく約2mm。かなり丸く用くされる。口縁部がかなり歪む。内湾面は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
219	—	図版34	33	74	2006-Ⅱ区 E12-n7	—	第3層系土塊 一様	土師器	土釜A	口縁部	約20%	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
220	—	図版34	35	56	2006-Ⅱ区 E12-n6	—	第3層系土塊 一様	瓦器	土釜	腹部	約10%	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
221	—	図版34	36	50	2006-Ⅱ区 E12-n7	—	第3層系土塊 一様	瓦器	土釜	腹部	5%以下	厚い底部から斜め外方に線形的に延びる底部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
222	—	図版34	38	12	2006-Ⅱ区 E12-k3	—	第3層系土塊 一様	須恵器	甕	口縁部	約10%	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
223	—	図版34	39	14	2006-Ⅱ区 E12-k1	—	第3層系土塊 一様	須恵器	甕	口縁部	約10%	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
224	—	図版34	42	9	2006-Ⅱ区 E12-n6	—	第3層系土塊 一様	青磁	小皿?	口縁部～底部	5%以下	外壁に斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
225	—	図版34	48	46	2006-Ⅱ区 E12-p8	—	第3層系土塊 一様	須恵器	甕	口縁部	約10%	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
226	—	図版34	50	43	2006-Ⅱ区 E12-p8	—	第3層系土塊 一様	白磁	角杯	腹部～底部	不明	遺存率が少ないが五角杯か。輪郭は乳濁色。底部に貫通孔あり。未実測
227	—	図版35	51	123	2006-Ⅱ区 E12-n3	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	須恵器	甕	口縁部～底部	約10%	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
228	—	図版35	52	144	2006-Ⅱ区 E12-n2	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	須恵器	甕	天井部～口縁部	約10%	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
229	—	図版35	53	136	2006-Ⅱ区 E12-a3	下部土塊含む	第5層土塊	須恵器	甕	基部～腹部	不明	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
230	—	図版35	54	133	2006-Ⅱ区 E12-n3	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	須恵器	甕	口縁部	不明	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
231	—	図版35	58	107 (136)	2006-Ⅱ区 E12-a4	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	瓦	平瓦	平瓦部	不明	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
232	—	図版35	59	174	2006-Ⅱ区 E12-n7	第3層系土塊 第4層系土塊	第5層土塊	瓦	平瓦	平瓦部	不明	口縁部は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
233	—	図版35	65	166	2006-Ⅱ区 E12-a2	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	瓦器	小皿	口縁部～底部	5%以下	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
234	—	図版35	67	104	2006-Ⅱ区 E12-n4	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	瓦器	甕	口縁部	約10%	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
235	—	図版36	71	168	2006-Ⅱ区 E12-11	一部。第3層系土塊 第4層系土塊	1層土 第5層土	須恵器	甕	腹部	不明	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
236	—	図版36	73	183	2006-Ⅱ区 E12-a4	—	第5層土塊	瓦器	板	底部(両台部)	約30%	厚みの整った底部。外壁は正三角形状を呈する。見込層文は幅3mm程く丸彫る連続線状。内面壁のミガキは不明。外壁は正三角形状。焼成遺存良好型(粘土土)。未実測
237	—	図版36	76	185	2006-Ⅱ区 E12-a3	—	第5層土塊	瓦器	小皿	口縁部～底部	約10%	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測
238	—	図版37	123	23	2006-Ⅱ区北平 E14-n1	第3層系土塊 一様	第5層土塊	須恵器	甕?	口縁部	不明	口縁部はややく内湾して立ち上がり端を丸く用くする。内面壁は斜め外方に延びる口縁部。表面部で焼成遺存やややく(粘土土)。未実測

2006～2008 藤並地区遺跡 出土遺物一覧

No. 6

遺物番号	発掘区画	発見回数	発掘時期	出土遺物発掘時期	地区区分	遺構番号・種類	遺構位置	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
239	—	図版37	124	16	2006-Ⅱ区北半 E14-n4	第3層土含む	——	調査部	円形	底部 (高台部)	約95%	厚みのある高台。腰部から直線して腰部に続く。外周全体に自然隆起付着。口内口外方向へ右回り、左回り。
240	—	図版37	128	31	2006-Ⅱ区北半 E13-n24 北半	第3層土を含む層	——	瓦器	小皿	口縁部一辺部	約20% 約20%	やや内湾する底部から腰腹の薄く、口縁部に延びる。焼成適度変化。数2点。未実測。
241	—	図版37	134	47	2006-Ⅱ区北半 E13-n25	第3層土を含む層	——	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面端が1/4目録。凸面は格子印。焼成適度よく観察。未実測。
242	—	図版37	143	57	2006-Ⅱ区北半 E14-n7	第3層土を含む層	——	土器類	土器 A	口縁部	不明	「く」の字に屈する口縁部。口縁部は内側上方へ湾み。数1点。数1点に長石・片石・チャート M・L。角縁を極めて多量含む。焼成適度二次焼成のため硬化。未実測。
243	—	図版37	144	58	2006-Ⅱ区南半	土器	36 (入牛瀬)	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面端が1/4目録。凸面は格子印。焼成適度よく観察。未実測。
244	—	図版38	151	33	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 上層・中層	黒色土器 A	瓶	体部	不明	数個の厚い瓶。二辺の縁子デ。未実測。
245	—	図版38	156	21	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 中層・下層 図の3以下	黒色土器 A	瓶	口縁部	約5%	口内口外方向へ右回り。H型とF型。未実測。
246	—	図版38	157	34	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 中層・下層 一部最下層含む	土器類	瓶	口縁部	不明	湾曲した口縁部「く」の字に屈する口縁部。内湾端はへり状になる。口縁部は平。数1点に8mmの砂を含む。未実測。
247	—	図版38	163	14	2007-Ⅱ区 C12-2	——	1溝 中層・下層 図の3以下	瓦器	瓶	底部 (高台部)	約40% 約100%	縁や内湾する底。体部。見込縁は不明。内湾端のミガヒはよく4mm。内外湾端減衰して調整。口縁部は平。数1点。未実測。
248	—	図版38	169	39	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 最下層	黒色土器 A	瓶	口縁部一辺部	約5% 約5%	やや内湾する底部から腰腹が口縁部。口縁部へ続く。口縁部はやや平。厚み。内外湾端減衰しているため調整不明。未実測。
249	—	図版39	171	47	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 最下層	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は湾曲し、口縁部。凸面は格子印。焼成適度よく観察。厚み2-2.2cm。未実測。
250	—	図版39	172	36	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 最下層	瓦	平瓦	平瓦部	不明	凹面は格子印。口縁部。後縁方向のへり状工具の当たり。凸面は湾曲し、口縁部。口縁部は平。厚み2-2.2cm。未実測。
251	—	図版39	181	3	2008-Ⅰ区 西側 1/4 西 F12-a 10-11	包合層第3層土	——	土製品	土鉢	——	100%	細長の管状土器。焼成適度良好。数1点。口縁部は湾曲。長さ3.8cm・外径0.7cm・内径0.25cm・重量2.2g。未実測。
301	—	図版39	118	81	2006-Ⅱ区 E12-n4	第3層土を含む層	——	旧石器	鋭長石片	断片	100%	非常に形が揃った鋭長石片。表面に放射状石花が認められる。長さ3.1cm・幅2.2cm・厚さ1.1cm・重量5.0g・石材：赤色チャート。未実測。
302	—	図版39	119	71	2006-Ⅱ区 E12-n5	第3層土を含む層	——	旧石器	鋭長石片	断片	100%	長さ3.7cm・幅4.9cm・厚さ0.6cm・重量19.2g・石材：サズカイト。未実測。
303	—	図版39	120	31	2006-Ⅱ区 E12-n6	第3層土を含む層	——	旧石器	鋭長石片	断片	100%	幅広い石片鋭長石片。長さ3.7cm・幅3.1cm・厚さ0.6cm・重量10.2g・石材：黒色チャート。未実測。
304	—	図版39	264	50	2008-Ⅱ区 C12-r1	——	30土坑 埋土一坑土器 探見	旧石器	鋭長石片	断片	100%	長さ3.7cm・幅2.5cm・厚さ1.6cm・重量13.6g・石材：サズカイト。未実測。
305	—	図版39	265	59	2008-Ⅱ区 C12-12	調査区南側 検定調査	自然湧出	旧石器	鋭長石片	——	不明	長さ(2.5cm)・幅4.5cm・厚さ0.8-0.9cm・重量(11.8g)・石材：黒色チャート。未実測。
306	—	図版40	234	147	2008-Ⅱ区 E12-a18東側 E12-a18東側	第4層土を含む層	——	石器	石鉢	——	約98% ほぼ完全	縦文。凹面端。表面の土層は薄い。先端一辺部。長さ(2.3cm)・幅1.4cm・重量(10.8g)・石材：サズカイト。未実測。
307	—	図版40	210	39	2008-Ⅱ区 1/2東側 E12-k20	包合層第4層	——	調査部	——	——	約90%	口内湾。磨滅のため縦文不明。外径2.4cm・幅0.35cm・内径1.6cm・厚さ0.05cm・重量0.1cm・重量(2.8g) 未実測。
308	—	図版40	15	82	2006-Ⅱ区 E12-n5	第3層土を含む層	——	弥生土器	高杯	基部	不明	凹面端が平。ややへり。数1点にチャート・長石・石炭・M型土器を多量含む。二次焼成して変色。未実測。
309	—	図版40	132	51	2006-Ⅱ区北半 E14-m1	第2層土を含む層	——	弥生土器	壺	底部	不明	凹面端が平。ややへり。数1点にチャート・長石・石炭・M型土器を多量含む。二次焼成して変色。未実測。
310	—	図版40	12	139	2006-Ⅱ区 E12-n2	第3層土を含む層	——	硬石	磁石	底部	100%	凹面端に格子印。縦文あり。幅4.3cm・長さ5.1cm・重量2.7cm・重量84.8g・石材：粗粒砂岩。未実測。
311	—	図版40	114	256	2008-Ⅰ区 E11-g23	——	51谷状溝 第7a層-c層 一坑	硬石	石皿	——	不明	形状が不明。弥生時代の石皿と判断。縦文時代の可能性も。石材の断面に横り線が認められる。長さ(6.4cm)・幅(4.8cm)・厚さ(2.4-4.1cm)・重量(21.4g)。石材：粗粒砂岩(石炭粒多い)。未実測。
312	—	図版40	44	60	2008-Ⅱ区 E12-n5	第3層土を含む層	——	硬石	磁石	——	不明	中層。湾曲二面使用。石材：粗粒砂岩。幅(2.4cm)・長さ(4.5cm)・厚さ(0.3-1.4cm)・重量(15.1g)。未実測。
313	—	図版40	45	87	2006-Ⅱ区 E12-a7	第3層土を含む層	——	硬石	磁石	——	不明	中層。中央部に格子印。縦文が集中して認められる。石材：粗粒砂岩。幅(9.7cm)・長さ(9.8cm)・厚み(1.8cm)・重量(146g)。未実測。
314	—	図版40	46	58	2006-Ⅱ区 E12-n5	第3層土を含む層	——	硬石	磁石	——	不明	中層か？。二面使用。一部焼結。石材：中粒砂岩。幅(4.3cm)・長さ(7.7cm)・厚さ(1.2cm)・重量(53g)。未実測。
315	—	図版40	47	76	2006-Ⅱ区 E12-a7	第3層土を含む層	——	硬石	磁石	——	不明	中層か？。二面使用。石材：中粒砂岩。石材として数層。幅(3.0-8.0cm)・長さ(19.8cm)・厚さ(2.5cm)・重量(228g)。未実測。
316	—	図版40	164	21	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 中層・下層 図の3以下	石製品	石棒?	——	不明	先端部がやや平らな面を成す。長さ(21.7cm)・幅(7.0-8.5cm)・厚さ(5.3cm)・重量(1570g)・石材：粗粒砂岩。未実測。
317	—	図版40	173	39	2007-Ⅱ区 C11-n25	——	1溝 最下層	硬石	磁石	——	100%	片側の先端部に格子印あり。長さ16.5cm・幅7.2cm・厚さ3.6cm・重量56g・石材：砂岩。未実測。
318	—	図版40	174	31	2007-Ⅱ区 C12-11	——	1溝 最下層 図8-9	硬石	磁石	——	不明	断面は二面。一面は凸面が湾み。一面は若干つづつが平坦面を成す。被焼結のため一部黒ずむ。長さ(11.5cm)・幅(7.0cm)・厚さ(4.8cm)・重量(1548g)・石材：砂岩。未実測。
319	—	図版40	256	14	2008-Ⅱ区 C12-a4	——	1粘土層掘削 埋土一坑土器	硬石	磁石	——	不明	断面は二面。一面は凸面が湾み。一面は若干つづつが平坦面を成す。被焼結のため一部黒ずむ。長さ(11.5cm)・幅(7.0cm)・厚さ(4.8cm)・重量(1548g)・石材：砂岩。未実測。

報告書抄録

ふりがな	ふじなみらくいせき
書名	藤並地区遺跡
副書名	県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	土井孝之
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8404 和歌山市湊 571-1 TEL 073-433-3843
発行年月日	西暦 2012年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° N	東経 ° E	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふじなみらくいせき 藤並地区遺跡	おひやほりあやひだん 和歌山県有田郡 有田川町 はらき ありとうおうど ありて 土生・明王寺・水尻	303666	吉備地区 32	34° 3' 22"	135° 12' 2"	第1次調査 20061219～ 20070316 第2次調査 20070502～ 20070713 第3次調査 20080501～ 20080815 第4次調査 20081017～ 20081226	1,807 608 1,472 765	吉備金屋線 道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
藤並地区遺跡		旧石器時代	自然流路（土砂流による粗砂細礫層堆積）、土坑			ナイフ形石器・スクレイパー・錐状石器、縦長剥片・横長剥片など	少量ながら、ナイフ形石器が主体となる石器群。	
		飛鳥・奈良時代	掘立柱建物			土師器（碗・甕）、黒色土器（碗）、須恵器（杯・蓋・壺・甕・陶棺）、瓦（平瓦）など	遺物の殆んどが、中世の水田耕作土・踏み込みから出土。	
	散布地	平安時代	掘立柱穴、溝、井戸			土師器（碗・小皿）、黒色土器（杯・碗）など	当該期の出土遺物の地区が 2007～Ⅲ区に限定。	
		鎌倉時代	粘土採掘土坑、谷状落ち込み、水田跡			土師器（皿・小皿・土釜）、瓦器（碗・小碗・小皿・甕）、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁碗、白磁碗）など	遺物全体の中では、比率的に最も多い段階。二次的な水田耕作土からの出土。	
		室町時代	井戸、石列状遺構、水田跡、噴砂			土師器（土釜）、瓦質（甕・火舎）、陶器（備前・志野）、鉄砲弾	二次的な水田耕作土からの出土。	
要約	2007－ⅠⅢ区、2008－Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅵ区の下部層で検出した後期旧石器時代遺物を包含する粗砂細礫層の成因については、南側に位置する 1990 年調査 M 地区及び土生池遺跡（25）周辺の谷間からの土砂流による堆積とみられ、ナイフ形石器石器群という遺物の単純組成から一定の時期を反映したものと認めうる。後期旧石器時代の石器他の組成は、サヌカイ製ナイフ形石器・サヌカイ製縦長剥片・チャート若しくは凝灰岩（硬質頁岩）製縦長剥片・サヌカイ製錐状石器、その他のサヌカイ・凝灰岩（硬質頁岩）・チャート製剥片がある。 飛鳥時代末～奈良時代については、一定の遺物量と共に広域に散布する遺物の大半が二次的な中世遺物包層（水田耕作土）からの出土であるため、全ての地区において密場からの集積を反映したものではないことが確実視されることとなった。出土遺物の中には飛鳥Ⅲ区段降の須恵器が一定量認められることから、周辺域に展開する須恵器窯の操業を今少し遡って考える必要を認めうる。一方、2008－Ⅱ区において、単独で検出された奈良時代の掘立柱建物は、関連時期の遺物が全くないことからその位置付けを明確にすることができない。 平安時代後期には、掘立柱や溝を検出した 2007－Ⅲ区のみ当該期の遺構・遺物が集中して認められることから、東側に水路を挟んで展開する未周知の道路に関与することが濃厚であると考えられる。 平安時代末～鎌倉時代前期の様相については、2007－Ⅲ区の良い良好な遺物群から当該地区周辺を平安時代後期から続く集落の拠点として、2007－Ⅲ区以西の調査地は中世における水田開発による二次的資料の包含（包含層第3層・第4層）として位置付け理解しうる。							

写真図版





1 2006-I 区 調査遺構全景(北東上空から)



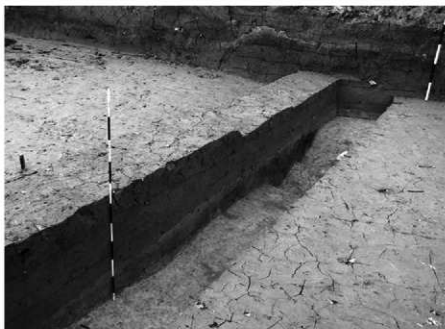
2 2006-I 区 調査遺構全景(南西から)



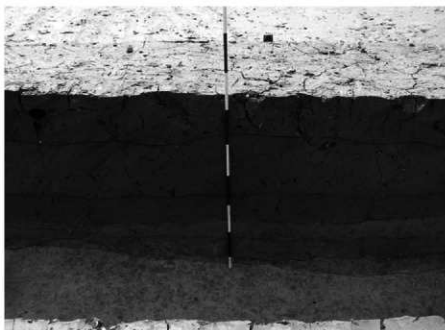
3 2006-I 区 粘土採土掘坑群と51谷状落ち屑部(北東から)



1 2006-I区 51谷状落ち断面土層全景(東南東から)



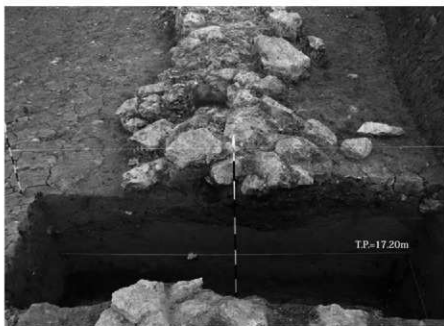
2 2006-I区 51谷状落ち北半部断面土層細部(東南東から)



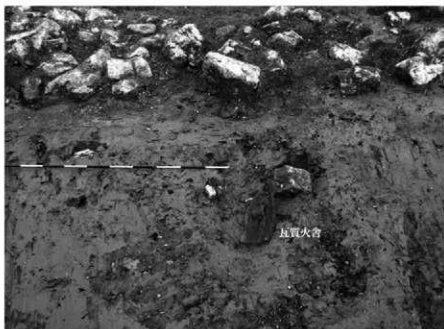
3 2006-I区E11-h・i22 51谷状落ち断面土層細部(北東から)



1 2006-I 区 52石列状遺構(南南東から)



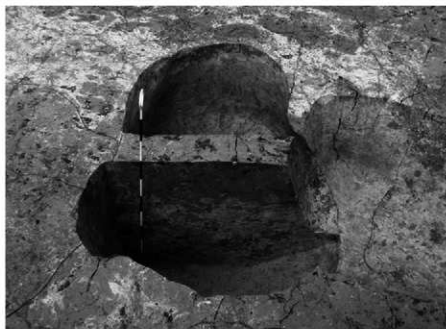
2 2006-I 区E11-g19 52石列状遺構の断面状況(南南東から)



3 2006-I 区E11-g19 52石列状遺構に関する遺物出土状況(西南西から)



1 2006-I区E11-f23 粘土採掘土坑群の状況(東北東から)



2 2006-I区E11-f23 53粘土採掘土坑東西断面土層(南南東から)



3 2006-I区E11-h25 調査区南東壁第6層系踏み込み遺構の
遺物出土状況(北西から)



1 2006-Ⅱ区 調査遺構全景(真上から:右側が北)



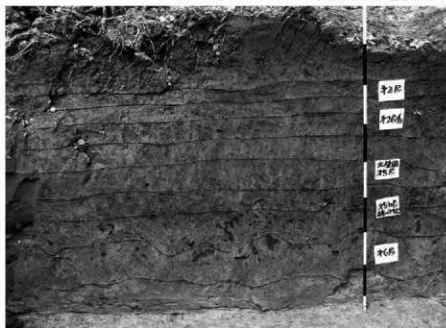
2 2006-Ⅱ区 調査遺構全景(北東から)



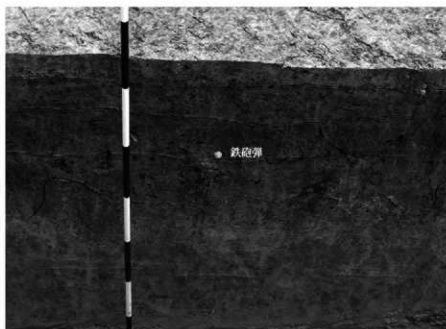
3 2006-Ⅱ区 土坑群の堀削状況(西南西から)



1 2006-Ⅱ区E12-05・6 6土坑東西断面土層(南から)



2 2006-Ⅱ区E12-i1 調査区北壁断面土層細部(南から)



3 2006-Ⅱ区E12-q5 鉄砲弾出土状況細部(南南西から)



1 2006-Ⅲ区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)



2 2006-Ⅲ区北半 調査遺構全景(南から)



3 2006-Ⅲ区北半 土坑群掘削状況(南東から)



1 2006-Ⅲ区南半 調査遺構全景(真上から:左側が北)



2 2006-Ⅲ区南半 調査遺構検出状況:小溝群(北北東から)



3 2006-Ⅲ区南半 地震による液状化の砂脈(北北西から)



1 2007-1区北半 調査遺構全景(真上から:右側が北)



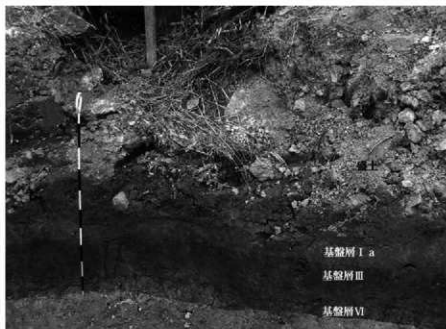
2 2007-1区北半 調査遺構全景(南から)



3 2007-1区北半E13-x・y・6・7 土坑群(東から)



1 2007-I区北半E13-y7 1土坑調査区西壁断面土層(東から)



2 2007-I区北半E13-x・y1 調査区北壁断面土層(南から)



3 2007-I区南半 調査遺構全景(北上空から)



1 2007-I 区南半 調査遺構全景(南から)



2 2007-I 区南半E13-x9・10 13土坑東西断面土層(北から)



3 2007-I 区南半E13-y7 23土坑断面土層:調査区西壁(東から)



1 2007-Ⅱ区 調査遺構全景(北上空から)



2 2007-Ⅱ区 調査遺構全景(南から)



3 2007-Ⅱ区 土坑群東西断面土層(北北東から)



1 2007-Ⅱ区E13-o6 5土坑東西断面土層(北北東から)



2 2007-Ⅱ区E13-o・p6・7 19・18噴砂の砂脈検出状況(北東から)



3 2007-Ⅱ区E13-p7 18噴砂と中世小溝の関係細部:調査区西壁断面土層(東から)



1 2007-Ⅲ区 調査遺構全景(真上から:下側が北)



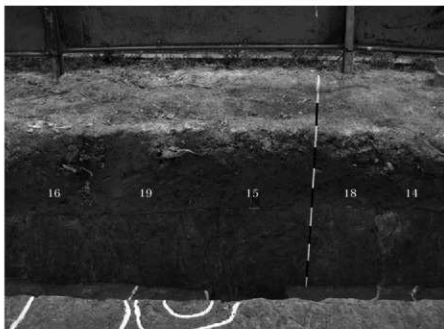
2 2007-Ⅲ区 調査遺構全景(東から)



3 2007-Ⅲ区 1溝完掘状況と6土坑検出状況(北西から)



1 2007-Ⅲ区C12-j1・2 1 溝断面土層(北西から)



2 2007-Ⅲ区C12-g1 柱穴群断面土層:調査区北東壁(西南西から)



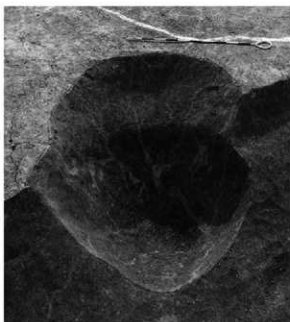
3 2007-Ⅲ区C11-k25 5 井戸掘削状況と調査区北壁断面土層(南東から)



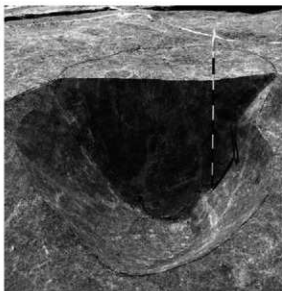
1 2007-Ⅲ区C11-k25・C12-k1 6土坑掘削状況(北北東から)



2 2007-Ⅲ区C11-k25・C12-k1 6土坑断面土層(北北東から)



3 2007-Ⅲ区C12-j1 3土坑(東から)



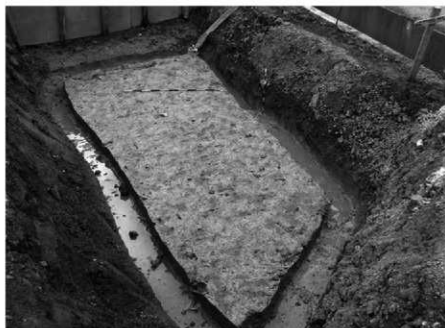
4 2007-Ⅲ区C12-j1
3土坑南北断面土層(東から)



1 2008-Ⅰ区・Ⅳ区 調査遺構全景デジタルモザイク(真上から:上側が北)



2 2008-Ⅰ区西側西 水田区画検出状況(南南西から)



3 2008-Ⅰ区西側東 水田踏み込み検出状況(東から)



1 2008-I区東側東 水田踏み込み検出状況(東北東から)



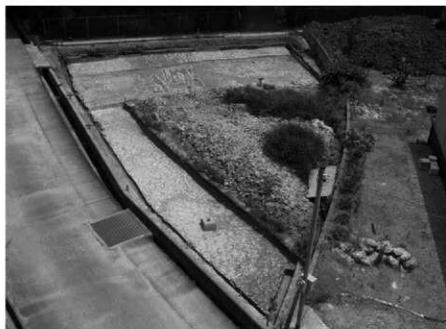
2 2008-I区東側東F12-e7 水田踏み込み検出状況細部(東北東から)



3 2008-I区西側東 調査区北東壁断面土層細部(南西から)



1 2008-Ⅳ区 調査遺構全景(真上から:上側が北)



2 2008-Ⅳ区 水田面掘下げ状況(西北西から)



3 2008-Ⅳ区東側 調査遺構全景(北から)



1 2008—VI区南西半・南西端 調査遺構全景(北上空から)



2 2008—VI区南西半 1 溝全景(西南西から)



3 2008—VI区南西端 調査遺構全景(南南西から)



1 2008—Ⅵ区北東半 遺構検出状況全景(南西から)



2 2008—Ⅵ区北東半F12・o13 11土坑掘削状況・南北断面土層(北寄り西から)



3 2008—Ⅵ区北東半F12・n13・o14 調査区南東壁断面土層(北西から)



1 2008-Ⅱ区東側 調査遺構全景(北から)



2 2008-Ⅱ区東側E12-m19周辺 第3層下面遺構(西から)



3 2008-Ⅱ区東側E12-m19 包含層第3層内遺物出土状況(北から)



1 2008-Ⅱ区西側 調査遺構全景(東上空から:右側が北)



2 2008-Ⅱ区西側 調査遺構全景(北から)



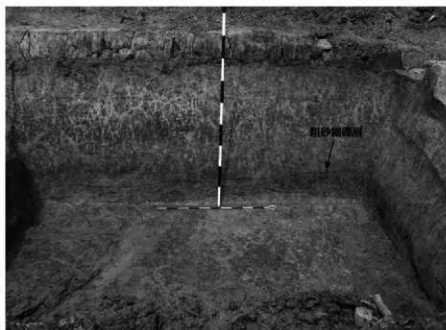
3 2008-Ⅱ区西側E12-o・p17~19 掘立柱建物1(東から)



1 2008-II区西侧E12-o17 掘立柱建物1 33柱穴南北断面土層(西から)



2 2008-II区西侧E12-o.p22 21土坑(南南西から)



3 2008-II区西侧E12-q22・23 補足調査 調査区西壁断面土層(東から)



1 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(真上から:手前右下が北)



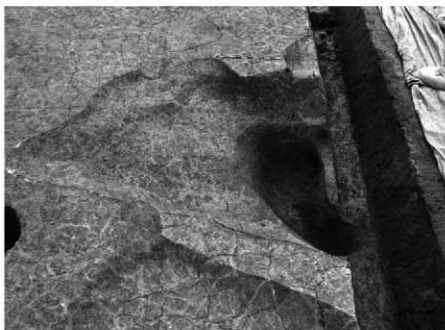
2 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(西南西から)



3 2008-Ⅲ区 調査遺構全景(東北東から)



1 2008-Ⅲ区東半 土坑群・落ち遺構全景(西南西から)



2 2008-Ⅲ区C12-t1 10土坑(東北東から)



3 2008-Ⅲ区C12-s・t2 補足調査 21土坑調査区南壁断面土層(北北西から)



1 2008-Ⅶ区上位面 調査遺構全景(東北東から)



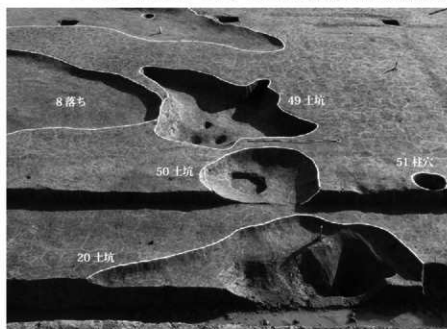
2 2008-Ⅶ区上位面東半部 土坑群・落ち遺構全景(西から)



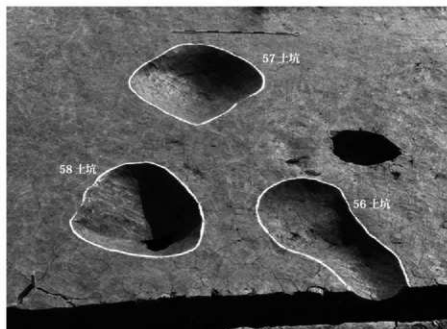
3 2008-Ⅶ区上位面東半部 調査遺構全景(西南西から)



1 2008—Ⅶ区上位面 8落ち・8落ち埋土掘削後の遺構(東北東から)



2 2008—Ⅶ区上位面C12-s2・3周辺 20・49・50土坑・51柱穴(北北西から)



3 2008—Ⅶ区上位面C12-o・p1 56・57・58土坑(北北西から)



1 2008—Ⅶ区下位面 調査遺構全景(真上から:手前が北北西)



2 2008—Ⅶ区下位面 粗砂細礫層下面遺構全景(東北東から)



3 2008—Ⅶ区下位面C12-r3・4 101土坑(南寄り西から)



1 2008—Ⅶ区下位面 調査区北壁断面土層(南南西から)



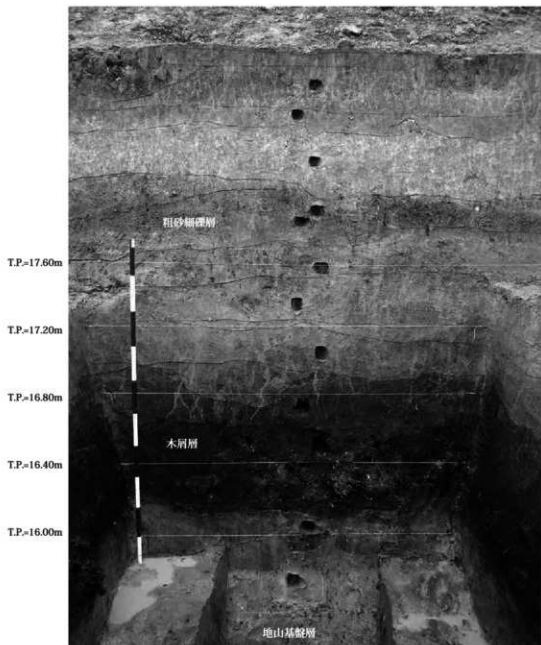
2 2008—Ⅶ区下位面 調査区南壁断面土層 調査区東端から10～20m(西北西から)



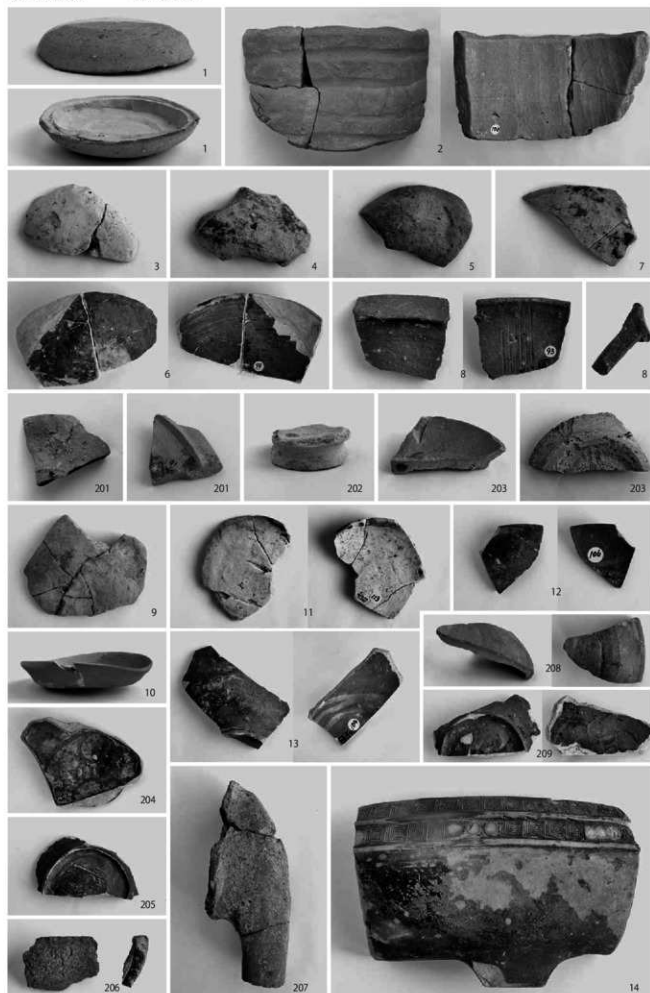
3 2008—Ⅶ区下位面 調査区南壁断面土層 調査区東端から20～35m(西北西から)



1 2008—Ⅶ区下位面C12-p3 補足調査A 調査区南壁断面土層(北北西から)

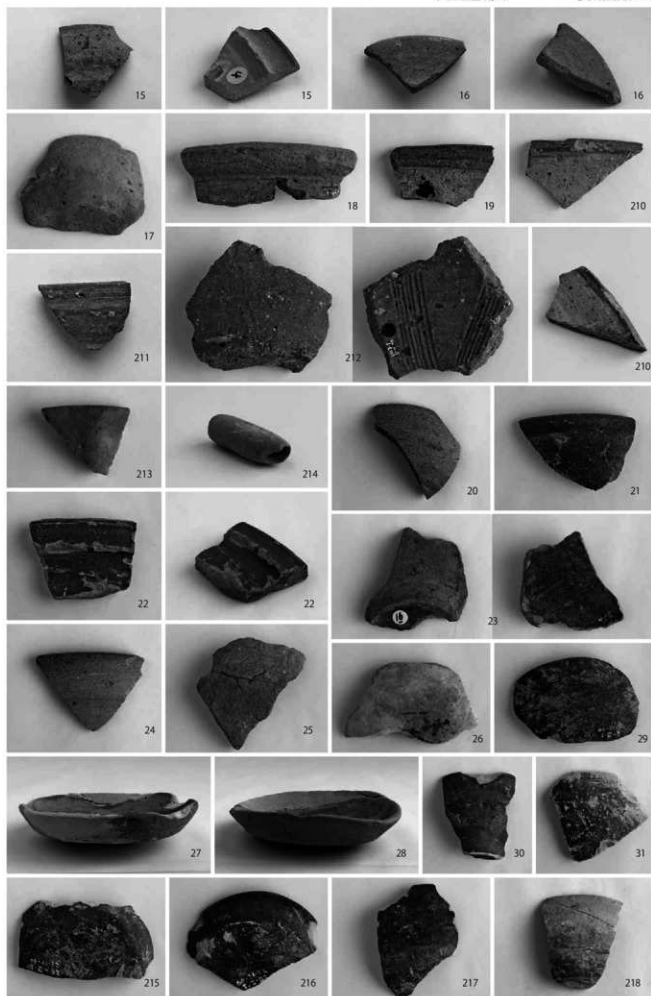


2 2008—Ⅶ区下位面C12-s-t4 補足調査B 調査区南壁断面土層(北北西から)



1・2・6:2006-1区 基盤層直上踏み込み遺構、3～5・203:2006-1区 51谷状落ちより上位層、7:2006-1区
 54土坑最上層、8:2006-1区 第5層系一括、9・10・12・13・204・205:2006-1区 51谷状落ち第7a層、11:2006-1区
 51谷状落ち第7c層、14:2006-1区 51谷状落ち第7b層、201・202:2006-1区 第5層系一括、206・207:2006-1区
 52石列状遺構第5層礎多量、208・209:2006-1区 51谷状落ち第7a層～c層一括

図46に対応

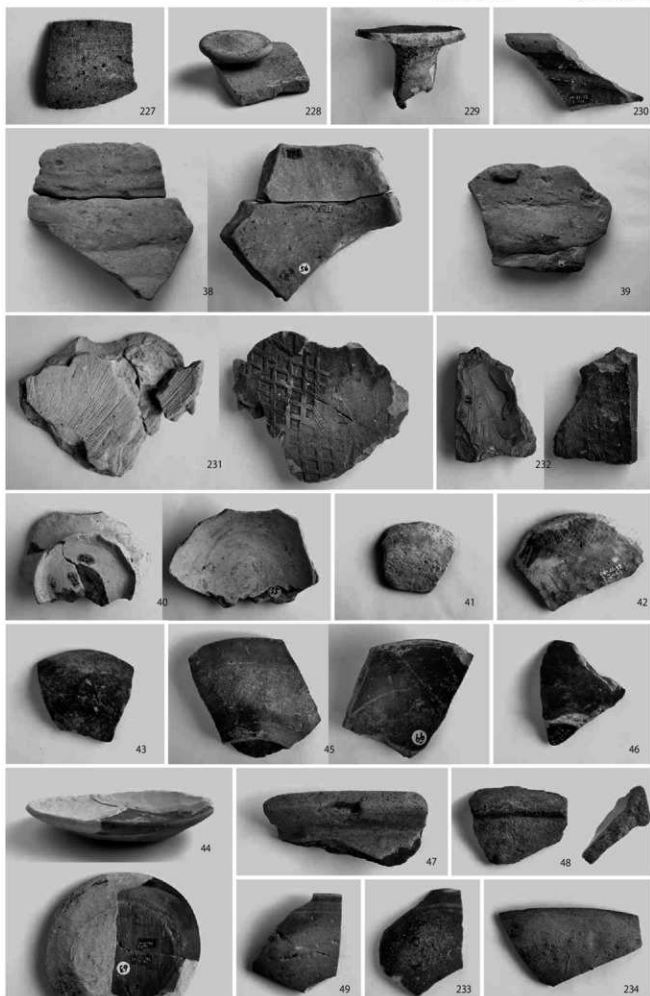


15～17・19・210～214:2006-Ⅱ区 第2層系・第3層系包含層一括、
 18:2006-Ⅱ区 第2層系～第5層系一括、
 20～31・215～218:2006-Ⅱ区 第3層系包含層一括



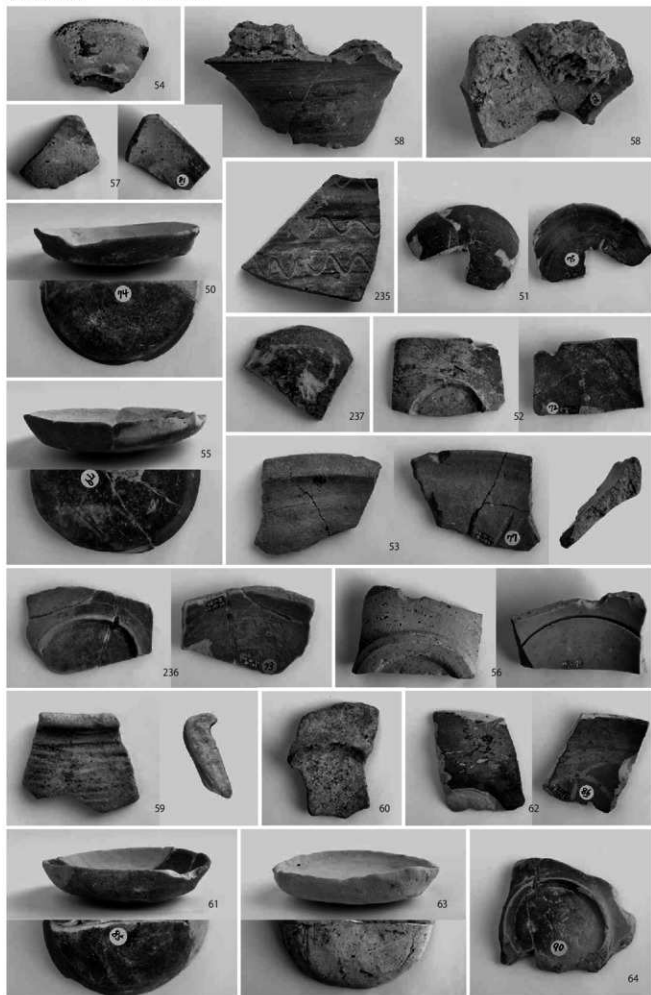
図47に对应

32~37・219~224:2006-Ⅱ区 第3層系包含層一括、
 225:2006-Ⅱ区 第3層系包含層下部、226:2006-Ⅱ区 第3層系包含層上部

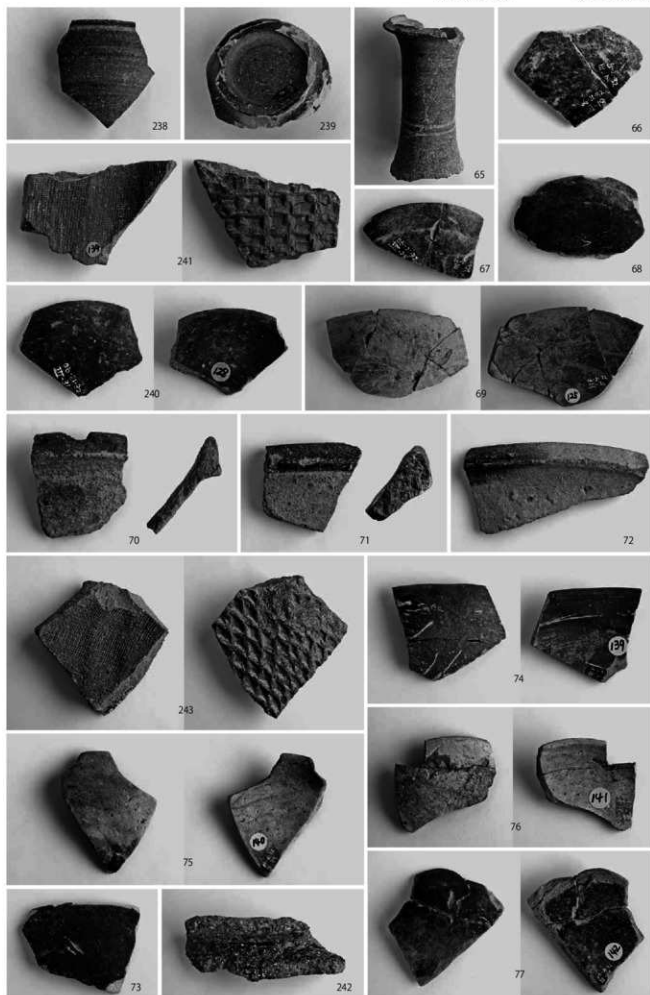


38～49・227～231・234:2006-Ⅱ区 1 落ち第5層系一括・一部第3層系包含層含む。
232:2006-Ⅱ区 第5層除去面 踏み込み一括

図47に対応



50～53・236・237:2006-Ⅱ区 1 落ち第5層系・第6層含む, 54～56:2006-Ⅱ区 1 落ち第5層系・下部遺構含む,
 57～59:2006-Ⅱ区 1 落ち第5層系下部, 60～62:2006-Ⅱ区 1 落ち第6層系, 63・64:2006-Ⅱ区 12土坑、
 235:2006-Ⅱ区 1 落ち第5層系・第3層系包含層下部含む



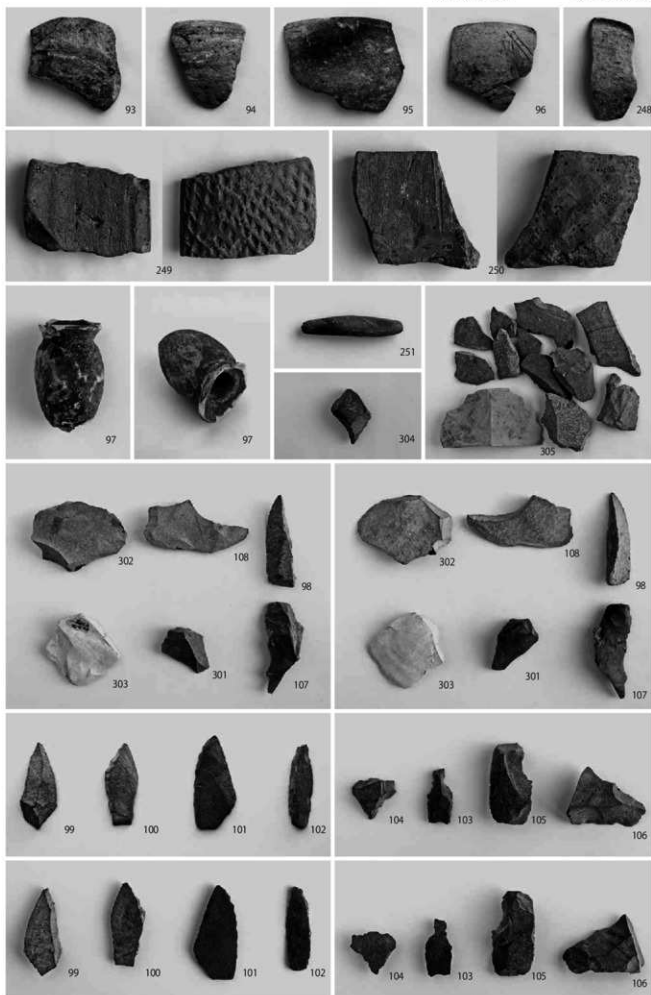
65~72・238~241:2006-Ⅲ区北半 第3層系包含層、73~77・242・243:2006-Ⅲ区南半 各小溝

図8に対応



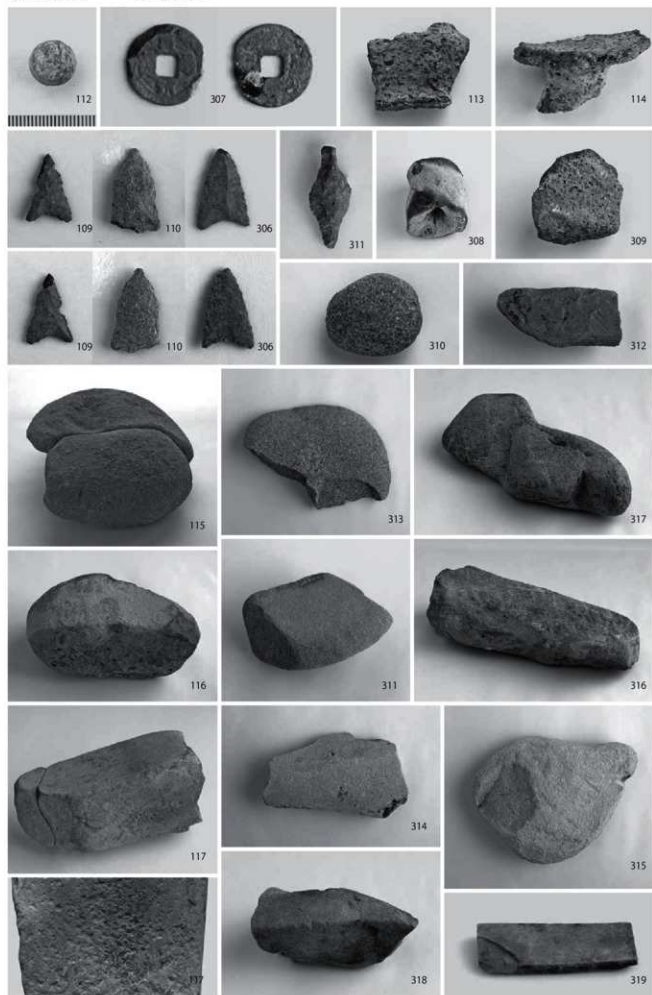
83・86:2007-Ⅲ区 1 溝一括, 84・85・244:2007-Ⅲ区 1 溝上・中層, 87:2007-Ⅲ区 1 溝最上層,
88～92・245～247:2007-Ⅲ区 1 溝中・下層

図9に对应



93～96・248～250:2007-Ⅲ区 1 溝最下層, 97:2008-Ⅱ区 包含層第3・4層, 251:2008-Ⅰ区 第3層系包含層,
 98・107・108:2006-Ⅱ区 1 落ち, 99～106:2008-Ⅶ区下位面 粗砂細砂層, 301～303:2006-Ⅱ区 第3層系包含層,
 304:2008-Ⅲ区 30土坑, 305:2008-Ⅲ区下位面 粗砂細砂層

土器
 図49に対応
 旧石器
 図50に対応



109:2006-Ⅱ区 1落ち、110:2006-Ⅱ区 第3層系包含層上部、111:2006-Ⅲ区 第3層系、112:2006-Ⅱ区 第3層系包含層下部、113・114・308・312~315:2006-Ⅱ区 第3層系包含層、115・309:2006-Ⅲ区 第3層系包含層下部、116:2006-Ⅲ区 15土坑、117・316~318:2007-Ⅲ区 1溝、306:2008-Ⅱ区 第4層系踏み込み、307:2008-Ⅱ区 包含層第4層、310:2006-Ⅱ区 第2層系・第3層系包含層上部、311:2006-Ⅰ区 51谷状落ち、319:2008-Ⅲ区 1粘土探掘坑

図51に对应

藤並地区遺跡

－県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2012年3月19日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市湊 571- 1

印刷・製本：株式会社協和
和歌山県海南市赤坂 5-3

